この素晴らしい世界でゆんゆんのヒモになります

クロ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死後の世界で青髪の女神さまに彼女を願ったら、ヒモになってました。

ゆんゆんとパーティーを組んで一緒に友達を作る話。

目次

第一章
第一話 1
第二話 19
第三話 28
第四話 42
第五話 50
第六話 61
第七話 71
第八話 79
第九話 89
第十話 100
第十一話 112
第十二話 121
第十三話 132
第十四話 141
第十五話 149
第十六話 161
最終話 179
第二章
第一話 191
第二話 203
第三話 215
第四話 226
お知らせ 237

第一章
第一話

「ようこそ死後の世界へ。私は、あなたに新たな道を案内する女神です」
「ええ……？」
本当に、いつの間にか、見知らぬ場所で椅子に座ってた。
目の前には美麗で透き通る水色の髪の女神を名乗る女性もまた、大理石の椅子に座っている。
「あの、なんですこれ。あなた誰です？　というか死後の世界って……やっぱり死んだんですか俺は」
「はい死にました。というわけで早速ですがあなたには三つの選択肢があります。あっ、最初に言っておくけど、元の世界にそのまま戻ることはできませんから」
「あー……そうでしょうね。それは、正直覚悟してました。それより本当に死んだら神様に会えることに驚いてますよ。ええと……神様なんですよね？」
「私が神でなくてなんなのよ。もっとも、創造神様とか天使とか、あなたたちが神と呼ぶ存在はいっぱいいるけどね」
「そうですか。しかし、俺は死んだのかー……」
覚えている。
思い返せば、いまの高校に進学したのが全ての間違いだった。
配属されたクラスがひどかった。一年生の春はそうでもなかったのに、時間が経つにつれ、いわゆる不良と呼ばれる存在が仲間を増やしていく。
幸か不幸か、その頃はあまり人付き合いをしてこなかったせいで、絡まれることこそなかった。
友達もいなかったけど……一人も……
事件が起きたのは最後の一年のこと。
クラスメートであった不良に連れ出された。

どういった経緯かは知らないが、売り言葉に買い言葉で始まった喧嘩に巻き込まれたらしい。
意味も分からず、不良の一人から逃げ出すなよと釘を刺されていた。しかし体格の違いすぎる体育会系の不良達の残虐な争いを目の当たりにして。
こんな所にいられるか！　……と、車道に飛び出したところまではよかった。
その時に、こっそり逃げ出したことがばれたのだろう。背後から自分の名を叫ぶ身内の声に足が竦み。
すぐ横で光と、クラクションが鳴り響き。
それで轢かれて死んだ。
俺の人生って一体……
あんなことで死んだのか、という悲しさもある。
しかし正直あのまま生きていても日陰者として隠れて生きていくだけだったから、未練が思ったほどない。なさすぎて、自分でも驚くくらいだ。
親も冷たく、友人なんて一人もいなかった。
大学なんて行く余裕もない。人生なんてこんなものだろうか。
「で、時間も押してるし説明を続けるわよ。気持ちは整理できた？」
「はぁ。お願いします」
「あなたが選べるのは、このまま元の世界に赤ん坊から生まれ変わるか、天国に行くか。それか、今まで住んでいたのとは違う世界に行くか。この三つよ！」
あんな生前ではあったが、死んだ方がマシ、とまで思ったことはない。
でも……天国、異世界かあ。もとの世界で生き返るより、そっちのほうがいいな。絶対。
「天国なんて本当にあるんですか。それに違う世界、異世界ってやつについて聞きたいんですが。女神様？」
「この三つの中なら、私のオススメは異世界ね。赤ちゃんになったら今までの記憶全部消えちゃうし、天国なんて自由だけどな～んの娯楽

のない、あんな場所面白くもなんともないわ。
それに比べ、異世界は記憶も引き継げるし、今なら転生特典で女神特別サービスッ!! たった一つだけ、好きなものを持っていける権利をあげちゃいます！ あ、これ私手作りの死後進路ガイドブック。読む？」
め、女神様が天国を〝あんな場所〟呼ばわりか。
透き通るように綺麗な水色の髪の女神様に手渡された、豪華な装飾の施されたガイドブックを捲りながら考える。
けど確かに、生まれ変わって記憶がなくなるのは……死んだ後とはいえ何かすごく嫌だ。かといって天国もそう言われた後じゃ行く気がなくなった。うわ、マジで何もねえ。ネットがないのはちょっとわかってたけど、ゲームどころかオセロみたいなボードゲームすらない。こんなところ行く奴いるのか？
それに比べて……おおっ、異世界はすごくよさげに見える……これも、これも!! ……あれ。異世界に行くように誘導されてないか？
この死後進路ガイドブック。明らかにページ数に差が……。
「……ちょっと、はやく決めてよね。今日、私のとこに来るの、あんただけじゃないんだから。こっちも忙しいの。あなたみたいな迷える魂がいっぱい後ろに控えてんの。このままだと残業代なしの時間外労働になっちゃうのよ、わかる？」
「あ、ああすみません。じゃあ……異世界行きで。残業代とかあるんですね」
「わかったわ、異世界ね！ はぁ、これで今日の女神ノルマも終わりっ。ほんと面倒ね、異世界に送り込まなきゃいけないのは」
おい待て。今面倒って言ったか、この青髪女神。
「さ、じゃあ次は何を持って行くかを決めましょう、もう見たと思うけど。で、何を持ってくの？ 異世界は過酷だから。何でもいいからさっさと決めてちょうだい。強力な固有スキルとか、魔剣とか。別にそこに書いてあるものじゃなくても、言ってみなさい。この女神様が叶えてあげるわ！」
「なんか騙された気が……まあいいや。ちょっと悩ませてください」

「どうせ悩んでも無駄だと思うけど、いいわ。一分だけあげるから、はやく決めてちょうだい」
異世界に行くことが決定してしまったらしく、女神様が「いーち、にー、さーん」とカウントが始まってしまった。
ああ！　もう後には引けない。何だ、何にする？
魔剣がいいのだろうか。それとも固有スキル？
……固有スキルって、何でもいいのか。炎を出せたり、氷を出せたり。
あ、いや待て、異世界には魔法があるって書いてあった。
ならもっと別のものが……いっそステータスアップとかでも……
「まーだー？　早くしないと、こっちで勝手にランダムに決めちゃいますけどー？」
「ちょ、待て待てちょっと待て！」
この女神様がせっかちなのか、それとも本当に後がつかえているのか。
なんか怪しい感じがする神様だが、死んだ俺に転生のチャンスをくれている以上、悪い存在ではないと思う。できるだけ女神様の意向に反することは……
……あっ、そうだ！
「あ、あの。女神さまにこんなコト言うのもあれなんですけど……ずっと叶えて欲しい願いがありまして」
「何よ。ウダウダ言ってないで、さっさと言ってくれないかしら？」
「前の世界で……その、彼女ができなかったもんで。その、異世界に行ったら彼女ができるってのは駄目ですかね？」
「はぁ？　へー、ふーん。なるほど、そうきましたか。いるのよねー、あんたみたいな努力もせずに、前世で足りなかった愛情と性欲満たすために他力本願なお願いをしてくるヤツ。はぁー……」
グサッ。女神の憂鬱そうなため息は心臓を一突きした。
「できれば魔王退治に使える能力がいいんだけど……ま、いいわ。その願いなら叶えてあげられるわ。条件はあるけどね」
「い、いや……ちょっと！　なんですかその顔！　誰でも一度は考え

ることじゃないですか!!」
女神様の言葉が、雨のようにグサグサと心に突き刺さる。
呆れんばかりのため息と、ついでに嘲笑の笑いを吐き出し、ようやく落ち着いた女神様は若干不満げに言葉を続けた。
ほ、ほんとに女神なのかこの人……
「それで。どんな風に叶える？　あ、努力もせず女の子を惚れさせてハーレム作るっていうのはなしね。前にも魅了の……なんだっけ。眼？　とかいうの欲しがったやつが昔いたけど、洗脳魔法は女神の名に反するからダメ。そういう外道なことがしたいなら、悪魔にでも魂を売ってください足でも犬のように舐めることね」
「待って、違うから。そういうんじゃなくて!!」
「何？　やっぱり変えるの？　ならもう面倒だしランダム特典に……」
「魔王退治ってことは冒険するんですよね？　なら、女の子と冒険できたらいいなって思って。
洗脳とかじゃなくて、出会うだけでいいんで。そのあとは俺次第だと思うんで。……お願いです、女神様!!」
「なんだ。それならぜんぜん構わないっていうか、なんていうかそれ楽でいいわね！　そうね……それなら転生したあとに一人だけ、あなたが困っているところに案内してくれる、親切な女の子が来るようにしてあげる。それでどう？」
「そ、そうですか。そういうのでもいいんですね」
「むしろ無駄な力使わなくて済むから助かるわ。力与えるより簡単だし。ま、ちゃんと縁は繋げてあげるけど、その機会をうまく使えるかどうかは知らないわよ。……あ、言っておくけど、どんな関係になるかっていうのは本当にあなた次第ね。最初にしくじったら彼女どころかメンバーにすらなってもらえないわ。苦情はお断り。私は可能性のある子を導いてあげる。どう？」
「ええと、じゃあそれでもいいです」
「決まりね！　さ、さっさと異世界に送るわよ」
女神様は両腕を上に掲げた。すると手元のガイドブックが光の粒

子になって砕け散り……あっ、面白かったからもうちょっと見ていたかったのに……チェス盤のような黒白の足元に、青く輝く魔法陣がぼんやり浮き上がる。
ようやく重い腰を上げて、白く輝く椅子から立ち上がった。
これが異世界転生。
そうか、死んだと思ったけれど、まだ生きられるのか。新たな未知の世界で。
「というわけで……コホン。それでは伊藤翔太さん。女神アクアの名の下に祝福を与え、あなたを異世界に転送します」
死ぬ前……前世では小学校以来、まともな出会いが一切無かったんだ。
固有スキルとか魔剣とかにも興味があったけど、やっぱり女の子との出会いにかえられるものはない。
後悔はしないぞ。
「ちなみに魔剣を持っていったあなたの先輩は、いま女の子二人に囲まれてハーレム生活してるわよ」
「えっ」
「てなわけで、幸運を祈ります。がんばってねー！」
視界が白く染まり消えていく途中で、とんでもないこと言いやがったこの女神。
いってらーっしゃーい、と手を振ってくる女神に声を上げようとしたが、その前にプツリと意識も白く染まって、俺は再び眠りにつくのだった。

「外国……いや、異世界だ。間違いなく異世界だコレ」
死ぬ直前までいた日本の街並みは見る影もなく、中世風の建築物に変わり果てていた。

壁は白、屋根は赤レンガで統一された建物が並んでいる。
ふと横を見れば透き通る宝石のような川が下流に流れ、その上をレンガの橋が通している。さらに向こう側にも街が続いており、色とりどりの旗がはためいてる。その奥に、ビルのように高いレンガ塀も見つけた。
さらに、ちらほらとまばらに歩いてる人の中には獣耳をつけた人も……ケモ耳っ!?
本物かあれ……うおっ、ピクって動いた。本物だ。
「はえぇ……ほんとに異世界だ」
死んだのは理解していたつもりだけど、全く別の世界とはいえ、生きてる実感が湧いてきた。
さて、これからどうしよう。
あの青髪の女神様によれば、そのうち女の子が来て案内をしてくれるはず。
どこだ、どこだ。
「……いない」
右を見る。
いない。
左を見る。
いない。
上を見る。
綺麗な青空。いい天気だなぁ。こんな状況じゃなきゃ、川の土手で日向ぼっこでもしたいくらいだ。いやそんな場合じゃないけどもね。
「とはいえ、どこに行けばいいのかね……ん？」
じっとしていても仕方ない。歩き出そうとしたとき、木陰にさっきはいなかった誰かがじぃーっと顔を覗かせてた。
「あの……？」
「きゃぁっ!?」
振り向かれるとは思っていなかった！　みたいな顔で、あわあわと口を動かしている子。
あっ、女の子だ。

一応、他に人がいないか捜した。このおさげの子しか見当たらない。あの女神に魔剣や固有スキルをお願いするかわりに〝お願い〟をした子は、この子だろうか。橋の向こうを歩いているあの籠を持ったお婆ちゃんということはないだろうし。

「もしかして、君が女神さまの遣わしてくれた子？」

「は、はい？　女神さま……め、女神っ?!　そ、そんな。まさか本当に願いが届いたの……？」

「あの。もしもし、もしもーし」

木陰のほうに回ると、尻もちをついて倒れたまま、この子はあわわわっと口をぱくぱくさせた。

両肩からリボンで可愛らしく結った髪をさげ、なんとも異世界っぽいラフな服装をしている黒色のローブが最高に異世界っぽい。まず服のデザイン的にあけっぴろげになっている胸の谷間と、もう少しでめくれ上がりそうなスカートから覗く、白く艶のある太ももに目がいってしまう。

『最初にしくじったらパーティメンバーにすらなってもらえないから。それはその子の意思だから、あとからの苦情はお断りよ？』

おっといけない。

あの口の悪い女神様の言葉が頭をよぎる。

噂によれば、女性は男の視線に敏感だという。

いきなり胸に眼を固定させて、逃げられたらたまったもんじゃないぞ。

頑張れ俺。眼をそらせ俺。せっかく魔剣や固有スキルをふいにしてまでつかんだチャンスだ。まだ心の準備ができてないけど。

「あ、あのさっ！」

「ひゃいっ?!　なんですか。感謝したいのに、どっ、どこの女神さまかわかってなくて……ごめんなさい！　ごめんなさい!!」

「え、うん。それは……まあ別にいいんだけど」

あの青髪の神様が頭をよぎったが、ガイドブックを見ている間にポテチをポリポリ摘んで欠伸してた姿を思い出し、その名を口にするのを躊躇った。後でいいや。

「ところで、きみは、もしかしてモンスターを倒す冒険者的な職業だったりしないかな？」
「は、はい。確かにわたしはギルドに登録してて……その、一応、アークウィザードやってて……あれ？　なんで分かったの？」
「もしかしたら女神さまに聞いてるかもしれないけど。俺、冒険者になりたいんだ……とりあえず道わからなくてさ。ギルドまで案内してくれたら、嬉しいんだけど」
「あ、あ、あ、あっ……案内するからっ！　女神様の祝福を受けた人を放っておけないもの。え、えっとね……わたしに任せて!!」
　いつの間にか芝生から立ち上がって、スカートをぽんぽんはらった少女は俯き、何やら両手を合わせて親指をもじもじと動かして。
　口をきゅっと結んでから、赤い瞳の女の子は心を決めたみたいに、こくりと頷いた。
　うわ、何この子かわいい。胸おっきいし、はだけた服してるし可愛い。超かわいい。異世界バンザイ!!
　女神さまありがとうございます。
「ありがとう!!　よかった、いきなり親切な人に会えて助かったよ！」
「親切だなんて、そんな……あっ、行きましょう！　えっと……」
「あっ、名前を言ってなかったな。伊藤翔太だ、よろしく」
「ショウタくん、ですか？」
「うん。それで、よければ君の名前も教えて欲しいんだけど……いいかな？」
「ひぁっ!?　な、名前……ですか」
　首を傾げた。自己紹介するだけなのに、顔を真っ赤にして俯き、なぜかひどく恥ずかしがっているみたいであった。
「ううっ。どうしても名前、聞きたいですか」
「えっ。ごめん、俺なんか変なこと言っちゃった？」
「……わかりました、やらせてください。女神様の祝福を受けた人の頼みですもの。お願いだから、わ、笑わないで聞いてくださいね！」
　なにが始まるんです？
　緊張しながら立ちふさがった、女神に導かれし可憐でおっぱい大き

い少女。すぅーはぁーと、大げさに深呼吸して、ぽかんとした俺に言った。
「わ、わっ、我が名はゆんゆんっ！　アークウィザードにして、いずれ最上級魔法をも操る者！　や、や、や……やがては紅魔族の長となる者……!!」
……
おおー……さすが異世界。挨拶が想像以上に派手すぎて、思わず言葉を失ったじゃないか。
軽くショッキングな出来事である。
それはそうと、紅魔族か。知らない単語が出てきたけれど、異世界特有の種族だろうか。この子は普通の女の子っぽいけど、魔族なる種族なのか。
「……え、えっと。あのさ。なんか目が充血してるけど、大丈夫？」
「はひっ!?　あ、ぅ、えっと……うぅ……その、ごめんなさい」
可愛らしい紅い瞳が、自動車のヘッドライト並みにピカピカ輝きまくってる。しかも頬っぺたはそれ以上に真っ赤っか。
かわいい。
っていうか、最上級魔法ってことは、魔法使いなのか！　うわ、創作でしか見たことない魔法使いだよ魔法使い。はじめて生で見た。この話がまとまったら魔法見せてくれないかな。
「ゆんゆん……、改めてよろしく。というか、なんか恥ずかしいことやらせちゃったみたいでごめん」
「い、いえ。これでも紅魔族の長の娘なので。ほんのちょっとだけ恥ずかしかったですけど……」
ちょっと、ではなさそうだったが。
「あの。紅魔族って？」
「えっ……はい。紅魔の里という場所に住んでいる一族のことを紅魔族といいます。たまに知らない人から魔族と勘違いされたりしますけど、れっきとした人間です」
「あれか。紅魔って、炎の魔法みたいなの使うの？　それとも、そのルビーみたいな目の色が由来？」

「るびぃ？　はい、この目の色と生まれつきの高い魔力が紅魔族の名前の由来です」
「へえぇ、なんか強そう。ところで紅魔族はみんなそういう感じの服を着てるのか？」
「えっ。これはわたしの好みですけど……？」
一人娘がそんな胸元をはだけさせた格好をするんじゃありません、と言いたかった。あと、そのローブちょっと格好いいな。今度買ってみよう。
つまり紅魔族ってあれか。ＲＰＧでいう魔法使いの里みたいなところがあって、ゆんゆんはそこから旅に出てきた一人娘ということだろうか。何気にレアなのでは。ガチャならＳＳＲ。もしや危機に陥った村を助けて村長の娘を嫁にもらうパターンのあれではないか。べたべたの異世界イベント突入か。
「なら、ゆんゆんは修行の旅に出てきたってところか？」
「へ。あ、うん。ちょっと前に紅魔の里の学校を卒業したの。訳あってこの街まで来たんだけど。その、あとは色々……あっショウタくんはこれから冒険者になるんだよね？」
「あ、うん。そのために女神様に送られたらしいし、俺」
「だったら、きっとすごい冒険者になれると思うよっ！　冒険者で名を轟かせる人は、みんな女神さまの祝福を受けた人だから。いいなぁ、きっと、すっごく楽しい冒険ができるんだろうな……」
「ゆんゆんも冒険者なんだよな？　なら、先輩冒険者なのか。新人の俺に色々教えてくれないか？」
「えっ。わ、わたし？　……わたし……で、いいの？」
「頼む。ってか、他に頼れる人もいないし、これも女神様の巡り合わせだと思ってお願いします！」
「うん。わたしでいいなら……まっ、任せて!!」
とても嬉しそうに、うんうんと眩く瞳の中が輝いてる。
かわいい。かなり下がりかけていた女神さまの評価が、グングン上がっていた。しかし、油断すると胸元に視線が吸い込まれ……揺れるなぁ。この子すごい。

「あっ、着いたよ！　アクセルの中でも特におっきいこの建物が冒険者ギルドだよっ！」
　なるほど、これは冒険者ギルドだ。こんなかっこいい看板の、あからさまな施設は他にはない。建物はでかいし、なんか、こう、歴戦っぽい風格がある。俺はいま、すごく感動してる。胸からあっつい感情がこみ上げてくる。
　こんな中世の街並みで冒険者。しかもなんか周りは売店いっぱいあって、いつの間にか活気も出てきてるし。遠くにはラッパみたいなのがついた、何のために建てられたか全くわからない高い塔が見える。
　ゆんゆんに先に行ってもらい、続くように後ろについて、足を踏み入れた。
　うわ昼からテーブルでジョッキでビール丸呑みしてる人いっぱいいる。
　冒険者ギルドっぽい！
「さあ行きましょう！　あっ、ショウタくん……あの、お金持ってる？」
「えっ。たぶん持ってないけど。なんで？」
「あっあのっ！　じゃあよければお金はあげるから。つ、使って！」
「お金いるの？」
「冒険者に登録するときにはお金が必要なの。ちょうど千エリスだったかな」
「センエリス？　あ、ああ。うん。一応聞くけど、これは使えないよね？」
　入れっぱなしだった財布を開いて見せる。全財産のたった一枚の紙幣と、数枚の硬貨を見せたのだが。
「……えっと、見たことない。どこの国の通貨かな……どっちにしろ外国で流通してる通貨の両替となると王都じゃないと難しいと思うし、使えないかな……」
「じゃあ、その。とりあえずお金かして……」
　さっそく、女神様に遣わせてもらった女の子にお金を借りる羽目に

なってしまった。
大丈夫か異世界生活。
……ぺこぺこと頭を下げながらお金を受け取り、いずれこの恩を返さないとな。「いってらっしゃい、頑張ってね！」と見送られながら、いそいそ受付カウンターらしきところに向かう。列はすぐに消化され、ほとんど待たずに順番がやってきた。
「はい次の方どうぞー。今日はどうされましたか？」
にこりとスマイルを受け取った俺は、とりあえず受付の金髪のお姉さんに言ってみる。
「冒険者になりたいんですけど。受付はここですか？」
「そうですか。登録手数料がかかりますが、大丈夫ですか？」
「千エリス……これで足りますよね」
「はい、承りました。ではまずこちらのカードに触れてください。このカードは冒険者の方の潜在能力を表しますので、そこからなりたいクラスを選んでいただきます」
「あっ。それでアークウィザードとかになれるんですよね」
「あ、あー……いえ。アークウィザードは、冒険者の中でのほんの一握り、魔法使いの中でも百人に一人と呼ばれるほど希少な上級職ですので……最初は下位職からのスタートになります。えっと、そういう期待される方は多いんですけど、あまり期待しないでくださいね」
な、なんか可哀想な人を見る目で見られてないか。
アークウィザードって魔法使いのことじゃないのか。ってことは、ゆんゆんって子。もしかして結構すごい冒険者なのでは。パーティーメンバーになってもらえれば、かなり強くなれるのでは……っと、後ろの人も待ってるんだった。
ドキドキしながらカードに触れると、ぼんやりと文字が浮かび上がってくる。
よ、読めん。なんだこの文字。
「はい、けっこうです。潜在能力は……あっ、知力や魔力が高めですね。アークウィザードはさすがに無理ですが、ウィザードになれますね！　他の専門職は難しいですね、あとは基本職の冒険者になれなく

はないですが……オススメはやはりウィザードですね。どうされますか？」
「えっと。一つ質問です。友達にアークウィザードがいて、一緒にパーティ組もうと思ってるんですけど。あの、魔法使いだけだとバランス悪くならないですかね？」
「え……あっはい。え、えっと私からはなんとも。ただ世の中には魔法使いのみのパーティも普通にありますから……アークウィザードのご友人とのパーティでも大丈夫だと思いますよ、ええ」
何でだろう。見る目がますます可哀想な人を見る目になってきてないか。
いるんですよねーこういう人。
受付が美人だからってかっこつけるために嘘を言う人。
そんな顔されてる気がする。
……あっ、嘘だと思われてるのか。そんなに珍しいかアークウィザード。ゆんゆん、というか紅魔族ってすごいんだなーと感心した。さすが女神の遣い……ところで受付のお姉さん。その可哀想な人を見る目はほんとやめてほしい。辛い。
否定しようと思ったけれど、後ろの怖そうなムキムキのオッサンが「遅え」と言わんばかりに青筋を立てた音が聞こえて、言葉が引っ込んだ。
「じゃ、じゃあウィザードで」
「わかりました。レベルを上げればステータスも上がりますので、えっと、いずれ高難度のクエストをこなしてレベルを上げ続ければ、アークウィザードにもなれますよ。きっと……では、冒険者ギルドへようこそ。ショウタさん、今後の活躍を期待しています！」

「ゆんゆん。ありがとう、おかげでウィザードになれたよ」
「あっウィザードを選んだんだ、えへ、なんだかちょっと嬉しいな……それならわたしも色々と力になれると思うよ！　……あの、浮かない顔して。何かあったの？」

「ううん。なんでもない。なんでもないから。そんな悲しい表情なんてしてないから」
「そう？　あっ。ところでショウタくん、今日泊まる場所、もちろんないよね」
「あ、うん。お金なくて……野宿？」
「それなら、さっそくクエストを受けるといいと思うの！　えっとね、そこのクエスト依頼掲示板、ちょっと見にいってみない？」
　と、生き生きとした瞳で掲示板のほうを指差すゆんゆん。またきらきら目が輝いてる。何がそんなに楽しいのか分からないが。
　対してこちらは心に多少の傷を負って戻ってきたせいか、落ち込んでる。うわっ掲示板でかいな。さすが噂の冒険者ギルド……ほうほう、いろんな依頼があるな。ふむふむ。

「……わからん。ぜんぜん読めない。ごめん、これ何語？」
「あっ。遠くからやってきたなら、そ、そうだよねっ！　え、えとっ、最初はこれなんていいんじゃない？　〝ジャイアント・トードの討伐〟、報酬１０万エリス！」
「カエル？」
「よくわかったね。危険度は最低だけど初心者にはぴったりの依頼だよ！」
「ならそれにするか。どんなやつなんだ？」
「うーんとね。大型のカエルで、高さはだいたいあの石像くらいかな！　人一人丸呑みできちゃうおっきな口で、ヤギとか牛とか、ひどいときは人も食べちゃうんだよ！」
　……無理。
　冒険者になって最初に決意したことは、ぐっと恥を忍ぶことだった。
「い、いきなり一人でいくのも、その。不安だから。ついてきてくれませんか……」
「えっ？　……わ、わわわ、わっ、私でいいの!?」
「は、はい。むしろお願いします」

「ほんとに、ほんとにいいの!?　ほんとに、ほんとにっ!?　ほ、ほんとに」
「ほんとよろしくお願いします。ゆんゆんさん、お願いします」
「うんっ！　わたしでよければっ!!」
明るく返してくれた。
ゆんゆんとしては、先輩として甲斐甲斐しく後輩に世話をやいてくれているのだろう。プライドはさっそくズタズタである。まさか、親切な女の子に護衛のようなことを頼むなんて。親切につけこんで頼りすぎている感じがなんか……というか字も読めないのか俺は。もしかして、字を覚えるところから始めなきゃいけないのか。とすると、字が読めるようになるまでこの子に頼りっぱなしになるのか。
目が死に始めたところで、彼女は「そうだっ！」と続けた。
「じゃあまず武器が買える店にいかないと！」
「えっ。なんで？」
「最初は杖がないと魔法も使えないし、危ないよ。あっ、お金のことなら心配しないでいいよっ！　わたしたちの出会いを祝福して、プレゼントするから!!　さっそく行こう!!」
……あっダメ人間だ俺。
とうとう目から全ての光が消えて、ゆんゆんの菩薩のような善意と正論の前に、機械のように頷くことしかできなかった。
異世界転生でチート能力を選ばなかったことを、後悔した。

「はい、こちらが報酬となります。お疲れ様でした……あっ、二つもレベルアップされたんですね！　初心者でこんなに早く依頼を達成される方は珍しいんですよ。もしかしたら本当にすぐにアークウィザードになれるかもしれませんね！」
「あ、はい。ありがとうございます。では失礼します、はい。すみません」
「またお願いします。頑張ってくださいねっ！」

「アリガトウゴザイマス。ほんと、ごめんなさい」
にこりと手渡される２０枚の札束を受け取ったあと、逃げるように受付から離れた。
戻るとゆんゆんが後ろに手を組んで、にこにこ、うきうきと笑顔で待ってくれている。こんな儚げで可愛い子が待ってくれていると思うと嬉しい。
今日はウィザードになって魔法が使えるようになった。
が。
最初のスキルポイントでとれる魔法を選ぼうとしたらゆんゆんに止められ、レベルがもっと上がるまでは待ったほうがいいと言われたのでやめた。つまりいつでも魔法はとれるが、まだ使えない。魔法使いなのに魔法が使えない。
手元の討伐報酬１０万エリス。これはカエルを倒した報酬だが、もちろん棍棒を持ってカエルを殴り殺したわけではない。あっという間に、眩い巨大な閃光がピカッと光ったと思ったら、カエルが倒れていた。そのあと、ゆんゆんはトドメを俺に譲った。
今日やったことはそれだけだ。
つまり。
今日の討伐は全てこの子、ゆんゆんがやったものである。
このお金を手にしていること自体に罪悪感しかない。なぜかゆんゆんは受付カウンターにきてくれなかったので、受付のお姉さんからの評価がまた変な方向に走ってしまった。主に、行ってはいけない上の方向に。女の子の笑顔がこんなにも痛いなんて。罪悪感に押しつぶされそう。
「あの、今日はお疲れさま！　レベルは最初のほうで上がりやすいとはいえ二つも上がったし、大収穫だね！」
「あ、うん。ごめん。これ今回の報酬だってさ」
「へ？　え、ショウタくん。なんで全部私に渡そうとするの？」
「……受け取れないから。今日の経験値だけでもう受け取りすぎというか、もうどう返していいかわからないっていうか。ごめんなさいマジで、ほんとにスイマセン」

「で、でも、お金がないと。泊まる場所もないんだよね、ねっ!?」
確かにそうだ。もはや顔すらそらしながら、たまにへっ、へっと、肩を揺らし自嘲の笑いを出しつつ、まだ最低限、かろうじで小枝ほど残った男のプライドで、続く言葉を絞り出す。
「いくらパーティーメンバーとはいえ、それを受け取ったらただでさえ申し訳ないのに、本当に顔が立たなくなるというか、この世界で生きていく自信が本格的に空を飛んでいくというか……」
「ぱ、パーティメンバー？　……えへへ、ぱ、パーティー……はじめての……あ、え、えっと！
それじゃあ友達の証に、これ受け取って……！　あっ、これだけじゃ足りないよね。これも、これわたしが今までクエストで貯めたお金で……」
「ねえ、なんで財布出そうとしてるの？　いらない、いらないから。今日一円でも受け取ったら、男として死ぬ気がするから」
「え、あ、あのね。じゃ、じゃあ……今日の宿代だけでも受け取ってもらえないかな？　別にか、返さなくてもいいからっ。野宿はダメだよ！」
「……ごめん。ごめん、確かに野宿はやばい。ほんとそのうち返すから、今日の報酬を半分だけ貸してください。すみません」
外に出ると、満天の星空が俺たちを迎えてくれた。
隣でゆんゆんがニコニコ、えへへと嬉しそうに笑っている。あまりの情けなさに涙が頬を伝って、きらりと光った。

第二話

前回のあらすじ。

女神様のお願いで引き合わせてもらった女の子、ゆんゆんに冒険者ギルドに連れて行ってもらった。冒険者登録で魔法使いとなり、その子の力で何もしないままレベルを上げてもらって、日本円にして5万円を借り受け、武器である杖とその他ちょっとした装備をプレゼントされた。

いやぁ。異世界転生一日目は、充実した素晴らしい一日だったなぁ。

もはや死んだ魚の眼。

あるいは濁った水晶玉のような目で思い返しながら、握った木の杖を目の前に掲げてみる。

何もなければウキウキするくらいに、空はどこまでも青かった。

「だめだ。早くこの状況からは、なんとしても抜け出さないと！　正真正銘生ゴミになる!!」

ハロワに連れて行ってもらって、一緒に仕事をするも女の子の成果だけを横からかすめとり、終業後に5万円を借りたうえ、欲しいものをプレゼントさせる。現代風ならこんなとこか。彼女どころかヒモだ。でもちょっとだけヒモ最高なんて思ったりもして……じゃなくて!!

とにかくレベルアップするべきだろう。宿から出てすっかり覚めた頭で、まず真っ先に異世界で出会った美少女に頼ることを決意した。レベルアップさえすれば、いずれ強い魔法が使えるようになるらしいのだ。

それまでだから。

自力で稼げるようになるまでの辛抱だから。辛抱だから。超頑張れ俺。

そんなことを考えながらギルドまでたどり着くと、入り口で超かわいい胸のおっきな美少女が手を振ってくれてた。ゆんゆんである。

「あっショウタくん。お、おはようっ！　……ちゃ、ちゃんと言えたよね？」
「ゆんゆん、おはよう。え、えーと。まず聞きたいんだけど、ほんとに今日もあの蛙を倒しにいくのか？」
「へ？　なんで？」
「初心者だから俺はありがたいけど、無理しなくていいんだぞ？　一人でなんとかするから、ゆんゆんは自分の冒険をしてくれていいんだぞ？」
昨日散々考えたセリフが決まった。が、ゆんゆんはむしろ……
……えっ、なんでそんな絶望したような顔するの。無理に付き合ってくれているだけじゃないの。あ、あれっ待って。なんで泣かれそうなの、俺。うっ、うっ、なんて声まで聞こえてきちゃってるんですけど。
ねえ待って？　めっちゃ通行人から見られてる。ヒソヒソ話までされてる。
「いやー、でもできれば付き合ってくれると助かるなー。早く魔法が使えるようになりたいしなー」
「まっ任せて!!　今日もいっぱい討伐して、目標に届くまでレベルを上げようね!!」
泥沼脱却の道は、他でもないゆんゆん自身の手によって塞がれた。
うん。今日も一日ゆんゆんの力でパワーレベリング頑張ろう。ああ、レベリング中は暇だから冒険に異世界文字の単語帳でも持っていければいいのにな。
……いや、いやいやいや。そんなことじゃいけない。
せめて背丈の2倍ほどのデカさのあるカエルに慣れておこう。
ゆんゆんの戦い方もしっかり目に焼けつけよう。
そうだ。上位職のアークウィザード、熟練の魔法使いの戦い方をこの目に焼き付けるのだ。
この経験は、きっと自立したときに役にたつはずだ。
「それじゃあ張り切って行こう！　目標は昨日の倍のレベルだよ!!」
「はい。ほんとよろしくお願いします。ほんとすいません」

「そ、そんなに畏まらないで!?　ねえ。なんでそんな敬語なの？
もっと気安くていいのよ？」

「あっ、ゆんゆん。レベル上がったよ」
「本当!?　よかったぁ。じゃあ、これでようやく魔法が使えるようになるね！」
　最後のカエルに止めを刺し、とうとう２５匹目が養殖の犠牲になった。
　うん……なんの参考にもならなかった。
　カエルが出てきたかと思ったら光の柱で戦闘不能に陥らせ、１０匹くらいまとめて出てきても、まとめて魔法で作られた泥沼に沈んで行動不能に陥らせた。強すぎる。貰い物じゃなければ、持っているダガーを放り投げてたところだった。
　手元のギルドカードを見れば、さらに二レベル上がっていた。目標としていたレベルよりずっと高い。途中でやめなかったのは、ゆんゆんが調子よさそうで止める暇がなかったから。
　ま、まあいいや。手間もかかってなさそうだったし……ゆんゆんからすれば。
「それで、どの魔法をとったらいいんだ!?　ってかこれで魔法で戦えるんだよな。なっ!?」
「へっ？　ええとね。わたしのおすすめは〝ライト・オブ・セイバー〟かな。昨日から使ってるピカって光るやつなんだけど、熟練すると、どんな物でも斬れるようなすごい魔法なんだよ！」
「あれ？　そんな項目ないぞ。あれ？」
「あっ。そうだった、アークウィザードになったら取れるスキルだから……他のだと、たぶん中級魔法はとれると思うの。ちょっと見せてもらってもいいかな」
「スキルは一回振ったらもう振り直しはできないんだよな。アークウィザードのゆんゆんから見て、ウィザードのおすすめはどれなんだ

？」
「わたしの住んでた紅魔の里ではみんな、魔法攻撃力と魔力を上げるスキルを最初にとるのはほとんど決まりなんだ……けど……あれ？
ちょ、ちょっと待ってね……」
「どうした？」
「紅魔族のみんなよりスキルポイントがもらえてなくて……それに今のステータスだと、中級魔法を使うにも魔力が心もとなくて。あ、あれれ……」
「えっ。攻撃魔法とれないのか？」
「と、とれなくはないんだよ?!　でも、これからウィザードで強いスキルをとっていくなら、どんどん使わなくなっていくし、ちょっともったいないかなって」
え、ええ……。
冒険者カードを見て凍りついたゆんゆん。ついでに、若干持つ手が震えてる。
えっ、茨の道なのウィザードって。いや、確かにスキルポイントさえ貯めれば、いきなり色々すっとばして上級魔法をとれる世界だ。アークウィザード視点で、無駄なく優秀な冒険者にさせようとすると、最初がきっつくなるのだろう。
普通の冒険者は、いまとれるスキルで冒険をするにちがいない。てかゆんゆん、そんなに動揺しなくても。雑魚すぎるって言われてるみたいで悲しいぞ。
「じゃ、じゃあ……もしかしてまだレベル上げ？」
「いえ。わたしが知らないだけで、いいスキルもきっとあると思うの！　きっとだよっ！　……とりあえず魔力や魔法攻撃力とかを上げるスキルをとって。あとは、ええと、ええっと……」
「あ、ああ。とりあえず戻りながらゆっくり考えよう。ところでゆんゆんはどんな魔法が使えるんだ？」
「見、見たいのっ?!　えっと、これだよ。どうぞ。えへへ、なんだか恥ずかしいな」
ゆんゆんの冒険者カードを見せてもらう。

う、うわなんだこれ。なんかすげー文字が並んでる。オススメしてたスキルは全部とってるのか。あとは……文字が読めないせいでちょっとわかんない。数字は何となく覚えたけど。
あれ。今考えると、異世界ガイドブックに言葉で困ることはないって書いてあったような……なんで読めないんだ俺。
「ゆんゆんはもうレベル二桁あるんだ」
「はい。お金稼ぎとかでいろんな冒険をしてたので」
「……この成長速度だと同じ強さになるまで絶対レベル足りない……種族の差って強い」
４つもレベルが上がったおかげでステータスは劇的に上がった。
でも、紅魔族強すぎる。このペースじゃ追いつけない。
俺の最高の夢が……女の子とパーティーメンバーになって、過酷な冒険の果てに仲を深めて、最終的に惹かれあって彼女になってもらう……ああ、夢が遠のく……ステータスの壁……

時間のおかげか、街は活気で溢れていた。▪
るんるん、スキップ歩きで楽しそうだが、そんなに楽しいことがあっただろうか。一日中経験値を吸われただけだというのに。
受付のお姉さんに討伐報告を済ませたら、なぜか受付までついてくれないゆんゆんのせいで、さらにお姉さんの「凄い。今日は昨日の倍も狩ってきたんですか！　しかも、肉片も残らないほどの魔法で!?」などと言われ勘違いを深めてしまった。
昨日よりもずっと厚い札束を手にしたまま、背中に罪悪感の悪魔を引き連れつつ、ゆんゆんとオススメされた食堂に入った。適当な席に座って、昼飯を注文する。
「この唐揚げ、あのカエル肉なのか。こんなに美味いのか」
「えへへ。誰かと一緒に食事なんて……へ、えへへえっ。嬉しいな……」
ゆんゆんから変な笑いが聴こえる。
な、なんだ。一緒に昼飯って別にそんなに嬉しいことじゃないだろ……？

ぞくり。深い闇のようなものを感じた気がしたので、楽しそうでいいな、と深く考えないことにした。
「これからもパーティを組むなら、ゆんゆんの役に立ちそうなスキルを取っていかないといけないよな。広範囲スキルと個別攻撃スキルどっちがいいと思う？　それとも攻撃補助……ゆんゆん？」
「ぱ、パーティー!?　ぱ、ぱ、ぱ……夢のパーティーメンバー!!?　へ、えへへぇ……」
「ゆんゆーん。ゆんゆーん？」
「はっ！　そっ、それならこういうのとか。あと、これとか、これとかこれとかっ……」
いくつか選んでもらったスキルと説明を聞いて、新しい方針のもと、改めていい感じのスキルを教えてもらう。
「これなんておすすめだよ。ちょっとスキルポイントは高いけど、魔法力が上がればあがるほど威力も上がるから。ずうっと主役で使えるよ！」
「それはさっきの〝ライト・オブ・セイバー〟と比べたら？」
「うーん……さすがに、アークウィザードの魔法と比べると……スキルはその人の一生を形作るものなの。だからね、今日だけで急いで決めなくてもいいんだよ？」
そう言われると……スキルポイント的には取得できるらしいが、ジョブが違うのでそもそも表示されていない。
ステータスの調子を見ると、まだまだかかりそうである。アークウィザードになってから魔法を覚えるとすると……遅いっ。それまで魔法使えないの……
「午後も討伐クエストにいって、いっぱいレベル上げしようね!!」
「なあ。ありがたいんだけど、なんでそこまで親切にしてくれるんだ？　俺なんてただの駆け出しの冒険者だし。それに比べてゆんゆんほどの実力ならいくらでも強いパーティメンバー集めて、それで髑髏がいっぱいついてる高難易度のクエストに行けるだろ？」
突然、闇がゆんゆんを覆った。
「えっ、なんでそんな暗い顔するの？　というか、暗いを通り過ぎて目

が死んでませんか？」
「……違うから。いろんな人のパーティに声をかけたけど一日で追い出されたり、断られ続けたわけじゃないの。ほんとだから……パーティーメンバーができないのをどうにかしたいって、パーティーメンバー募集しても誰もきてくれなくて、見境なく女神さまに祈りを捧げてたとか、それで初心者の人とだけどパーティー組めて嬉しいなんて、そんなことないから」
「……」
どう反応すれば、傷つけずに済むだろう。
ぶつぶつと自虐モードに入ってしまったゆんゆんに、頬を掻きながら言った。
「そ、そうか。俺も早くゆんゆんに追いつけるようにがんばるからさ！　もし暇ならしばらく強くなるために付き合ってくれよ！　まだお金も借りたままだし、この魔法の杖の恩だって返せてないから！」
「へっ？　いまのって私のことが嫌いだからパーティーメンバーから抜けるって話じゃなかったの？」
「いや違うよ！　なんでそんな卑屈なの!?　むしろゆんゆんとパーティー組みたいから、もっとレベル上げて強くなりたいって言ってるんだよ!?」
「あ、あれ？　なんで目が熱くなってるの……あ、あれ？　あれっ。おかしいな」
目が紅色にきらりと光って、溢れてきた一筋の涙を両手ですくいとるゆんゆん。こっちが涙出そうだよ。この子はいったい今までどんな人間関係を構築してきたんだ。
……いや自分も前の世界じゃろくなもんじゃなかったけど。
友達は俺もいなかったけど！
「ゆんゆん」
「はい……っぐ、ん。ひぐっ」
「なんだ。改めて言うのも恥ずかしいんだけどさ。追いつけるくらい強くなるから、パーティーを組んでくれないか？」
「わ、私で、いいんですか……えぐっ、うええん……」

「それと。パーティーメンバーだけじゃなくて、ゆんゆんと俺って同い歳くらいだよな？　ついでに友達になってくれると嬉しいんだけど……えっ」
　言い終えた後、呆然として言葉が聞こえているかすら怪しい状態のゆんゆんは天井を見た。
　1分ほどそんな状態を続けたもんだから、周囲の冒険者から、ざわ、ざわと声が聞こえ始める。ど、どうしたんだ。何か言おうと思ったとき、ゆんゆんは自分の涙をつたったほっぺたをギュウッ、抓ってた。
「あ、わかった。これ、夢だ。よくこういう夢見るんだ。いい夢だからずっと覚めないでほしいな。このまま夢の世界で生きていけたらいいのにな」
「ゆ、ゆんゆーん。ゆんゆーん？　おーい」
「わかってるわね、ゆんゆん。返事をしちゃだめ。はい、って頷いたら目が覚めて、わたしは一人でベッドで寝てるの。目の前に誰もいないのに、笑顔でいない人をパーティーメンバーに迎えてるんだ。握ろうとした手は、きっと自分の手を握ってるの」
「じゃ手握るぞ。ほら、夢じゃないだろう」
　うわ、めっちゃ柔らかい。あったかい。指も細くて艶々な女の子の手だ。
「えっ。あれ？　どうして。ショウタくん消えないの？」
「パーティーメンバーになってほしい。あと、友達になってほしいから」
「う、嘘だよね!?　パーティーメンバーはともかく、わたしと友達になってくれる人なんて今まで……ほ、ほほほほほ、ほっほ、本当にっっ!!?」
「……なんで今まで友達ができなかったのかは、ちょっと理解できないけど。本当に」
　両手を包み込むように握ると、めっちゃやわらかくて暖かくて、間違いなく女の子の手だ。
　赤い眼がとても魅力的な同い歳くらいの少女。疑惑の表情は、やがてえへへ……と、蕩けた。な、なんだこれ。女の子のこういう顔は、

もっと長年連れ添って好感度を高めてから見られるものじゃないのか。ハードル低くないか!?　嬉しいけど!?
「あの。オーケーなら、せめて頷いてほしいんだけど……ゆんゆん、ゆんゆーん？」
「友達、友達……？　ともだち、かぁ。へっ、えへへ、えへっ」
面と向かって友達になってくれというのは恥ずかしかった。
でも、この子はあの女神様が遣わしてくれた子。せめて友達になることで、ゆんゆんに喜んでもらえるならよかった。よかった。早く恩返しもしないと。
「よーし、じゃあ新しいパーティとして、午後も頑張ろう!!」
「はいっ！　パーティーメンバーとして、午後も一緒にクエスト頑張るよっ!!」

第三話

俺は異世界に来たおかげで魔法を使えるようになった。
そう、魔法だ。日本にはなかった魔法。炎や氷を出したり、仲間を回復したり、身体強化したり。そんな魔法の才能を開花させ、バッタバッタとモンスターをなぎ倒した。
パーティーメンバーのゆんゆんが。
「ショウタくん、今日はお疲れさまっ！」
「そんなかしこまった呼び方じゃなくても、あだ名でいいんだぞ？こっちもゆんゆんって呼んでるわけだし」
「へっ？　え、えっと……では、せめてショウくん……で、どうかな」
「お、おー……なんか恥ずかしいな。あっ、あとずっと聞きそびれたんだけど、ゆんゆんの本名ってなんだ？」
ぽかん、と首を傾げた。
「へっ？　え、えっと……名前？　で、では、こんな場所でちょっと恥ずかしいけど……我が名はゆんゆん!!　アークウィザードにして！」
「違うって！　名乗りじゃなくて、本名聞きたいだけだから！」
「え、えっと。わ、我が名はゆんゆんっ!!　です……けど。ショウくん？」
あちゃー……まさかゆんゆんって、本名なのか。あだ名だと思ってた。
異世界すげぇ。
そんな言葉は一言もおくびにも出さず。そっかー、いい名前だね。となだめて何度も頷いてみせる。が、ゆんゆんは流石に胡散臭そうにぷぅっと頬を膨らませた。かわいい。
と、こんな充実した日々がしばらくは続いた。
ゆんゆんのパワーレベリング。紅魔族的には養殖と呼ぶらしい行為のおかげで、上位職のアークウィザードには確実に近づいている。こんな楽に冒険してしまってよいのだろうか。
女神特典でスキルや武器もらわなかった代わりだけど、破格じゃない？

かわいい女の子と一緒におんぶだっこで楽して冒険とか、すごいけど、バチが当たりそう。いや、女神様が叶えたんだから絶対大丈夫。うーん異世界生活バンザイ。

討伐報告にいくたび、受付のお姉さんに「すごいすごいですよっ！こんなに早くレベルが上がるなんて。これならアークウィザードまで、もうすぐですよ！」と、嬉しそうに言われさえしなければ、完璧なのだが。

ごめんなさい、それ俺の力じゃないんです。ほんとすいません。

「今はステータスも上がりづらいかもしれないけど、でもアークウィザードになったら一気に強くなれるからっ！」

と、ゆんゆん談を信じて、今日もレベリング。

クエストで手にした大金を一切使わずレベリング。

明日も、明後日もレベリング。

ステータスがあがるの最高。ははは……は、は。俺は養殖される魚の気分だ。

「ショウくんっ、今日はどこに行く？　森？　川？　平原のクエストに行くついでにね、サンドウィッチいっぱい作ってきたんだ。一緒に食べようね！」

「うん。今日もお願いします。あ、これなんてよさそうじゃないか？今日もクエストいっぱいあるなぁ」

ゆんゆんとは別の宿……馬小屋で寝泊まりしながら、二人で冒険する。

冒険から帰ってくると、ギルドはいつもお祭り騒ぎ。冒険者たちの宴が飽きもせずに繰り広げられている。

「かんぱーい！　お疲れさまっ！」

「うん、新しい冒険に乾杯っ！」

他の冒険者に混じって夜食に舌鼓を打ちつつ、今日あったこと振り返る。

それが終われば、壁一枚を隔てたアクセルの公衆浴場で、肩まで浸

かりながら汗を流して疲れを癒す。

「はぁー……明日でまた強くなるなあ。アークウィザードまではどのくらいなんだろうな……」

「今日も楽しかったな。えへへぇ……女神さま、ありがとうございます。本当に、願いを叶えてくださってありがとう……はふうぅ」

ありきたりな異世界生活を楽しみにしながら今日も異世界で生きてゆく。

そんなある日の昼下がり。場所は冒険者ギルド。待ち合わせたゆんゆんと一緒に、今日も今日とてクエスト掲示板に向かった。街で見かけた、水鳥に火の輪をくぐらせていた不思議な大道芸人の手品のタネは何か、なんて。他愛もない話をしながら扉をくぐる。そこで、俺は真っ先に気付いた。

どこかで見たことがある気がした、その後ろ姿を見つけて立ち止まる。

「あれ？　待ってゆんゆん。もしかして、あれは……!?」

「ショウくん、どうかしたの？」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。あの二人……青い髪の人、もしかして。いや、間違いない！　あのときの女神様!?」

間違いない。あの女神……だよな。なんで冒険者ギルドに?!

声をかけようとしたけれど、隣にジャージの男を連れているのを見て止まる。あ、どう見ても異世界転生してきたばかりの人だ。もしかしてわざわざ冒険者ギルドまで導いてあげてるのだろうか？　うーん。それなら邪魔してはいけないだろう。

あ、せめて拝んでおこう……ナムナム。

「ねえ、どうして神様の前でもないのに手を合わせてるの？」

「一瞬、俺をゆんゆんと引き合わせてくれた女神さまが見えた気がしたんだ。だから拝んどかないとなって思って」

「そ、そうなの!?　じゃあ私もっ！　ありがとうございます……!!

本当に、ほんとに一生のお願いを聞いてもらってありがとうございま

す……!!」
　ははぁー、と柱の陰に隠れながら頭を下げた。
　頭を上げると、変なものを見るような視線を浴びまくってて、二人で顔を赤くしてギギギ、と機械のように掲示板の方に逃げ去った。
　さ、さあ今日はどのクエストを受けよう。
　ゆんゆんに半ば強引に「パーティーメンバーだもん、ちゃんと分け合わないと！」と、押し付けられているお金が、実は１００万エリスを超えた。あっ。返そうとしてるのに、一向に受け取ってくれないお金だからな。それにはあまり手はつけられないから、結局貧乏なわけだが。
　実は……ここ最近、幸せすぎる。
　経験値も金も貢いでもらって、もういっそ一生ヒモでいいような気がしてきている。
　……異世界転生の目的を思い出せ。お前は何をしにきたんだ。彼女を作るためだ。ヒモになるためじゃない。思い出せ。
「今日はこれにしようよ！　ゴブリンの群れの討伐クエスト！」
「おお。なんか聞いたことのあるモンスターの名前だ……あれ、危険度の髑髏けっこうあるんだな。これは難しいんじゃないのか？」
「うん。１匹１匹はそこまで強くないけど、集団だとやられる初心者の冒険者も多いんだって。あとは〝初心者殺し〟っていう強いモンスターが出てくるかもしれなくて……でも大丈夫！　紅魔族直伝の魔法でみんなやっつけちゃうんだから！　というわけでね、経験値もおいしいし今日はこれを……」
「あ、あのー……ちょっといいかしら？」
　つんつん。ガッツポーズを決めたゆんゆんと二人で掲示板を見ていると、後ろからつっつかれる。
　振り返って、絶句。
　俺は突っつかれたゴキブリのようにピョンと飛びのいた。
「うわ！　か、か、かっ、神!?　女神さまっ!?」
「あっ、やっぱり！　どっかで見たことあると思った。カズマー、ちょっと来なさい。登録料なんとかなりそうよー!!」

手を大ぶりする女神さまは、さっき一緒にいたジャージの転生者を呼び寄せる。
登録料？
何なんだ。呆然としているとゆんゆんが耳打ちしてくる。
「あ、あの、ショウくん。このすごい髪型の人は？」
「あっ。なんて説明したらいいか……俺が崇めるべき人というか、恩人というか。あの、ちょっと言葉を整理する時間をくれませんか？」
「う、うん。わかった」
「おーアクアどうした。ってこの人は？」
ゆんゆんと喋ってると、日本人っぽいジャージの異世界転生者がやってくる。
それから女神様には待ってもらって。５分ほどかけて頑張ってゆんゆんに、この人が俺に祝福をくれた女神さまであることを説明した。その間、女神さまと転生者の人は律儀にそこで待っててくれた……登録料で困っているなら、待つしかなかったのかもしれないけれど。
全部説明が終わったあたりで、ゆんゆんもようやく信じてくれたらしい。口を押さえて「う、嘘。女神さまが……地上に顕現されるなんて!?」と、超びっくりしてた。信じてくれるのか。そうだよな、俺もびっくりした。
「ふふっ。どう、カズマ。これが女神様の威光よ。カズマも私のことをこのくらい敬ってくれなきゃね！」
「考えとく。ところで、あんたも異世界転生者なんだな。俺は佐藤和真、よろしく」
「よろしく、俺は伊藤翔太だ。カズマはもしかしてこの世界に来たばかりか。なんで女神さまと一緒にいるんだ？」
「……それは説明が長くなるから、省かせてもらうよ。まあ見ての通り、この女神と一緒にこの世界に来たばかりでさ。やっとの思いで冒険者ギルドについたとこだ」
「そ、そうか」
なるほど今来たばかりの人なのか、で済んでいた。

隣で「あんたが無理やり連れてきたんでしょうがーっ!!」と、わーわー騒ぎ続ける女神様さえいなければ。
てか、よく見ると周りの視線がいつの間にか俺たちに集中してないか？　あと、受付のお姉さんが物珍しそうに俺たちを見てる……あれ？　ゆんゆんどこいった……あっ、いつの間にか隠れてる。
「ねっ！　そんなことより……なんだっけ、ショウタさん？　あなたお金持ってない!?　なんたってこの私が転生させてあげたんですもの。その風体からして、けっこう持ってるわよね、ねっ!?」
「転生してきたばっかってことは、もしかして二人とも登録手数料で困ってるのか」
「そう！　それよ!!　ね、もう冒険者登録してるんなら、たかが二千エリスくらい持ってるわよね!?　その金、私たちによこしなさい！」
「……おいアクア。人に頼み事をするんだ、言い方ってものがあるだろ」
この女神、アクアっていうのか。
そういえば名前初めて聞いたかもしれない。そんな女神様とは反対に、カズマは丁寧に頭を下げてお願いしてくる。
「異世界転生者の先輩。お願いします、登録料だけでいいんで。お金かしてもらえませんか。あとで必ず返すんで」
「そ、そんな畏まらなくていいって。二人で二千エリス。そこの女神さまには恩があるから、お布施だと思って受け取ってもらっていいから。な？」
そのときのカズマは、すっごく俺に物申したそうな顔をしてた。何となく言いたいことは分かった。伝わったよ。でも女神アクア様に感謝しているのも事実だから、できれば何も言わないでくれると助かる。そんな意思を込めた無言の表情で返した。
言葉を飲み込んで、おさえたカズマから「ありがとう、ありがたくいただくよ」と感謝の言葉を頂いた。
うん。なぜ女神が冒険者になろうとしてるのか知らないけど、アクアには返しきれない恩があるから、気にしないで。
「ふーん、あっ。あそこに隠れてる子もどこかで見たことあるわねー。

どこだったかしら」
「え。あの……あの子のこと覚えてないんですか？」
「そりゃそうよ、毎日何人も死者を相手にしてるんだもの。あんたは最近会ったばっかだからなんとなーく覚えてたけど……んーどこだったかしら。ごめんね！」
「おいアクア、もういいだろ。すまん、ありがとう。この恩は必ず返すから！」
とカズマに何度も頭を下げられた、女神さまは金貨を手にして「どうカズマ？　これが女神様の実力よ。これからはちゃんと私を崇めること、いいわね？」と、胸を張りながら、二人はそのまま冒険者登録に行ってしまう。
人の目も離れ、受付のお姉さんがのほうに行った二人の手続きをし始めたころ。
ゆんゆんがトテトテと戻ってくる。
そしてカウンターの二人を見て、小声で囁いた。
「……あの、ショウくん。あの人、〝あの〟女神アクア様なの?!」
「うん。え、〝あの〟ってなんだ。なんか妙なニュアンスに聞こえるんですが」
「そ、そっか。あのね、アクア様といえば、魔王軍も恐れるくらい、悪名高いアクシズ教が崇める神様で……」
「悪名高いって……魔王軍を恐れさせるって、みんなモンスターを倒せるくらい強いけど、信者からお金を巻き上げてるとかそういうやつ？」
「詳しくは知らないの。で、でも、アクシズ教ってあんまり関わっちゃいけない人の集まりだってみんな言ってて……じゃ、じゃあもしかしてわたし、アクア様にお願いを……どうしたら……ショウくん。アクア様から祝福を受けたってことは、もしかしてわたし、もうアクシズ教徒なの？」
「アクシズ教？　う、うーん。女神さまには恩はあるから、そうなるのか？　入信とか洗礼とかは受けてないけど」
というか……そうなのか、アクア。でも、何だろう。あの女神様の

言動を見てたら、アクシズ教徒は関わっちゃいけない人の集まりって言われるのもわかる気もする。どういうベクトルで関わっちゃいけない人たちなのかも何となく想像がつく。
……いやいや。ゆんゆんを遣わせてくれた女神様だということを思い出すんだ。
「はっ!? はあああっ?! すごい、何ですかこの潜在能力っ!?」
振り返ってみると、アクアの触ったカードを見た受付のお姉さんが素っ頓狂な声をあげて、そしてギルド内にいた他の人たちも、俺と同じようにその方向を見ていた。
あっこれ、あれだ。異世界転生して一日目にすごいステータスが出て、周りから注目されるやつだ。実際に目の前で繰り広げられる異世界転生テンプレと、それを受けている女神アクアを、俺とゆんゆんはぼんやり眺めていた。
あ、あれ、カズマ。もう冒険者登録終わってるの？
ドンマイ。

「おっカズマ、あとアクア……様。久しぶり。どうした？」
「ああショウタか。よかった来てくれたか！ あとこいつに様づけなんてしなくていいぞ。もったいないから」
「何ですって!? ちょっとカズマ、敬虔な私の信徒になんてこと吹き込んでんの!! 女神としての格が疑われちゃうでしょ!!」
「お前にその羽衣以外に格なんてものが残っているのか。ところで話が……あっ、そういえばそっちの子の名前聞いてなかったな」
「ん？ ああ、俺のパーティメンバーだ。な？」
「へ？ わ、わたしっ!? う、うう……わかりました。それでは……」
すぅ、大きく吸って。せーの。
「……わ、我が名はゆんゆんっ!! あ、アークウィザードにして上級魔法を操るもの！ いずれは紅魔族の長となるもの……!!」
と。

ある日の冒険者ギルドでゆんゆんは高らかに名乗りを上げ。
一通りの驚愕の停止が通り過ぎた後。恒例のごとく顔を真っ赤にし、ぷしゅうと頭から蒸気を吹き出したゆんゆんの手を引いて、冒険者ギルドの四人掛けの椅子にそれぞれ腰掛ける。何やら悩みがあるらしい彼らの相談に乗ることにした。
「というわけで、先輩冒険者のショウに、安全な冒険の仕方を聞きたいんだ。ほら、毎日ここで見かけるけど土木作業の現場で見かけたこともないし。いっつも町の外でモンスター倒しまくってるんだろ?! ウィザードだったよな。バッタバッタ、敵をなぎ倒してるんだよな?」
「……ごめん。ほんとごめんなさい」
「は? なんで謝るんだ」
「俺、ゆんゆんにモンスター倒してもらってレベル上げてるんです。ヒモなんです。ほんとごめんなさい。寄生虫でごめんなさい」
「え。え、えええ……」
久々に申し訳ないと思う気持ちが、津波のようにドバーッと俺を襲った。
こいつもまともなやつじゃないのか、という視線が痛い。カズマはドン引きしながら、交互にゆんゆんと俺を見た。
ゆんゆんは「あわわ、そんなことないよ! ショウくんはすごい冒険者なんだよ! ねっ?!」と俺を擁護した。やめて、それ辛い。一言一言が心に突き刺さる。心はとっくに蜂の巣のごとく穴だらけであった。
「……あれ? ところで、お前もアクアに転生させてもらったんだろ。凄そうな魔剣とか、スキルとかもらわなかったのか?」
「あ、うん。えっと……転生特典のかわりに、彼女が欲しいってお願いしたんだ」
誰にも聞こえないようにそっと耳打ちすると、カズマは口をあんぐり開けた。今一度俺たちを口をばっくり開いたまま交互に見る。ゆんゆんは不思議そうに首を傾げた。
「はぁ!? そんなのありか!? くっそ、俺もそうしとけばよかった

……一時の気の迷いでこんなアホ女神を連れてきた俺の馬鹿野郎……」
「ちょっとカズマ、それどういう意味よ!? 仮にもあなたが願ったのは女神、女神なのよ!? 女神アクアさまよっ!!? もっと喜んでもいいんじゃないの!?」
「馬小屋で涎垂らして腹出して寝っころがって、酔っ払いに自然に混じって酒飲んでなきゃ、爪の先くらいはそう思ったんだがな」
……どんどん、俺を転生させてくれたアクアの株が下がっている。
ちなみにカズマの言っていることが嘘でないことは、この前夜中にクエストを終えて帰ってきたときに酔っ払っている二人を目撃した時点で知ってる。見間違いじゃなかったか。
い、いや。ゆんゆんと出会わせてくれた恩を忘れてはいけないから。この隣でギャーギャーカズマを叩いてる人は女神だから。
「と、とにかく……ありがとな。俺もせっかくアクアがいるんだ。まずは討伐行って、いけそうならアクアとその〝養殖〟を試してみることにする。女神だし、そのくらいはできると思うからさ」
「あっ待て。最初は倒しやすいジャイアント・トードの討伐にしといたほうがいい。様子を見て、難易度を上げていくのがセオリー……らしいぞ！ 万一ってこともあるし慎重にな？」
「ありがとう。じゃあアクア行くぞ。女神なんだから、モンスター倒すくらいできるだろ？」
「へ？ そうね、モンスターごときにこのアクアさまが遅れをとるはずないわ。毎朝私に向かって、敬愛と感謝の祈りを捧げるなら同じように……〝養殖〟だっけ？ してあげてもいいわよ。って、あ！ 待ちなさいよカズマっ！ カズマぁーっ!!?」
そしてカズマを先頭に、アクア様はあとを追いかけるように行ってしまった。
「ショウくん。あの人、アクシズ教団の崇める女神アクア様なんだよね。女神さまなんだよね」
「うん。間違いない」
「ううん……やっぱりいい」

あの女神の疑わしさとイメージとの乖離による困惑によって、何か色々と喉まで出かかっていたみたいだけれど、口にするのを諦めてた。

そういえば最近、ゆんゆんはアクシズ教団の印のペンダントを買ったらしい。でもたまに複雑そうな表情をしてポケットに入れてるだけで、信仰するとかそういうのではないみたいだ。俺は自分で稼いだお金にはあまり余裕がないので買ってない。正直会いたければ本人がいるし、あんまり欲しくない。

「ところで、ね、ねぇ。今日はおいしいもの食べにいかない？　すっごく美味しそうな料理を出すお店見つけたんだ。あっ、もちろんお金はぜんぶ私が払うから！」

「いや、午前中の討伐報酬ちゃんと残ってるから。ところでゆんゆん、俺たち友達だよね。友達なんだよね？」

「うんっ！　友達のご飯のお金をおごるのは当たり前だもんね！」

「こんなこと言うの心苦しいけど、それ友達の関係じゃないから。そういう人がいたんだとしたら、それゆんゆんのお金にたかりにきた人だから……もう一度言うけど、それ友達じゃないから」

本当に気がついてなかったらしく、ゆんゆんの表情がピシッと完璧に凍りついた。

なんかもう、ね。涙なしじゃ見られないこの子。

さらに話を聞くと、いまでもその〝友達〟と文通しているらしい。最近では新しい友達ができたと意気込んでいっぱい手紙を送っているらしい。よかった。本当によかった……いやいや、なんでこっちが安心してるんだ。

意識を取り戻したゆんゆんに「友達のためにアルバイトしちゃダメだからな」と、そんなことを延々と言い聞かせつつ、二人でテーブル席で異世界の食事に舌鼓を打つ。

おっおいしい。

異世界メシって味が薄かったり硬くて食えたもんじゃなかったりってイメージしかなかったけど、奇妙な海外料理に初めて出会ったときくらいの気持ちで食える。

「はあぁ～食った。美味しかった、また来たいな」
「ねえショウくん。最近ずっとモンスター狩りばっかりしてるからね。その、た、たっ、たまには息抜きに。今日は一緒にボードゲームとか、やってみない……？」
「うん、うん。やろう。いくらでも付き合うから。色んなのやろうな」
「あ、あれ。なんでそんな慈愛に満ちた瞳で私のことを見るの？　なんでちょっと泣いてるの。ねえ。ねえっ!?」
　こんなことで恩を返せるなら、いくらでも返すから。
　ぜったいこの子に悲しい思いはさせない。
　お腹いっぱいに満足して、ゆんゆんに詰め寄られながら食堂を出る。それからゆんゆんの泊まっている宿で一緒にボードゲームをいっぱいやった。
　なんでこんな大量に持ってきてるんだ。
　そして初心者とはいえ、何戦かして全敗し続けた。ゆんゆんは得意げに。そして、対面を確認しては幸せそうに頬を緩ませながら、笑みを隠そうともしない。つ、強い……。
　こんな可愛い子がどうしていままで一人だったんだろう。謎は深まるばかりだ。
「そういえばさ。ゆんゆんはなんでこの街に来たんだ？　ここは初心者の街だし、アークウィザード的には、もっと強い敵の出る場所にいったほうがレベルも上がるだろ」
「えっ。そ、それって、私がこの街にいると邪魔だから出て行けって……そ　そういうのじゃないよね？」
「なんでそうなるんだよ!?　あっ、〝ボトムレス・スワンプ〟で行軍妨害するわ。二ターン休みな」
「ええっ!?　そ、そんな手があったなんて……実はね。友達がこの街にいるの」
　ゆんゆんのいう〝友達〟には、もはや嫌な予感しかしなかった。
「ダメだぞ。変な人と付き合ったら……あっ俺も変な人だった」
「ショウくんは変な人じゃないよ!?　えっとね、実は……紅魔の里のライバルを追ってここまで来たの。めぐみんって言う子なんだけど」

「……めぐみん、めぐみんね」
この世界の他の人は、外人っぽい横文字の名前なのに、”めぐみん”。
紅魔族とは一体何者で、どこから来たのだろう。
「その子とは会えたのか？」
「ううん。めぐみんより早く街に着いちゃって。それでね、お金を貯めなきゃいかなかったり、めぐみんにレベルは負けられないからって、パーティーメンバーを募集して……で、でも、みんななぜかすぐ辞めちゃって……一ヶ月もしないうちにギルドの人にかわいそうな子を見る目で……」
「泣かないで!?　今は俺たちパーティーメンバーだろ!?」
虚ろ目モードに入ろうとしていたゆんゆんの肩を揺らすと、正気に戻って続きを話し出す。
「それでね、こっそりアクセルの街を探してるんだ。でも、人に話しかけられないせいで、聞き込みができなくて……」
「つまり会えてないんだな!?　わかった。わかったから、この話はやめよう!!」
「うん……あ！　じゃあマナタイトで回復してから爆裂魔法〝エクスプロージョン〟。これでわたしの勝ちだねっ！」
「あっずるいぞ！　せっかく後方で準備してたのが一気に吹っ飛ばされた……そんなのありかよ」
これでまた敗北。このゲームが一番勝てそうなのだが、あと少しのところで、まだ勝てていない。でも異世界ボードゲームは新鮮でどれも面白い。特に今やっているやつは、実際の魔法や職業をモチーフにしているらしいので、そういう意味でも楽しめる。
「んーっ、もうこんなに暗くなっちゃったね」
「今日はこのくらいにして、適当なところで飯済ませて明日に備えよう。その子もアークウィザードなんだろ？　なら聞き込みをすれば、すぐにわかるだろうさ」
「そうだね、ありがとう。ふふっ、めぐみん、わたしがパーティーメンバーと一緒だって知ったらびっくりするだろうなぁ」

「できれば隠しておいてくれませんか？　経験値吸ってるだけの人なので……」

第四話

『緊急クエスト！　緊急クエストッ!!　街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってくださいーー』

いつものように冒険者ギルドに向かおうとしていた俺とゆんゆんは顔を見合わせた。

「なんだこの放送。な、なんか、ものものしいな」

「とりあえず行ってみよう？　まさか魔王軍の幹部が来たってこともないだろうし……」

魔王軍？　冗談じゃない。こっちはまだ魔法を一つも覚えていない駆け出しウィザード。アークウィザードになるまでヒモでいる覚悟を決めたのに、さらにゆんゆんに借りを作ってしまうではないか。どうか違っていてください。

二人慌ただしく冒険者ギルドに向かうと、すでに大勢の人が集まっていた。

「皆さん！　突然のお呼び出しすいません！　今年もキャベツ収穫時期がやってまいりました!!」

と、ギルド職員の人が呼びかけていた。キャベツ？　……なんで冒険者にそんなことを頼むんだ。この世界にもちゃんと農家の人がいるだろ。そもそも、できがいいからって理由でキャベツ一万エリスって、元取れるのか？

「あーーーーーっ!!?」

「ん？　おや、あなたは……」

ギルドの人の説明が終わって、見知らぬパーティが次々に外に出て行った矢先のこと。

ゆんゆんが向こう側を指差して、思いっきり声をあげた。

あっ、カズマとアクアだ。そして見知らぬ金髪と銀髪の人。さらに隣にいた奇妙な帽子の魔法使いがゆんゆんにピクリと反応した。赤い瞳。背丈よりも大きな杖。ゆんゆんの持っているものと似たローブ。もしや、これは。

「めぐみんっ!!　あ、あなた、めぐみん。めぐみんじゃないの!!　やっ

と会えたわね!!」
「……？　あの、失礼ですが、どちら様でしょう？」
「えええっ!?」
　ガーン、とショックを受けた。ゆんゆんと同じ色の瞳が細まり、まるで面倒臭いとでもいわんばかりにため息を吐いた。
　あっこれは、ゆんゆん遊ばれてるやつだ。何か言おうと思ったが、それより先にカズマの「よっ」という、気軽な挨拶に答えた。
「ようカズマ、アクア。なあ、お前もう三人も女の子をパーティーメンバーに入れたのか？」
「ちげーよ。まあ、確かに一人はメンバーになったけどさ……そっちのゆんゆんと同じ紅魔族の子な。なあ、ものは相談なんだが、うちのめぐみんと取り替えないか？」
「無し。ゆんゆんが前から探してた子みたいなんだけど、お前のところにいたんだな」
「ねえ、ちょっと……えっと、あ、そうそう。ショウタ！　前は様付けだったのに、消えてるんですけど？　信仰心があるなら、敬称くらいつけてほしいんですけど！」
「う、うーん。すみません。今度クリムゾンビアとか奢るんで許してください」
「えっ本当？　それなら考えないこともないわ！　でも、ちゃんと今まで通り崇めなさいね！」
　アクアが寛大な女神様でよかった。この素晴らしい異世界転生に感謝、感謝。ナムナム。
「ところでこの騒ぎはなんなんだ。キャベツの収穫で一つ一万エリスって、どういうことだよ」
「さあ。俺もさっぱり何のことやら……おいアクア、知ってるか？」
「もちろんよ。敬虔なアクシズ教信者に免じて、特別に教えてあげるわ！　この世界ではね、キャベツは飛ぶの。ひっそり人知れぬ秘境で育った彼らは、まるで渡り鳥のように大空を飛んで、やがて次の地でひっそり息を引き取るといわれているわ。それだと勿体ないから、暴れまわるそいつらを冒険者が捕まえて、おいしく食べてあげるってわ

け！」
「俺の知ってるキャベツと違う」
　だが、周りの冒険者達はかなりノリノリだった。どのくらい強いかは知らないが、一つ一万エリス相当。ジャイアント・トード２匹分。しかも捕まえたキャベツはたっぷり経験値を持っており、初心者にはレベルアップの絶好の機会でもあるらしい。周囲の反応からして、かなりお得なクエストらしい。
「……なあ。そんなおいしいクエストには早くいくべきだと思うんだ。みんな行っちゃってるぞ」
「そうだな。俺たちも生活に余裕があるわけじゃないし……」
「ならカズマ、あの二人を止める手伝いをしてくれないか。めぐみんって子は、パーティーメンバーなんだろ」
　指差すと、ちょうど根負けしたゆんゆんが「我が名はゆんゆん!!」と、とうとう紅魔族流の自己紹介を始めたところだった。
　あの挨拶は異世界式でもなんでもないらしい。バサッとローブを翻して、戦隊ものみたいなポーズをとって言葉を締める。紅魔族はどうなってるんだ……顔真っ赤にして泣きそうになるくらいなら、やめればいいのに。
「ところで、そちらの方は？　まさかパーティーメンバーとか言いださないですよね？」
「ふふん。よく分かったわね、めぐみん。彼こそが！　彼こそ、我が切望したパーティーメンバーにして、女神に愛されし者！　いずれアークウィザードになる者、友達のショウくんです!!」
「ゆんゆん、やめて!!　その挨拶は心にダメージを負うだけだから!!」
　今後、紅魔族に他己紹介をさせるのは止めさせないと。
　そのとき傍にいたカズマとアクアはそんな目をしてた。いずれ、二人もめぐみんにあんな感じの紹介をされる日がくるのだろうか。
　そしてめぐみんは驚きに、眼帯をしていないほうの目を見開き、うなだれた。
「そ、そんなまさか……ゆんゆん。信じられません。あなたに友達ができたなんて……」

「ねえっ、それどういう意味!?　まるでわたしが友達のできない変な子みたいじゃない!?」
「実際その通りではないですか……くっ、そこのショウとやら！　彼女の名乗りは本当なのですか!?」
「うん、まあ……嘘は言ってなかった……」
「知ってるよね!?　紅魔族は自分の名乗りで嘘はつかないって、ちゃんと学校で習ったよね!!?」
「パーティーメンバーとは……信じられません。里ではずっと一人ぼっちで、族長の娘の金をたかりにくる同族を友達と呼び、暇なときは一人でボードゲームを嗜んでいた、あのゆんゆんが……」
「ちょっと、めぐみん!?　やめて！　みんなの目がどんどんかわいそうな子を見るものになってるから!!　ねえっ!!?」
　ほろり。涙が流れる。
　このクエストが終わったら、明日はたっぷり一緒にボードゲームをしような、と、そっと肩に手を置いた。めっちゃ涙目で抗議された。
「話はまとまった？　それじゃあ行きましょうカズマ、めぐみん。たっぷり稼いだお金で今日はとことん徹夜で飲みまくっちゃうんだから！」
「アクア。一応、お前の信者の前だぞー？　……よし。出遅れないうちに行くとするか」
「じゃあ行こう、ゆんゆん！」
「う……うんっ！」
　カズマは四つん這いになってショックをうけるめぐみんの背中をさすってから、泣き止んだゆんゆんの手をとった。
　残ったメンツとともにこの異世界で初めての、突発クエストに向かった。

　冒険者ギルドの一角にある、広めのテーブルを、七人のメンバーが囲んだ。

机の上にはキャベツが乗っていた。キャベツサラダ、キャベツ炒め、カエル肉のロールキャベツ。ゆんゆんとめぐみんは未成年なのでジュースを飲んでいた。
「……納得いかねえ。キャベツが、なんでこんなに美味いんだ。さっきの更新でレベル上がってたぞ」
「そりゃあ、この時期のキャベツには豊富な経験値が詰まっていますから」
カズマの気持ちがわかるのは、俺とアクアくらいのものだろう。話を聞いていた他のメンツは全員首を傾げていた。
「えへへ……これも……夢かな。こんなにたくさんの人と一緒に、わいわいご飯なんて……もう死んでもいい……」
「戻ってこーい……駄目だ。手を握ってるのに戻ってこない」
「なあ。紅魔族ってのは、こんな変なやつばっかなのか？」
「いくら何でも失礼ですよカズマ。大勢の前で緊張するのは、紅魔族の中でもゆんゆんくらいのものです。だからなかなか友達ができないのですよ……本当ですよ？」
紅魔の里とやらでのゆんゆんの暮らしぶりを想像する。
めぐみんの堂々とした挨拶はすでに聞いている。爆裂魔法を使うらしい。あまりどういう魔法か知っているわけではないが、ボードゲームでは敵に当たったら勝ちになる、最強の魔法だった。
「今日のキャベツ狩りで、途中ですごい爆発があっただろ？　あれがめぐみんの爆裂魔法だ」
「あっ、あった!!　へえー、あんな凄い魔法が使えるのか。さすが紅魔族。ゆんゆんのライバルって凄い奴だったんだな！」
「ふふん、あなたは私の偉大さが理解できているようですね。ゆんゆんのライバル認定されているのは少し納得いきませんが……聞き及ぶところによると、あなたもアークウィザードを志す者だとか。どうです？　我が切り開きし爆裂道を歩むというのは」
「だっ、駄目!!　いくら親友のめぐみんでも……爆裂魔法？　め、めぐみん。あなた、爆裂魔法を取ったの!!?」
「そうですが。どうです？　これで私が紅魔族随一の魔法使いである

ことが証明されましたね」
「う、うう……で、でも!!　わたしのほうが早くパーティーメンバーを見つけたんだから！」
「うぐっ。ぐぬぬ、確かに……ゆんゆんごときに遅れをとるとは……で、ですがパーティーの規模では私のほうが勝っていますから！」
「二人と三人じゃそんなに違わないだろ。いや、四人になったんだっけ……」
　ライバルらしく言い争っている。
　なんだ、ゆんゆんいい友達持ってるじゃん……ああ、今までで一番ほっとしてる。
「ところで、カズマ、アクア。そっちの二人は？」
「ああ、そういえば紹介もまだだったな……なあアクア、今からでも遅くない。やめておかないか？」
「何言ってるのよ。クルセイダーよ、クルセイダー。これで私たちのパーティーはアークプリーストの私、アークウィザードのめぐみん、クルセイダーのダクネス。ついでに冒険職のカズマで、上級職だらけのバランスのとれたパーティーになったのよ。喜ばないと！」
「……というわけで、紹介に預かったダクネスという。クラスはクルセイダー。このたびはカズマのパーティーに参加することになった、よろしく頼む」
「あたしはクリス。クラスは盗賊です、よろしく。そっちのお二人さんは、ショウとゆんゆん……で、合ってるよね！」
　……あっ。ゆんゆんが固まった。名乗りをあげなきゃいけないと思ってるなこれ。
「ああ。よろしく、クリス。ゆんゆん、さっきやったから、もうやらなくていいんだぞ」
「う、ううん。ここは紅魔族の長となる者として……めぐみんには負けてられないから。そう。わ、我が名は!!」
　幸い、周囲がキャベツ狩りで大金をせしめた冒険者の酔っ払いだらけなので、ほとんど注目を浴びなかった。
　だがゆんゆんは、・また心にダメージを負ってしまった。ダクネス

はひきつったが、クリスは、紅魔族の挨拶ということを知っているのか、全く気にせずにニコニコしていた。
しかし、上級職３人を揃えたパーティーか。
女神にしてアークプリーストのアクア。
紅魔族にしてアークウィザードのめぐみん
クルセイダーのダクネス。
「カズマ、アクアに祈っとけ。これだけのパーティーメンバーが集まるのは女神の力のおかげに違いないぞ」
「……」
カズマは食べる手を止めて、何か言いたそうにこちらを見ていた。やがて口を開きかけたが、アクアがカズマのクリムゾンビアをひったくったのを見て、抗議の声をあげた。そこにめぐみんも加わり、向こう側の席がほっぺたの引っ張り合いで、大変なことになっていく。
ぎゃぁぎゃぁ、ワァワァ。
騒ぎまくっている中、隣でゆんゆんがくんっと袖を引いてきた。
「どうしたゆんゆん。もうお腹いっぱいになったのか？」
「ううん。むしろね、こんなに楽しいのは生まれて初めてで……夢だったの……こんな風に、友達や仲間と、わいわいみんなで騒ぎながら、一緒に食卓を囲んだりするのが」
感極まったように、ゆんゆんは涙を溜めながら言った。
そしてポケットから取り出したアクシズ教のペンダントを首から下げて、それに気づいたアクアがぱぁぁぁっと顔を輝かせる。
「……正気ですか、ゆんゆん」
「えっちょっと、何？　あなたもアクシズ教徒になってくれるの？この水の女神アクア様を信仰してくれるの？」
「はい。アクア様と、ショウくんには、返しきれないほどの恩ができちゃいましたから。あの、願いを聞いてくださって、本当にありがとうございます……っ!!」
「願い？　うーん、そんなの叶えた覚えはないんだけど……ま、細かいことはいいわ!!　私に感謝するなら、１日３回は祈りを捧げなさい！
ついでに総本山のあるアルカンレティアで、この私が直々にアクシ

ズ教の洗礼を受けさせてあげるわ！　カズマやショウも一緒にどう？」
　カズマは首を横に振った。俺は身を乗り出してきたアクアに苦笑いした。
　アクシズ教の総本山。ちょっと嫌な予感がするけど、そのうち旅してみたいな。いい宗教だったら、ちょっと怖いけど入信を考えてもいいと思ってる。ゆんゆんがかわいいから。
「っていうか、お前らちょっと落ち着け！　今日の目的は打ち上げもあるが、新しい仲間の歓迎と、新しい友人と親睦を深めるのが目的だろうが！　俺も忘れてたけど！　グラス持てお前ら!!」
「おっと、そういえばそうでしたね。ゆんゆんに挑発されたせいで目的を見失っていました」
「めぐみん!?　わたしのせいなの!?　あなただって勝負のこと言ってたじゃない。ねえっ!?」
「落ち着けゆんゆん！　めぐみんも！　二人ともまずはジュースを持って!?　な？」
「うむ、なかなか楽しそうなパーティじゃないか。私も彼女を見習って、エリス様に感謝せねば」
「よかったねダクネス。これで、ようやくあたしも安心できたよ」
「見てみてみんなーっ、いよっ！　祝福の『花鳥風月』っ!!」
「馬鹿、宴会芸やるのは待て！　ってかお前も持て。めぐみんも！」
　全くまとまりのないまま、カズマはいくらかのメンバーがジョッキを手にしたのを見て、ヤケクソ気味に叫んだ。
「それじゃあみんな。これからの冒険で、きっと色んな苦しいことがあるだろう。
　けど、ひとまずは。ここでできた新しい仲間と、友人に、乾杯しようぜ！　乾杯!!」
「「「「「「乾杯っ!!」」」」」」
　ただでさえ騒々しい冒険者ギルドで、笑顔の七人が持ち上げた七つのジョッキが、軽快な音を立てて打ち鳴らされた。

第五話

「マジか」
「マジだ。ごめん、期待に添えなくて……」
日々を過ごしている馬小屋の裏手で、カズマが呆れ返った。
この前の飲み会で帰り道をともにした俺とカズマとアクアは、お互いに思いの外すぐ近くの馬小屋に泊まっていることが判明し、今朝は寝起きで外の風を浴びに来たところにカズマが訪ねてきた。
なんでも、冒険者クラスはなんでもスキルを覚えられる職業らしく、ウィザードから何か役に立つスキルを学びにきたらしい。見ただけで冒険者カードに、取得可能スキルが刻まれるのだとか。便利だ……。
だが、スキルなんて一つも持っていない。
すべてのスキルポイントは、アークウィザードになったときのためにストックされている。一応、見せる。やがて、ぽんと肩を叩かれた。
「大丈夫。たとえ最弱職の俺より弱くても、俺たちは友達だ」
「……」
ゆんゆんがいなければ何もできない俺は、何一つ言い返せなかった。
「そ、そういえばアクアは？　一緒の小屋にいるんだろ？」
「まだぐーすか寝てる。お前と、特にゆんゆんには見せられないほどみっともない、ニートだった俺よりぐうたらした感じでな」
「そ、そんなことで感謝の念が揺らぐことはないから……しかしお前、女神様を馬小屋に連れ込むとか、いいのか……？」
「女神？　女神様がどこにいるっていうんだ？　工事現場のおっさんと打ち解けて、意気投合して酒をガブ飲みして、何回も懲りずに大変なことになっているやつなら知っているが」
「アクア……」
感謝の念が揺らぎそうになるのを、昨晩のゆんゆんの涙顔を思い出すことで、なんとか支えた。
ずっと守りたい、アクアがくれたあの笑顔。

「それにしてもそんな便利な職業だったのか、冒険職。最弱とかいうからてっきり何もできないものかと思ってたよ」
「スキルポイントが全然貯まらないから、スキルを教えてもらっても取れないんだよ。それに比べてアクアは5ポイントもする宴会芸スキルをとった上で、アークプリーストのスキル全取りしてるらしいし……異世界って、こんなんじゃないだろ……」
「クルセイダーも加入したことだし、紅魔族で言う〝養殖〟させてもらったらどうだ？」
「それは無理だ。お前のところみたいに万能なアークウィザードなんて一人もいない。いるのは最弱職の俺、攻撃力皆無のアクア、一発屋のめぐみん、攻撃の当たらないクルセイダーだぞ」
「……あのすっげー美人のクルセイダー、そんなんなのか？　パーティー偏ってんな……おい、そんな目をしても、ゆんゆんはやらんぞ」
「チッ。あのとき俺も美少女を願っとけばよかった。おい養殖マグロ、あとでお前の転生特典をうちのめぐみんとすり替えてやる」
「その名前はやめてくれ最弱職。分かった、俺がアークウィザードになったあとは、ゆんゆんに養殖してもらえないか頼んでやるから」

そして用意を終えた俺はカズマと別れ、昼にさしかかる時間ではあったが、一足先に冒険者ギルドに向かうと、当然のようにそこにいた。建物の隅でうつむいて、じいっと待ってたゆんゆんが「あっ、おはようショウくん!!」と、顔を上げるなり目を輝かせた。
かわいい。もう一生離れられない。絶対にあの最弱職にはやらんぞ。
「ねえ、ずっと心配だったんだけど。昨日のことは夢じゃないんだよね。みんな現実だったんだよね？　わたし、知らない人といっぱいお話しできたんだよね？」
「キャベツ捕まえて、新しい友達と飯を食って、めぐみんにも会えたのは現実だってば。そんなに不安がらなくても大丈夫だから。それより、あの、今日もレベリングお願いします」
「うんっ!!　わたしに任せて。一日でもはやくアークウィザードにし

てあげる！　そしたらね、パーティーメンバーとして一緒にいろんなところ冒険しようねっ!!」
　両手を前でぱんっと打ち合わせ、未来に目を輝かせた。
　誰かに、その可愛らしい瞳を濁っていると言わせないために頑張ろう。アクシズ教のペンダントを、しっかり豊満な胸につけるようになったゆんゆんの手をとる。手を触れ合わせたことに驚いているのを感じながら、今日も冒険者ギルドに入った。
　こうしちゃいられない。のんびりしてたら、一生追いつけない。
　いずれ化けの皮が剥がれて、魔法の使えないウィザード呼ばわりされてしまいかねない。
　ちゃんと、背中を守りあう感じの、タッグウィザードがやりたいのだ俺は。
「今日はあんまり経験値がもらえそうなちょうどいい依頼、出されてないね……」
「他の街に行くっていうのは？　この街の冒険者はレベル２０くらいで、もっと強くて経験値が多いモンスターを狩りによそに出て行くっていうし」
「えっ!?　……う、うう。本当はそうしたほうがいいんだけど……」
　ちら、と。ゆんゆんは昨日俺たちが座っていた席を見ていた。
　あっそうか。
　そういえば、いずれ紅魔族の長となるゆんゆんは、紅魔族で成績トップだっためぐみんを追いかけてここに来たって言ってたっけ。
「分かった。めぐみんとの決着がつくまで、アクセルにいよう」
「ご、ごめんね？　外に出れば、もっと強いモンスターを狩ってレベルを上げてあげられるのに……」
「いえ。私はもともと何も言えない身なので……与えてもらう立場なので……」
「敬語にならないでっ!?　わたしがあげてばっかりみたいに言うけど、ショウくんもいっぱいわたしにくれてるんだからね？　こんなことじゃぜんぜん返しきれなくって……」
　掲示板の前で、二人とも黙り込んでしまった。

やがて、またお互いに見つめ合った。ゆんゆんは若干上目遣いで、ほっぺたもほんのり赤い。
「……今日はこれにしようか。猪鹿鳥の討伐クエスト……だっけ？　牙と角を向けて空から突進してくるちょっと危ない敵だって聞いたけど、どうだ？」
「う、うん。そうね、それにしよっか」
オーケーをもらったので、なぜか一緒に来ないゆんゆんをよそに、依頼書を剥がして受付に持って行く。
ぽつりと、背後でゆんゆんが何かを言った気がして振り返る。だが、慌てて口を閉ざして深くうつむいてしまって、何を言ったのかはわからなかった。

『緊急クエスト！　緊急クエストッ!!　街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってくださいーー』
ゆんゆんと二人きりで、今度は異世界麺料理を出す店で朝飯を食らっているとき。
いつか聞いたアナウンスが、街中に鳴り響き。思わずレンゲをスープの中にポチャンと取り落とした。
「ま、またか。今度は一体なんだ？」
「わっわからないけど……早く行ったほうがいいよね。街に何かあることだったら、大変だもん！」
たとえ魔法が使えなくても、冒険者の端くれ。さっさと食事を済ませて冒険者ギルドに向かおうと、ゆんゆんが頑張って頬張っているのを眺めていると、アナウンスが続いた。
『ーー冒険者の皆さんっ!!　宝島ですっ!!』
ガタッ。ゆんゆんは突如として立ち上がり、無造作に料金をカウンターのおじさんに渡す。
それから俺の手をひっつかんで、嵐のように外に飛び出した。
「な、なんだなんだ!?　ゆんゆん、待って。なんだ宝島って!?」

「えっと、おっきな亀さんモンスターが出たんだよ！　あ、ああどうしよう。ショウくんのためのツルハシなんて持ってないからギルドで借りないと……ううん、むしろ、わたしの魔法で落ちたものを集めてもらえば……でもそれじゃあ……」
「ま、待って。ちゃんと説明をお願いしたいんだけど!!　……って、あれアクア？　アクアだ！　おーい!!」
　アクアと、もう一人知らない人が一直線に冒険者ギルドに向けて土煙を上げながら、凄まじい勢いで走ってく。
　声をかけたのに、こちらには目もくれず。
　その後ろをへろへろと、カズマがついていってた。ゆんゆんと顔を見合わせ、さらにカズマの後ろを追った。目的地はもちろん、冒険者ギルドである。
「はあっはぁ……着いた……おいカズマ！　なんでアクアはあんなに焦ってんだ？」
「俺だって知らねえよ……おい、どういうことか説明してくれよ。宝島って何なんだよ？」
「あ、あの。よければわたしが説明しますね……」
　カズマが叫ぶと、アクアと一緒に走っていた血色の悪い胸の大きなお姉さんが説明してくれた。
　宝島とは巨大モンスターの名前らしい。山よりも大きなそのモンスターは十年に一度のみ、甲羅干しするために現れ、鉱脈を住処としているために、甲羅には希少な鉱石がいくつもくっついている。冒険者たちはモンスターをよじ登ってこれを取りにいくのだとか。
　なるほど。
　二人は、受付のほうにリュックとツルハシを取りにいったらしい。もっとも、受付に行くことを嫌がるゆんゆんは、アクアに頼んだみたいだが。
「ほらカズマ、持ちなさい。ゆんゆん、あなたこの女神様にパシリをさせるとは、なかなかいい度胸ね！」
「す、すみません……どうしても、あの受付の人を思い出すと、その……あの寂しい人を見るような目を思い出してしまって……」

「えっ。あ、ご、ごめんね？　アクシズ教徒ですもの、このアクア様を頼るのは当然ですよね！　……って、そんなこと言ってる場合じゃないわ!!　あんたまで、なんでここに来てるのよ!?」
　アクアは、ビクッと震えた見知らぬ女性に抗議する。
「いいじゃないですか！　私の店、今月も赤字で大変なんです。宝島の希少な鉱石でもないと、その、とてもかさんだ借金が返せなくって……あっ、そちらの方。ウィズ魔道具店、ウィズ魔道具店を宜しくお願いします!!」
「あんたの借金なんてどうだっていいわよ！　そんなことより、稼がなきゃいけないの私は！　この前のキャベツ狩りでぜんっっっっっぜん稼げなくて、借金できちゃったのよ、このアクア様が借金!!」
「そりゃお前が調子にのってアホみたいに飲みまくるからだろうが。なんだよレタスって……プークスクス」
「あーーーっ!!　笑ったわね!?　見てなさい、今日の宝島でカズマが泣いて謝るくらいの金を稼いでやるんだから！」
「言ったな？　なら今日も儲けは別々な。いいか？　あとで文句言っても知らないからな？」
「上等よ！　岩よりもでっかいマナタイトとってきてやるんだから!!
　泣いて謝っても、報酬分けてあげないんだからね！」
　カズマには、変な人を集める能力があるにちがいない。そんな気持ちを込めて目を向けると逸らされた。
　そしてカズマや道具屋の店主さんはともかく、女神様がやる気満々で、ツルハシ片手に鉱石を掘りにいくのか。
　ほんとどうなってるんだ、この異世界は。

「うわ……」
「なんだこれ……」
　街の入り口を出て、俺とカズマは昨日までそこに存在しなかった山を見上げた。
　すでに冒険者が山に向かって突撃している。岩盤むき出しのそれには、確かにキラキラと色とりどりの鉱石が見え隠れしている。

宝島と呼ばれる亀は、出てきたであろう穴のそばでじっと体を横たえていた。真っ先に受ける印象は、とても温厚そうだということ。冒険者が背中に群がってツルハシを振り下ろしているというのに、気にもしていない様子。懐もでかそうだ。
「い、いこうショウくん!!　高純度のマナタイトが掘れれば、紅魔族垂涎ものの、強力な魔法杖だってできるんだから！」
ああ。それで、こんなに張り切ってるのか。
この辺りには見つからないが、きっとめぐみんと勝負するつもりなんだろう。冒険者はみんな来ているはず。鉱石取れた順勝負に加えて、ゆんゆんやめぐみんも持っていないような強力な杖が作れるなら。
ゆんゆんにとってはこの上なく魅力的で、しかもおいしいクエストだ。
「おおおおおっ、すげえっ!!　希少な鉱石がこんなにたくさんっ!!」
「うわぁあっ、鉱石モドキだっ!?　こっちくんなっ、くそっ。うおおおっ!!」
「待てそこのモンスター！　私のところに来るんだ。その柔軟でいやらしい触手を、その男ではなくこちらに伸ばせ！　このクルセイダーが全て受け止めてやる!!」
「ちょっ、ダクネス!?　こっちを手伝ってください！　ゆんゆんに負けるわけにはいかないのですから！」
がんばるぞっ、と張り切っているゆんゆんをよそに、遠くからそんな声を聞き分けた。
……あの金髪美女クルセイダーの声に聞こえたが、きっと聞き間違いなので、聞こえないふりをした。きっとカズマがなんとかするだろう。
「それじゃあ、わたしが”ライト・オブ・セイバー”で削るから、ショウくんは鉱石を拾って、どんどんカバンにいれていって!!」
「大丈夫なのか？　紅魔族の強力な魔法だと、さすがに宝島も怒るんじゃないか？」
「大丈夫。いつもはすっごい地下に生きているモンスターだから、本

来の甲羅は上級魔法くらいじゃ絶対傷つかないくらい硬いの！」
「なるほど。じゃあ頼むゆんゆん!!　ぶっ放してくれ！」
「うんっ！　いくよ。ちっちゃい〝ライト・オブ・セイバー〟っ!!」
とても嬉しそうに魔法を唱えると、何重もの魔法陣が輝く。
数秒もしないうちに甲羅の表面が砕け散り、ぱら、ぱらと落ちてきた鉱石を拾い上げ、次々にカバンに放り込む。石そのものが輝いているものが必ず価値の高いもので、向こう側が見えるくらい透き通っているものや、色付きの鉱石が高い確率で価値があるものらしい。
「ゆんゆん、探すの手伝ってくれ！　他の冒険者に拾われる前に、ちょっとずつやろう!!」
「え？　う、うん!!　そうだねっ。わたしも頑張って見分けるよ！」

とまあそんな調子で。
ゆんゆんが魔法をぶっ放して、分解した石の山から鉱石を二人で探す。鉱石掘りを頼っているとはいえ、初めてだ。初めてパーティーらしいことができて、ウキウキだ。
希少な鉱石が砕けない程度の威力で魔法を放っているらしく、価値の高い鉱石はしっかりと形を残していた。上の方から「あっ、ずりぃ!!」と知り合いの声が聞こえた気がしたが……お前のところのアークウィザードに手伝ってもらえと、聞こえないふりをした。爆裂魔法はさすがに宝島も怒りそうだけどさ。

やがて陽も落ち、甲羅にこびりついた全ての鉱石を落とした宝島は穴に潜る。
冒険者ギルドはお祭り騒ぎだった。
歓喜の中、とある一人の冒険者が悲痛な叫びをあげていた。
「あああああああっ!!?　嘘です、こんなの嘘ですぅーっ!!」
「やった、やったぁあっ!!　やっと、やっとめぐみんに勝ったぁーーっ!!」
隣のテーブルは鉱石が山積みにされていたのだが、めぐみんが突っ伏した衝撃で、いくつか端っこの石が転がり落ちた。さらにテーブル

をばんばん叩いてる。その正面で、ゆんゆんが頬を真っ赤にして超喜んでた。
「なあカズマ。あれはいったい何をしてるんだ？」
「そういえばダクネスは知らないんだっけ。ま、紅魔族同士の因縁ってやつ？　今日は採れた最高級鉱石の数で勝負したみたいだな。おーいめぐみん、早くこないとー、アクアに全部食われるぞー！」
「くぅぅっ。最近、ゆんゆんに負け始めてしまってます……ゆんゆんのくせに……」
「えへへへぇ……どうめぐみん!?　これがわたしの実力よっ！　もう、そう簡単に負けたりしないんだから！」
ゆんゆん、嬉しそうでよかった。うん本当によかった……。
ちなみに向こうの机に乗っている鉱石は換金後、俺とゆんゆん、めぐみんとダクネスでどちらも折半されることになっている。
「カズマも、アクアも大量に採れたみたいじゃないか。最後の爆裂魔法がけっこう効いたな」
「もっちろん!!　見なさい、このマナタイトの輝きを！　こんな高純度のマナタイトなかなかないわ!!　すいませーん、えっと、ここからここまで。ジャンジャン持ってきてちょうだい！　もうお金には困らないんだから。今日は飲み明かすわよーーっ!!」
「あ。そういえばアクア、聞こうと思ってたんだけど。カズマは異世界の文字を読めるのに、なんで俺は読めないんだ？」
「はっ？　……あっ！　そうそう、思い出したわ。あなたね、願いを叶えようとしたのはいいんだけど、脳が異世界言語の習得プログラムと相性が悪かったみたい。そんでこれ以上やるとパーになって、そもそも願いが叶えられなくなるってことで、中断してそのまま転送させたの」
「……魔剣選んでたら、俺は今頃パーになってたのか」
あのアクアのいた空間で、魔剣とか選んだらハーレム作れるとかなんとか言われて後悔したもんだが、やらなくてよかった……
カズマは、またもや胡散臭い目でアクアを見て。まさか、と言わんばかりに気づいたように自分の頭を押さえた。お前は大丈夫だった

ろ……いやまて。もしかすると、パーとはいかなくても、気づかないうちに、どこかダメになってるかもしれない。
　異世界転生やっぱ怖え……
「ねえっ、聞いてショウくん!!　あのね、ショウくんのおかげでわたし、めぐみんに勝てたよっ!!」
「うおっ、おっ。おっ!?　よ、よかったな……あの、ゆんゆんさん？　その当たってますけど……うぐぉ。ゆ、ゆんゆんさん。ゆんゆーん……」
「えへへ……勝ったぁ。めぐみんに勝った……!!」
　がばっ、とお腹のあたりに飛び込んできた。嬉しさのあまり我を忘れたゆんゆんが、すりすり。やめて。膝のあたりが柔らかすぎて、なんかもう色々きついです。
「くぅっ、悔しいですカズマ!!　それをよこしてください。くぅっ、ですが今回は二対二のチーム戦です。次は1対1の勝負で……んぐぅっ。ふんすっ」
「めぐみんも俺の胸に飛び込んできていいんだぞー？　……くそ、やけ食いに夢中で聞いてねえ」
　なかなか我に返らず、膝の上に頭を乗せたゆんゆんを撫でながらアクアに尋ねる。
「なあアクア。レベルが上がって、知力のステータスも上がったことだし、異世界言語を読めるようにはならないのか？」
「無理ね。そういうのは、あの空間でしかできないようになってるの。頑張って勉強するほかないわね」
「じゃああの空間にはいけないのか？　女神なんだろ、習得できるようになったらもっかい連れてってくれよ？」
「ううっ、わだしだって、わだしだって帰りたいわ……ぐすっ。できないのよ、帰れないのよぉぉ……けど行く方法がないわけじゃないわ」
「あるのか!?　どんな方法だっ!?」
「それはね。サクッと死ねばいいのよ。そうすれば、女神のところに行けるわ……」

女神様の提案にがくりと俯いた。
どう頑張っても、俺はヒモにしかなれないようだった。
「……ゆんゆんに教えてもらいます」

第六話

「カズマさあああぁぁぁん！　お金かしてぇぇ、お願いよ、お願い!!
ツケ払う分だけでもいいからぁ！」
「だあああっ、知るか!!　キャベツの時も報酬は別々にするって決めてただろ！」
　冒険者ギルドではいつも通り、元気なカズマたちのパーティが争っていた。
　涙まみれのアクアがカズマの前で跪いてがくがくと揺さぶっている。すがりついている。逆じゃないのか普通。
「えっと。アクア様、どうしたんだろう」
「思ったより換金ができなかったんじゃないか？　あれから毎日、カズマのパーティ以外の冒険者とも酒盛りしてたみたいだし」
「そ、そうなんだ。大丈夫かな……」
　心配しなくていいと思う。いざとなったら飲まず食わずでも生きていけそうだし。なんたって女神だから。
　そして一旦、様子を見ようということでバーカウンターで時間を潰した。ゆんゆんと二人でジュースをコクコク飲んでいるうちに、徐々に理性的になっていく。いやでも聞こえてくるほどの声量で、泣きじゃくるアクアがクエストを受けたがった。聞いていた通りお金がスッカラカンらしい。あ、借金はカズマが立て替えたみたいだ。借金をせがむ女神とは一体……
「わたし超全力で頑張るから、お金になるクエストを受けたいの!!
お願いカズマさん。お、お願いよおおおぉぉ!!」
「そうは言ってもなぁ……」
「わたしもまだ、この前のマナタイト製の杖が完成していませんし……」
「行きたいのは山々なのだが、その、新調した鎧の引き渡しもあってな……」
　パーティメンバーの三人とも乗り気ではないみたいだ。
　可哀想に、という感想が出てきたところで、ゆんゆんが立ち上がる。

あ、行くのか。彼らもすぐに気がついたようである。
「あっ……あ、あ、あのっ!!　アクア様！」
「へっ。あなたは、この前一緒だった紅魔族の……誰だっけ？」
「ゆ、ゆんゆんです!!　このペンダント、この前見てもらいましたよね!?」
「あっ！　そうそう!!　この私の敬虔な信者のゆんゆんじゃない！　今日はどうしたの？　もしかして、この女神アクア様に直接お布施しにきてくれたの？」
「おいやめろ馬鹿。いくら元女神とはいえ、友達から金を取ろうとするんじゃない」
「ちょっと。現在進行形で女神なんですけどっ!!」
　アクアが抗議したところで、ゆんゆんが続けた。
「も、もっ、もしクエストをお探しなら。わたしがアクア様に依頼をしたいのですが！」
「へっ。わたしに直接？　なになに!?　つまり指名クエストってことよね!?」
「……嫌な予感しかしねえ」
　カズマと同意見だ。俺も、一応反対したぞ。
「はい！　えっと、わたしちゃんとアクシズ教団に入信したいと思ってて……その、御神体のアクア様に直接見守って頂ければって……あっ！　報酬はこのくらいお支払いしますので!!」
　と、ゆんゆんは懐からギルド指定の依頼書を取り出してアクアに渡す。本来なら掲示板に貼られるはずのものだ。
　ふーん、となんでもないように受け取ったアクア。その顔色が、みるみるうちに変わる。
「さ、ささ、三百万エリスっ!!!?」
「はぁ!?　ちょっと貸せ。ま、マジで？」
　ひったくったカズマから「ちょ、ちょっと返しなさいよ！　私の受けた依頼よ!?」と手を伸ばす。だが、めぐみんとダクネスの周囲をぐるぐる追いかけっこして、なかなか捕まらない。
「ゆんゆん……さすがに、お金の使い道は考えたほうがいいですよ。

アクアが完全に固まってしまったではないですか」
「い、いいの!! 友達をいっぱい作ってくれたんだもの。今度はわたしがお返しする番だと思うの！ 額の大きさは、お礼だと思ってもらって……」
「カズマの今回の報酬と同じくらいか。さすがは、紅魔族の冒険者だな」
「そ、そんなに儲けてたんですかカズマ!? ……というか三百万なんてどこからそんな大金湧いてくるんですか。わたしは今注文している杖を買うために、貯金のほとんどを費やてしまったというのに」
「ふふん。この街に来てから、ショウくんと一緒に高難度のクエストをいっぱいこなしたんだから。それに、街に来たあとに一人で冒険者登録して、一人でモンスターいっぱい倒して、使い道もなく溜まる一方だった冒険者貯金がまだいっぱいあって」
ゆんゆんは言葉を続けたが、全員が目を逸らした。「カズマ。今度、ギャンブルか何かで絞りとってやりましょう」とめぐみんが囁き、頭をコツンと叩かれる。
「で、肝心の依頼内容は……” 洗礼を受けます。その立会人をお願いします”?」
「ふふん。しょうがないわねー、そこまで言われちゃ仕方ないわ。アクシズ教団の御神体である、このアクア様にまかせなさい！」
「お前。いいのかよ……女神の立場で金取って」
「だ、だってしょうがないじゃない。このままだとカズマに立て替えてもらった借金だって返せないのよ？ それに、アクシズ教団に入ってくれるって言っている子の願いを突っぱねるわけにはいかないし……」
それからしばらく相談した結果。
さすがに三百万はやりすぎという満場一致の意見で、借金分と、クエスト中の雑費に加えて、個人には三十万エリスを支払うことになった。
アクアはふくれたが「宗教で大金を取り始めたら終わりだぞ」とカズマとめぐみんに言われ、渋々、受け入れて、内容と文面を少し変え

た依頼書を提出しに行く。やがて戻ってきたアクアは複雑そうな顔をしてた。
「ねえ。なんか受付のお姉さんに変な目で見られたんですけど……なんで？」
「だろうな。それより、本当に俺たちは行かなくて大丈夫なのか？」
「総本山のアルカンレティアの途中までは馬車だけど、そのあとはテレポートサービスを使っていくだけだし平気よ。それに、彼女は優秀な紅魔族なのよ」
「そうだった。どこかの爆裂魔法しか使えないロリっ子と違って、ゆんゆんは冒険に便利な、いろんな魔法が使えるもんな」
「おい。今なんていいました。わたしに文句がありそうですね。爆裂魔法はあらゆる魔法の頂点なのです。その身で理解させてあげましょうか？」
「い、いや。なんでもない。俺が悪かったから、その詠唱をやめろ!!」

「それで、なんで私の依頼にカズマたちまで着いてきてるわけ？」
「考えてもみろ。俺たち、この世界に来てからまだ一度も冒険の旅をしてないんだぞ。そりゃあアクセルである程度のレベル上げするまで我慢しなきゃっつっても、行ってみたいじゃないか。金もあることだし。安全な旅だっていうし」
「はい。幸い、私もダクネスも、キャベツと宝島のクエストでお金には困っていません。それに温泉の町ドリス、水の都アルカンレティア。行ってみたいじゃないですか!!」
「うむ。だが……ゴホン。我々に関しても、道中のクエストも目的の一つだということも忘れないようにな」
「あっそうだったわね！　でもでもっ、今回のクエストでわたしの借金もチャラ。受けたクエストの報酬ももらえるわけだし、えへへ。お酒も飲み放題となると、素晴らしい旅になりそうね!!」

商隊の馬車に乗せてもらいながらの旅、ということで落ち着いた俺たちは、思い立ったがさっそく出かけることを決意した。
最近は宝島のおかげでアクセルの街は大いに潤い、商人の出入りも激しくなっている。街の屋台は数が増えたし、冒険者ギルド内の雰囲気も明るく変化していた。
さすがは十年に一度のビッグイベントと呼ばれるだけあるだろう。
馬車の近くに集合し、和気藹々と騒ぐカズマのパーティーを眺めていて、仲良しだなと思った。なんだかんだ言っていいパーティーのように見えるんだがな。
「めぐみんのパーティ、楽しそうだなぁ……」
「さ、俺たちも用意しよう。馬車の予約もしないとな」
「うんっ！」
そうして馬車を探し始めると、相乗り馬車はもうどれも一杯で、せいぜい一人しか乗れるスペースが残っていなかった。
今日急遽決まったクエストだから、仕方ないといえば仕方ない。
残っていたのはかなり高値の高級馬車か、三人乗りの小さな馬車が二台。俺たちは顔を見合わせる。
「どうする？　四人まとめては乗れないってさ。後ろの荷物席になら乗せてくれるっていうけど」
「わ、私は嫌よ……あっ、そうよ!!　あっちのパーティは二人よね。余った席に座るっていうのはどう？」
「あ、それもそうだな。ショウ、ゆんゆん。そういうことで頼めないか？」
「俺はいいけど、どうだ？」
「う、うん!!　もちろんっ。でも、誰がこっちに来るの？」
「それなら、私が行きましょう。ゆんゆんとは色々積もる話もありますので」
めぐみんがずいっと前に出たので、すぐ話が決まった。
アクアの分はゆんゆんが出し、他のみんなはそれぞれチケットを買う。俺も今回は自分の金で買えたぞ。この前の宝島クエストで、ちゃんと自分の力で稼いだお金が入ってきたのだ。よかった。

しばし待っていると、ガタンと馬車が動きだす。
やがて門を出るまで、みんな無言だった。
みんな、冒険者として思うところがあるのだろう。特に俺とカズマ、アクアは初めてアクセルの街から出たのだ。今の自分と同じように、遠足に行くときのような感動を胸に抱えていることだろう。
「よく来たわね我がライバルめぐみん！　歓迎するわ!!」
「……今日は勝負をしに来たわけではないのですが」
馬車が走り出して、アクセルが見えなくなったころにめぐみんがぽつりとそう言った。
「私が来たのは、ちゃんと聞いておかなければいけないと思ったからです」
「へっ？　私と勝負してくれるわけじゃないの？」
「違いますよ。だいたいこんな狭い中で、どうやって勝負しろというのですか」
真面目な雰囲気を出していることに気づいたゆんゆんは、意気込んで体の前で両拳を握った体制のまま、きょとんと隣に座った親友のことを見つめる。
「ゆんゆん。あなたのことを邪険に扱ってきましたが、実は私も、ちょっぴり、ほんの少しだけ、あなたのことを、あなたの言う通りライバルであると思っています」
「えっ？　ね、ねえ、突然どうしちゃったのめぐみん……今までそんなこと、一度も言ってくれたことないのに」
「失礼な。あなたも、多少は分かっているものだと思っていましたが……まあ、それはよいでしょう」
めぐみんが突っかかるが、ゆんゆんは本気でライバルの言葉に戸惑っているみたいだった。何度も「ねえねえ」と聞いているが、以降は全てそっぽを向いて無視している。
仲がいいのか悪いのか。久々に再会した二人の会話が、めぐみんの「あなた誰ですか？」で始まったことを、不意に思い出した。
「そんなあなたが、パーティーメンバーを見つけたと聞いた時には驚きました。里では挨拶すら恥ずかしがり浮いていたあなたが、街でも

ぼっちの紅魔族と噂されていたあなたが、パーティーメンバーを見つけ、あまつさえ友達とさえ呼ぶ人を見つけたと聞いた時は、それはもう耳を疑いましたよ」
「ちょっと!?　わたしそんな噂流されてたの!?　いくらわたしだってパーティーメンバーくらいできるからね!?」
「そこです！」
「へっ？　そこって？」
「それを、確かめにきたんです。本当にそこの男がパーティーメンバーと呼べる存在なのかを……」
　めぐみんは勢いよく、ビシッとこちらの顔面向けて指先を突きつけてきて、たじろいだ。
「聞くところによりますとっ!!　あなたはウィザードという職につきながら、魔法は一切使えず。しかも紅魔族であるゆんゆんの〝養殖〟だけでレベルを上げているそうではないですか！」
「そ、それがどうかしたの、めぐみん？」
「どうしたの？　ではありません！　……わかりました、はっきり言いましょう。私は、その男がゆんゆんの能力を利用するだけに近づいてきた、悪い虫ではないかと思っているのです！」
　あ、これ全く言い返せないやつだ。
　めぐみんの追及に、ゆんゆんは口をぱくぱくさせるばかりで、俺は黙ったままだった。
「答えてください。あなたはなぜゆんゆんのパーティーメンバーなどやっているのですか！
　ゆんゆんの持っているお金ですか。それとも〝養殖〟目当てですか。それとも女だからですか。答えてください!!　場合によっては、この場で……」
「めっめぐみん!!　いくらなんでも、そんな言い方……」
「ゆんゆんは黙っていてください。それに、この旅だって、あの悪名高いアクシズ教に入信するためというではないですか。一体、ゆんゆんに何を吹き込んだのですか!?」
　幼くはあるが、鋭い真紅の瞳が、真っ直ぐに睨みつけてくる。

ゆんゆんも何も言えなくなったのだろう。しょぼんと俯いて、居心地が悪そうに様子を見守っている。
「……ああ、そうだよ。確かに俺はゆんゆんとパーティーメンバーになってから〝養殖〟させてもらってるし、パーティーメンバーだからって報酬は半分いつも手渡されてる」
めぐみんと目を合わせたまま、逸らせない。
本気で怒っているように見える。確かに今までの行動からそう思われて当たり前だ。異世界に来てからの自分の行動を振り返り、今までで一番恥ずかしくなった。
「でも、ゆんゆんと一緒にいるのは、〝養殖〟目当てでも、お金目当てでもない。そもそも受け取ったお金は、この前の緊急クエストの報酬以外は一切受け取ったつもりはない」
「……では、何のためにパーティーを組んだというのですか？」
何のため、か。
最初からヒモになるために近づいたわけじゃない。最初こそ彼女が欲しいという願いを叶えてもらって出会いはしたものの、それは今の自分の答えじゃない。
「この街に来て、最初に出会ったのがゆんゆんだったんだ。そこで右も左も分からない、知らない人の俺に色々親切にしてくれて。それで一緒にクエストに出たとき、こんなすごいウィザードになりたいって思ったんだ」
「……」
めぐみんは口を挟まなかった。
ジャイアント・トード討伐クエストを受けたとき。見たこともないほど巨大。身長の何倍も大きなカエルが、地響きを立てながら飛び跳ねてくるような存在が、眩い一筋の光に葬られた鮮烈な光景。
人間ではとてもありえないような強力な力。
俺のために振るって、それが終わると頬っぺたを赤らめながら褒めて欲しそうに微笑んだ紅魔の少女。
今あったことのように思い出した。
だから異世界に来て、あんな魔法を使ってみたいと思った。

「幸いウィザードの才能はあった。ウィザードならレベルが上がれば転職して、上級魔法がとれるようになる。そうすれば紅魔族にだって負けないアークウィザードになれる」
「……」
「俺は、ゆんゆんに負けないくらい、凄いアークウィザードになりたい」
「それでパーティーメンバーをやっているというのなら、私の思った通り、あなたは悪い男ですね」
　はぁ、とため息をついて、めぐみんは浮いた腰を落とした。
「ですが……あなたがゆんゆんにとって本当に悪い人かと言われれば、違うのでしょう。この私より先にパーティーを組んだのは気に食わないですが。あのひとりぼっちだったゆんゆんが、カズマやアクア、新しくできた友達と一緒に過ごして、全員で冒険しているのですから」
「めぐみん……」
　張り詰めた空気がフッと解かれ、ゆんゆんも感極まったように名前を呼び、そしてほっと息を零した。
「分かりました、今はあなたの言葉を信じることにしましょう……少なくともいまは、私の〝友達〟は傷ついていないようですし。確かに紅魔族の魔法に追いつこうと思ったら、そうでもしなければ難しいでしょうしね」
「……俺はゆんゆんにとって悪い男なのは間違ってないし、言うとおり間違いなくクズだ。だから、アークウィザードになったら、必ず凄い魔法使いになって、ゆんゆんと冒険することを約束する」
「はい。しかし、傷つけたときは容赦はしませんから。我が史上最強の爆裂魔法の破壊力を、その身をもって知ることになりますからね？」
「は、はい」
　恐ろしいほど低トーンで脅しをかけられ、背筋を真っ直ぐに伸ばしながら、俺はそう返事することしかできなかった。
「では、この話はここで終わりにしましょう。どうやって出会ったの

とか、なんでアクシズ教団に入ることになったのかとか疑問は尽きませんが……ゆんゆんにも迷いはないようですし、ここは我が〝ライバル〟を信じることにします。カズマもアクアも、私が出会う前からあなたを信用しているみたいですし……ぶっちゃけ私も、口で言うほど疑っていたわけでもありませんし」
「あ、あれっ？　めぐみん、さっきは〝友達〟って言ってくれたよね……？」
「何のことでしょう。　……あっ。そういえば、まだあなたには名乗りを上げていませんでしたね。ちょうどいい機会です。まずはあなたの名前を聞かせてはもらえませんか？」
　そう聞かれ、雰囲気の変わりように一瞬だけ飛んでいた意識を取り戻した俺は、慌てて答えた。
「お、おう。俺は伊藤翔太。みんなからはショウって呼ばれている」
「分かりました、ショウですね。それではショウ。和睦の証に、あなたにも我が名乗りを聞いていただきましょうか」
「ああ。ぜひ、聞かせてくれ」
　いつの間にか左目には十字の装飾の施された眼帯をつけて、腕をばさりと広げて。
　狭い馬車の中にもかかわらず、めぐみんは無理矢理に立ち上がり、ローブを翻しながら格好良く言い放った。
「我が名はめぐみん!!　アークウィザードにして、最強の攻撃魔法〝爆裂魔法〟を操る者！　未来の紅魔族の長ゆんゆんの最大のライバルにして、いずれ魔王を倒す者!!」

第七話

俺達はアクセルを出て、温泉の町ベレスへ向かってる。ベレスに到着した後は、街にあるテレポートサービスを使って水の都アルカンレティアに向かう予定だ。

馬車を引き連れたベレス行きの商隊は夜間に動くことができない。なぜなら、見通しのきかない夜に下手に移動してモンスターに襲われたらなす術もないし、まともに移動することすらできない。夜になれば、凶暴なモンスターも多く出没する。

「さあ、とくとご覧なさい。この何もない箱をチョロッとひっくりかえして……ハイっ!!」

「うおおおっ!? さっきまで何も入っていなかったのに、大量の鳩が飛び出してきたぞおぉっ!?」

「ど、どうなってるんだ。アクア様、も、もう一度、もう一度お願いします!!」

そんなわけで俺たちは停車した馬車をよそに、焚き火のもとでわいわいと夜食を楽しんでいた。

向こうは、アクアのおかげで大盛況のようだ。こんな真夜中だというのに、箱から飛び出したずんぐりした鳥が、地面のパンくずをつついているのは、まあ奇妙な光景である。

「そういえば、カズマ達はクエストを受けたって言ってたよな。どんなのを受けたんだ?」

「ああ、このあたりに出現するゾンビメーカーの討伐だよ。うちにはアークプリーストがいるからさ、駆け出しの俺たちでも受けやすいクエストだと思ってさ」

「このあたりで命を落とされる商人の方も少なくありませんからな。わたしのようなしがない商人にとって、冒険者と一緒の移動は心強いものです」

ふっくら太った、人のよさそうな商人のおっさんが首を縦に振った。

カズマはいえいえ、そんな。と否定する。

「俺たちなんてただの駆け出しですよ。そこのおさげのアークウィザードを頼りにしてやってください」
「へっ、わたしですか?!　そ、そんな。私なんて……とても」
「ほう。その瞳、紅魔族の方ですか!!　それは心強い。紅魔族の方はいくつもの強力な魔法を操ると聞きます。ぜひ今後も懇意にさせて頂きたいものですな！」
「そそ、そんな、あ、ありがと……ございます……っ」
　じろりと、めぐみんはカズマに対して目を細める。ダクネスも物欲しそうな表情だ。
「ちょっとカズマ。私もれっきとした紅魔族です。パーティーメンバーである私の紹介はどうしたんですか」
「お前は爆裂魔法一発ぶっぱなして、ぶっ倒れてるうちにゾンビに捕まるのがオチだろう。むしろ爆発の明かりと音で、余計なモンスターを呼びかねないだろうが」
「わ、わ、私は？　私もクルセイダーだ。盾として仲間を存分に守ることができるぞ？」
「そういうことは攻撃が当たるようになってから言え。でもま、今回はゆんゆん達や、他の冒険者もいることだし本当に出番はないだろうな。全部終わったあとに討伐クエストを進めよう」
　ぼんやり、紅魔族随一の甲高い抗議を聞き流しながら、ごろんと寝ころんだ。
　……はやくアークウイザードになりたいなあ。
　空は日本にいた頃よりもずっと透き通っている。綺麗に見えるよう作られているはずのプラネタリウムよりもずっと美麗な、満天の星だ。あのどこか一つに地球があるのだろうか……そんなはずないか。異世界、だもんな
　冒険者カードを眺めた。スキルポイントは、とっくに上級魔法をとれるほどに溜まっている。足りないのはステータス。レベルを二桁まであげても届かず、まだまだ頑張る必要があるということだった。もっとも、頑張るのは、隣でニコニコしてるゆんゆんだが……褒められて顔が緩みっぱなしだ。

「生まれて初めてこんなに一杯、いろんな人とお話しできて、疲れちゃったな。えへへ……」
「うん。なあ、まだしばらく眠れないし、トランプでもするか？」
「えっいいの？　何する？　ババ抜き。ポーカー。ブラックジャック。ど、どれにしよう。本当に旅の途中で楽しくトランプができるなんて思ってなくて……ね、寝てないよねわたし。ちゃんと起きてるよね」
「おーい、カズマ。お前たちもやらないか？」
「へぅっ!?」
　カズマのパーティーに呼びかけると三人ともやってきて、ゆんゆんの緊張度が上がった。
「へー、トランプか。この世界にもあるんだな。いいぞ。こんな大勢とトランプするのもしばらくぶりだなぁ」
「なんでそんなものを持ってきているのですか。いつものように一人で遊ぶために……」
「ち、違うもん!!　今回はちゃんとみんなで遊ぶために、ちゃんと傷のついてない新しいの買ってきたんだから！　ほら、これ未開封のテープもついてるでしょ!!」
「……〝今回は〟？」
　何か不穏な雰囲気をゆんゆんから感じ取ったのだろう。全員が目を逸らす。
　体を伸ばして奪い取っためぐみんが「ふんっ！」と、乱暴にテープを切って、ああっ!?　とショックを受けるゆんゆんに束を手渡した。
　結局、途中から興味を持ったアクアも加わり、夜がふけるまで、俺たちのトランプ大会が続いた。
　ちなみに、ほとんどの試合が幸運値の高いカズマと、エキスパートであるゆんゆんの頂上決戦となり、なぜかアクアが巻き添えで真っ先にボコボコにされて「なんでよぉーっ!?」と、泣いていた。
　あとで教えてもらったのだが、アクアの幸運値は一桁らしい。
　……女神なのに。

やがて焚き火は細々と煙を天に昇らせ、集団のほとんどが寝静まったころ。
ゴソゴソと誰かが起き上がった音がした。
「カズマ。何が起きた？」
「ダクネスか。みんなを起こしてくれ。何か妙な物音が……それに敵感知スキルが反応してる。何か見えるか？」
「いや、こう暗くては何も。モンスターか」
「ちょっと自信ないけどな。アクア、アクア。起きてくれ……起きないと、顔に油性マジックでヒゲ書くぞー」
話し声で、目が徐々に覚めてくる。体を起こしたが真っ暗で全く何も見えない。
「あの、どうかしましたか。カズマ」
「モンスターが出たかもしれない。みんなを起こしたほうが……」
「おい、敵襲だっ！　近くにいる、全員起きろ!!」
そこまで言いかけたところで、護衛の冒険者の一人が緊迫した声をあげた。
のそりと起き上がると、確かに何か奇妙な音が聞こえた。こう、なんか……ぺた、じゃりという。まるで砂利の上を裸足で歩いているような。そこら中から。
「カズマ、これを！」
「サンキューダクネス。〝ティンダー〟!!」
ボウッ、と指から飛び出した炎の明かりが、油を浸した松明に移った。
他の冒険者も同じタイミングで松明を持った。辺りが見えるように掲げると、目がくらんだあと、取りかこむようにノロノロ近づいてくる人影が。
「あ、アンデッドの群れだぁっ!?　全員、戦闘準備にかかれぇーっ!!」
「寝ているやつを叩き起こせ！　客もだ。くそっ、なんだこの数は！」
「こ、こんなに集まってきやがるなんて……異常だ！　モンスター寄せの魔道具とか持ってたりしねえよな!?」

「そんな馬鹿な。昼はモンスターを見かけすらしなかったんだぞ!?」
熟練の冒険者も次々に馬車から飛び出し、あるいは包まっていた布団を放り捨てる。
取りかこむアンデッドは十や二十どころか……百はいるんじゃないか。ぐうすか寝ていた、ゆんゆんも、さすがに騒ぎに気付いたのだろう。緩んだ口元を晒し、いつのまにか目を擦っていた。
「むにゃぁ……めぐみん……お弁当全部持ってかないで……」
「なに変な寝言言ってるんですか!! 敵です。アンデッドの群れが近づいてきてますよ!!」
「えっ。ど、どこどこ? ひぃっ。な、なにこの数っ!!」
ゆんゆんが怯えている間にも、護衛の冒険者たちは雄叫びを上げて突っ込んでいく。
「おい、この数はやばい。そっちのパーティーも応戦してくれ。俺はアクアを起こしてくる!」
「わ、わかった。じゃあ頼んだゆんゆん!!」
「うん!! いくわよアンデッド、〝ライト・オブ・セイバー〟!!」
全てを任されたゆんゆんが放った上級魔法は、夜闇を照らし、数匹のアンデッドを一気に横に薙ぎはらう。
光属性に弱いアンデッドたちは、光の粒子となって消滅する。だが、どこからか新たなアンデッドが出現し、薙ぎはらった空間もやがてゾンビで埋め尽くされてしまう。
「任せておけ、〝デコイ〟っ!! さあアンデッドども。好みではないのだが、死してなお絶えぬ貴様らの欲望、この聖騎士が受け止めてくれる! んっ……来い!!」
「す、凄い。上級魔法をあんな自在に……それに、あのクルセイダーの方、背中に仲間を守りながら、まとめてアンデッドを引きつけているぞ……!!」
「さ、下がってください。あなたがたはいまはお客様なのですよ! ここは護衛の冒険者に任せて……」
「いえ。見るからに手に負えない大群のアンデッド、放っておけません! この私がまとめて究極の魔法で消し去って……」

「おい馬鹿やめろ!!　さっきも言ったが、こんな平地で爆裂魔法を使ったら、光と音でさらにモンスターを呼び寄せちまうだろうが!!
おい、アクア!!　手遅れになる前に起きてくれ!!」
　カズマが揺り起こす。ひどい寝相で、よだれをたらしながら寝言を言う女神様。
「ゆんゆん、次はあっちだ。カズマ、そっちは大丈夫か!?」
「ああ!　くそっ、ダクネスはそのまま敵を引きつけてくれ!　めぐみんは……いざという時のために詠唱の用意ッ!　誰かがピンチにならない限り打つなよ!」
「わ、わかりました!!」
「アクア、さっさと起きろ!　非常事態だ!　起きなきゃエリス教徒のプリーストと取り替えるぞ!」
　ゆんゆんに見せないよう、苦戦していそうな場所を探しつつ誘導する。すると、とうとう女神様も目を覚ましたらしい。
「……かずまさぁん、何。もうお弁当いらないってぇ、お腹いっぱいだってばぁ」
「馬鹿寝ぼけんな!!　アンデッドだよ、アンデッド。アホみたいな数のゾンビメーカーまでいやがる!!」
「何ですって、アンデッド!?　アークプリーストであるこの私の出番ってわけね、任せなさい!!」
　とうとう飛び起きたアクアは、意気揚々に飛び起きて、目を輝かせた。
「さあよくもぬけぬけとこの聖なる女神様の前に姿を現したわね。まとめてあるべき場所に還りなさいっ、〝サンクチュアリ〟!!」
　どこからか飛んできた薔薇の杖を一振りすると、純白の魔法陣が広がった。湖に投げた石が波紋を作るように。
　アークプリーストの、女神の聖気に当てられたアンデッドは見る間に崩れて、砂と化してゆく。冒険者と剣を交えたアンデッドも、後方のゾンビメーカーも、天に還っていった。
　唖然とした冒険者たちは、おおおおっ、と歓声を上げる。
「な、なんて素晴らしい魔法だ。あれだけの数のアンデッドをたった

一瞬で……」
「あれは先ほど素晴らしい演武を披露してくださったプリースト様ではありませんか」
「なんということ。まるで女神の生まれ変わりを見ているようだ……！」
　周囲からゾンビの気配は完全に消え去った。
　一瞬にして討伐を終えたアクアのもとに、ゾロゾロと、冒険者や商人がほめ称えながら近づいている。
「え、何？　もしかして私褒められちゃってる？　褒められちゃってます!?　ふふんっ、みましたかカズマさん。これがわたしの実力！　女神の本当の実力よ!!」
「すっすごいですよアクア！　なんですか今の魔法は。あれだけ巨大な魔法陣、爆裂魔法以外でお目にかかったのは初めてです!!」
「ああ。あのような凄まじい魔法、一体どこで習ったのだ？」
「ふふんそうでしょう、そうでしょう。うへへ。ねえ、カズマももっと私のことを褒めて、敬っていいのよ？」
「なるほど。普段は呑んだくれの駄女神だが、腐っても女神ってわけだな」
「ちょっと!!　腐ってるのはアンデッドのほうなんですけど!?　大活躍だったんですけど!!」
「すまんすまん。たまにはやるじゃないか、見直したよ。アクア様」
　カズマの一言でコロッと機嫌を直したアクアは、ふふんと胸を張って賛辞を受け入れる。
　そんなお祭り騒ぎを遠目に見ていると、ゆんゆんが。
「ねえ、ねえっ!?　わたしもっ、わたしも活躍したよねっ!?」
「ああ、うん。もちろん大活躍だった！　やっぱ凄いなゆんゆん！　あれだけのゾンビを……ゾンビを、何匹も……」
　少し離れた所でぽつんと、寂しそうに誰の賛辞も受けられなかったゆんゆんも、ゾンビ二桁を狩るという一騎当千の大戦果である。アクアの凄まじい大活躍のおかげで隠れてしまった感があるが、ほんとにすごい……すごい。

そ、それに比べて俺は……やったことといえば、松明をかかげて見やすくする役目と、ゾンビの多い場所を探したくらい。昼に馬車でめぐみんに格好いいことを言ってしまったが、いつまで俺はゆんゆんを騙す悪い人をやらなければならないのだろう。罪悪感でとうとう明確に痛み始めた心臓を抑える。

ゆんゆんは、もじもじと、アクアが受けている賛辞を見ながら、指を擦り合わせて。

「えっとね、できればでいいんだけど。その、褒めて……ほしいな」

「う、うん……ゆんゆんは凄い。凄いなぁ……ははは……」

このときの、目の前で嬉しそうに微笑んでいるゆんゆんは、今日のＭＶＰのアクアよりもよほど眩く輝いてた。アンデッドのような死んだ気分の俺はとても直視できず、とっくの昔に消えて炭と化した薪を、自嘲混じりに凝視し続けることしかできなかった。

第八話

「見てショウくん！　すごいよっ街中の至るところから湯気が吹き出してる!!」
　馬車の外に身を乗り出したゆんゆんの言葉で、俺たち、そして前を行くのカズマの馬車もみんな顔をひょいと出した。
　これは、壮観だ。
　山岳のふもとに建てられた街のいたるところから、ゆんゆんのいう通り湯気があがってる。
　旅日和の快晴の中、街の入り口から商隊が連なり、やがて足を踏み入れた。
「これが温泉の街ですか、観光地として有名と言われるだけのことはありますね。今日は一番高い宿に泊まりましょう」
「めぐみん、あなたも駆け出しの冒険者でしょ。そんなにお金持ってるの？」
「……そういえば杖を新調したのでした。あまり無駄遣いはできませんね……ときに、ゆんゆんはどのような予定を立てているのですか？」
「うーん、テレポートサービスですぐ次の街に行っちゃうのは勿体ないよね。ショウくん、どう思う？」
「せめて、温泉に浸かってから次の街に行きたいよな。でもゆっくりした後にアルカンレティアに行ったら夜になるし、問題は宿が取れるかどうか……」
「今は時期を外しているから、きっと大丈夫だと思うよ」
「じゃあ、決まりです!!　……ところでゆんゆん。私たち、友達ですよね？」
「めぐみん。目がエリス金貨になってるけど、そんなに高いところには泊まらないからな？」
　広場にとまった馬車から降りて、カズマに合流すると商隊のリーダーの人が名残惜しそうにアクアにからんでいた。アンデッドを一気に浄化したのが効いているらしい。よほど嬉しかったのか、アクア

は馬車が次の街に移動していくのを「またねー!!」と熱心に一番最後まで見送った。
「さて、もう昼過ぎだな。ふむ、ここが温泉の町ベレスか……」
「そっちのパーティーとしてはどうだ。今回の旅のオーナーに従うが……まあ俺としては？　ここでゆっくりと肩まで浸かっていきたいところだが、日本人としてはさ」
「泊まっていくらしいですよ。というわけでカズマ、こちらもゆっくり泊まっていきましょう！　まだ、日頃の疲れをとる、というほど冒険しているわけでもありませんが……」
「せっかくだしな。それじゃあ宿を探して、そっから温泉巡りといくか！　いいのか？」
「うんっ！　えへへ、みんなで温泉なんて……ぜったい楽しいんだろうなぁ」
　観光地というだけあって、街はとても綺麗に整備されていた。石の道は風情があるし、建物もアクセルのような赤煉瓦でなく、昔式の和風造りばかり。
　ちょっと歩くと、街の中心部を流れる川からもうもうと煙が立ち上っている。めぐみんがそれを見つけ、ダクネスを引っ張って真っ先に駆け出していった。
「ふおおおっ!!　すっ、すごいですよカズマ！　みてください!!」
「何だこれは!!　カズマ、きてみろカズマ、温泉が川のように流れているぞ!!!」
「ああ、これは源泉のお湯を冷ましているんだよ。ってか、どっかで見たことあるな……」
「日本にあった気が……」
　源泉が川の代わりに何本も並んだ木枠を伝って、湯気を立ち上らせながら滝を流れ落ちていく。
　日本を思い起こさせると思ったが、どうやらこの街にも過去に異世界転生者が来て、こうしたものを作り上げていたらしい。
　宿は割と適当に決め、荷物を放り込んでから浴衣姿で町に繰り出した。

「いやあ、いい天気だなカズマ。それにここは素晴らしくいい街だ、そうは思わないか？」
「思う思う」
「ショウくん……さっきから何だか視線を感じるような……あ、あれ。ショウくんもわたしを見てたの？　ゆ、浴衣どこか変かな」
「なんでもありません」
「チッ」
　ゆんゆんとダクネスの胸元に、たまに他の観光客が注目して、ゆんゆんは恥ずかしそうに俯いた。ダクネスはちょっと顔を赤くしてた。めぐみんが舌打ちして、カズマと俺はパーティーメンバーであるのをいいことにガン見した。
　目をキラキラさせて、先行したアクアが「みんなー！　ここ、ここよさそうじゃない?!」と呼びかけてきた。この街で支払う費用をぜんぶゆんゆんが持つと本人が言ってから、すごく張り切っている。
　入浴料を払って、それはもう広々とした日帰り温泉に、ゆったりと浸かった。
「はぁー……生き返るわ……」
「おい、見ろショウ」
「ん？　何だ。壁にくっついて……おい隣女湯」
「シッ！　いいか。ここの塀、ちょっと隙間があるぞ……どっちが先に覗く？」
「じゃんけんで決めよう」
「話がわかるな。いくぞ、じゃんけーん」
　タオル一枚巻いたカズマが、ドキドキしながら隙間に目をやった……植木と石で何にも見えないじゃないか!!　と、濡れたタオルを叩きつけてガッカリする。
　なんてことがあったり。
「さあめぐみん、今日はこれで勝負よ!!」
「〝タッキュウ〟？　ふむ。なるほど、ボールを打ち返すゲームですか。よいでしょう。なぜかこの場所では受けて立たなければならな

い気がします……今回は負けませんよ!!」
風呂上がりにめぐみんとゆんゆんが勝負を始めて、三人で眺めながら冷たい牛のミルクを呷る。
ゆんゆん、揺れるなあ。汗かいちゃってるけど、まあまた次の温泉入るか。
そして異世界に来てもミルクはうまい。コーヒー牛乳ならもっとよかったのだが。今度、コーヒーを探して作ってみたいものだと、意見の一致したカズマと真剣に話し合った。

「……お前、いないと思ったら。もしかしてずっと飲んだくれてたのか」
「仕方ないじゃない。だってここの温泉、浸かりながらお酒飲むの禁止だって言うんですもの。あっ、それより……見てよこれっ!! 滅多にお目にかかれない高級フキノジュウに金エビの天ぷら、しかも赤カニまで!! 天国なんかよりよっぽど天国ね! 私、天界よりこっちで暮らそうかしら」
「お前そんな高級料理バンバン頼みやがって。ゆんゆんに払わせるつもりじゃないだろうな?」
「そりゃあ今回は私がメインの旅ですもの。ゆんゆんにも聞いていって言われたし、もちろんこれも雑費として……」
「おいゆんゆん。出さなくていいからな。この駄女神を甘やかすんじゃないぞ。キッチリこいつに払わせるから」
「え、ちょ、ちょっとカズマさん? ねえまって。もう注文しないから! 今日の食事だけで報酬がなくなっちゃうからあぁぁっ!?」
なんて一幕もありながら、夜は部屋でゆんゆんの持ってきたトランプで大富豪。
「あれ。ダクネス、お前はやらないのか?」
「もうしばらく待ってくれ。鎧の手入れが終わったら参加するから」
「ふふふ、カズマ! 余所見しているうちにさっきの仕返しをさせてもらうわ!! 革命!! これで私の逆転勝利よ!」
「ほい革命返し。8切り、んであがり」

「ちょちょっと!?　何してくれちゃってるの?!　わ、わたしの手札がヒキニートのステータス並みの最弱手に……」
「おう上等だ。表に出ろ、お前の宿代を返却してもらって一人で野宿させてやる」
「あがり！　どうですかゆんゆん、私のほうが早かったですよ!!」
「ぐぬぬぅ……こっ今回はわたしの負けみたいね……も、もう一回よめぐみん!!」
　まるで修学旅行のような一日を過ごした俺たちは、かつてないほど平和に、この日を終えた。
　なぜかベレスは団体客用の宿ばかりだったのだが、男2と女4で部屋を分けられたのでちょうどよかった。「この辺りには団体客用のお宿しかありませんよ」との女将の言葉が不意によみがえり、強くひっかかった。
　だが、浴衣姿のゆんゆんが楽しそうにカードを握る姿を見て、気のせいだと思い直した。

「……平和だ」
　男部屋で、カズマがぽつりとそう呟いた。
「平和でいいじゃないか」
「い、いや。なんか平和すぎて……おっとダメだ、これ以上はフラグになってしまう。平和最高だなぁー！　なあショウ！」
「いつもは大変そうだもんな。噂は聞いてるぞ。いつもパーティーメンバーをカエルの粘液まみれにしてるって。カエル粘液ヌルヌルプレイがどうとか」
「誤解だ！　いや、事実ではあるけども!!　違うから!!」
　確かにジャイアントトードは、初心者パーティでは苦戦しそうだ。めぐみんは一匹退治したら終わりだし、アクアはアークプリーストで、ダクネスは攻撃が当たらないんだっけ。
　結局、カズマに頼るわけだからな。最弱職で攻撃力のステータスも

高いわけじゃないのに。
……そう考えると、こいつも結構苦労しているんだな。
「なあ、カズマ。お前異世界にきてよかったと思うか？」
「はぁ？　何だよ突然」
明かりを消した男組の部屋でぼんやりいったら、変な顔をされてしまった。
「いや、ほら。俺たちアクアに転生させてもらった仲だろ。でも、こういうのをゆっくり話す機会はなかったなと思って」
「それもそうか。なんて言うかなー、思っていた異世界生活とは違ったっていうか……」
「神器とかチートスキルを貰ったほうがよかったと思うか？」
「貰ってたら、いろいろ苦労はなかっただろうな。あれだ。馬小屋生活をすることもなかっただろうし、高難度のクエストを受けまくって、ガッポガッポ金が入ってきて、異世界ハーレムとか作ってた絶対」
「分かる」
カズマほど不満があるわけでもなかったが、神器やチートスキルを持っていけば、もっと別の異世界生活になったにちがいない。
襲われた馬車を助けて、乗っていたお姫様に好かれて王都に行っちゃったりして、王国騎士団に入っていたか。それとも魔王軍をバッタバッタなぎ倒して、美少女だらけのハーレムパーティとともに魔王城まで攻め込んでいたか。
「待てよ。カズマ、お前は今もハーレムパーティじゃないのか」
「バッカお前。あのメンツ見てハーレムパーティってまだ言うのかよ！　うちの変態クルセイダーけしかけんぞ！」
「まあまあ。色々問題はあっても、あんな可愛い女の子に、嫌われてないんだからいいだろ。ニートだった頃からすると、大進歩じゃないか」
「それは、まあ否定はしないけど……まあ。そういう意味じゃ、ほんの、爪の先ほどちょっとは、よかったと思ってなくはないのかも。っていうか、お前はどうなんだよ！」
「俺はアクアにゆんゆんと会うことを願ったけどさ。ちゃんと役に立

てる日がくるかなって、不安になってるよ。そうじゃなきゃ、異世界に来ないほうがよかったとも思うし」
「……なんかお前らどっちも重いな。もっと気楽に生きていいんじゃないか？」
　起き上がってみると、腕を頭に回して天井を眺めるカズマがいた。
「俺だって未だにジャイアント・トードの討伐は一人じゃできないしさ。今なにもできないからって、そんな深く考えんなって。お前だって、嫌な顔されてねーだろ」
「ま、まあ……」
「むしろお前に強くなられると、俺の心の拠り所がなくなるから、このままずっと魔法覚えないままでいてくれ」
「おい」
「あっ！　俺の枕返せ!!」
　仕返しにカズマの枕をひったくって、壁の隅っこに放り捨ててやった。「あっ、おいやめろ。投げんな!!」と取りにいく。いい気味だ。
「カズマは、いずれ魔王を倒しに行くのか？」
「はあ？　そんな気さらさらないね。レベルを上げて金を稼ぎまくれるようになったら、アクセルにでかい屋敷でも買って、のんびり第二の人生を浪費してやるさ」
「そ、そうなのか。もし冒険することになったら声かけてくれよって言おうと思ったんだけど……」
「いやいや。そんな危ない旅に出るより、俺は第二の人生を満喫するぞ。そういうのは、先にこっちに来た優秀な転生者様に任せればいいって。魔剣とかチートスキルとったやつがいるんだろ？」
「それがいいかもな」
　どうやら全くその気はなさそうである。そのために転生させられたんだけどな、俺たち……
　まあ別に魔王を倒さなかったからってバチは当たらないか。隣の部屋ですうすう寝ている、転生のときに魔王討伐を勧めてきた女神様や、魔王と戦う気満々のめぐみんが聞いたら何て言うかはわからないけど。

「ま、別に叶えて欲しい願いがあるわけでもないし。ってかもう叶ってる……あっ！　おい、返せ！　俺の枕返せ！」
「お前が先にやったんだろ!!　いいから、その手を離せ。窓から放り投げてやる！」
「旅館のだからやめなさい！　掃除の人が困っちゃうでしょ!!」
「ならよこせ！　今日は枕二つ使って寝てやるから!!」
「バカ騒ぎするな!!　宿の人に迷惑だぞ!!」
　隣から飛んできたダクネスに正座させられました。

　そして、ベレスでの朝がやってくる。
　ああ眠い。でも今日でアルカンレティアまで行って、ゆんゆんのクエストも達成だな……ん？
「……何か建物中が騒がしいな。何の騒ぎだ？」
「ああ。カズマとショウか、おはよう。なんでもここの温泉がただのお湯になってしまっていたらしくてな。従業員が朝の掃除にいって気づいたらしく、原因がわかるまで少しの間使えなくなるそうだ」
「へえ、なんか大変だな。昨日のうちに入っておいてよかったな……カズマ？」
　魔法使いの仕業だろう。妙なイタズラをするやつもいるもんだ、と思っているとカズマの顔色がどうにも悪い。
　何か引っかかった、心当たりでもあるのだろうか。
「さあ今日も張り切っていこう。さっさとクエストを達成して、アクセルに戻ろうぜ！　……おいダクネス、アクアはどこにいる？」
「アクアか？　いま部屋に戻って二度寝の真っ最中だが……あっ、おい！　まだめぐみんとゆんゆんも寝ているのだ。入るな!!」
「何？　騒がしいわね。どうしたのよそんなに慌てて」
　襖をあけて出てきたアクアは、まだ髪も結っていない状態で。肩をがっつり掴んだカズマは小声で何事かをひそひそと話すと、顔を青くした。震え始めたアクアを背後に、ぎこちない笑顔で俺たちに言った。

「さあー、今日は忙しいぞー。早くテレポートサービスを使わないと混むからなぁー!! 朝飯はアルカンレティアで食べようぜ!」
「いや、それほど急がなくてもテレポートは一瞬だから問題ないぞ。混むような時期でもない。それにまだ朝早いのだからもう少しゆっくり……」
「い、い、か、ら!! 早くめぐみんとゆんゆんを起こしてくれ。アクア、分かってるな?」
「はいっ!! め、めぐみーん! ゆんゆんー!! お、起きて、起きなさいってばぁ!!」
慌しくなった部屋で、何が起こったのか何となく察した。
だが、俺たちのパーティーには関係のない話だったので、知らないふりをすることにした。
そうして顔を逸らしていると、窓の外がざわついているのが聞こえる。
何となく耳を澄ますことにした。
「なあ、昨日のすごかったな。街中が騒ぎになってるみたいだが、地震だったのか?」
「いや、何でも城壁の外にすげぇー大穴が空いていたらしい。何にもない平地だったから、自爆系スキルを持ったモンスターの仕業ってもっぱらの噂だぞ」
「俺見てきたけど、何かが爆発したみたいだったな。いまこの街の警備団が調査に乗り出しているところらしい」
「あんなの爆裂魔法でもなければできないって、警備団長も首を捻ってたぜ。あんな何もないところで、どうして爆発が起きたんだろうな」
「魔王軍が攻めてきたんなら、せめて城壁に打つはずだしなぁ。やれやれ、何が起きたのやら」
そっと窓を閉じてカズマを見ると、汗がダラダラと滝のように流れ落ちていた。
その後ろで、同じように汗ダラダラのアクアが浴衣のめぐみんを引っ張り起こそうとしていた。

まずはハーレムパーティーで羨ましいなどと言ったことを謝ろうと思った。

第九話

「着いたわよカズマ。ここがアクシズ教の総本山。私の可愛らしい子たちのいる、水の都アルカンレティアっ!!」

テレポートサービスを通り抜けた俺たちがが真っ先に聞いたのが、女神様のそれはそれは嬉しそうな声色だった。

まず四肢を確認する……よかった、何ともない。隣で一緒にテレポートしてきたゆんゆんは、さすがアークウィザード集団の紅魔族出身。こういった魔法に慣れているのか、不安げにする俺を安心させるような微笑みを浮かべていた。ああっ、本当にゆんゆんはやさしいなあ。

ダクネスとめぐみんはともかく、カズマは喜びまくっているアクアを胡散臭そうに見つめてた。

そう。

今俺たちは、とうとう、ゆんゆんが入信しようといている、悪名高いと、冒険者の多くが口を揃えるアクシズ教団に出会おうとしているのだ。

覚悟を決めろ。

そして握りっぱなしだったゆんゆんの手を離したところで、前のカズマたちに周りにいた青い衣の人達が、わっと群がった。

「旅人よ。アルカンレティアへようこそ!!」

「おお、なんて美しく輝かしい青い髪でしょう!! まるで女神アクア様のような羽衣! 羨ましいです!!」

「そちらの方は観光ですか。それとも入信ですかな? 観光ならぜひともアクア様のご加護を受けた美しい景色を堪能していくとよいでしょう。入信でしたら、今から私達が全力でご案内いたしますぞ!!」

カズマのパーティー、もといアクアがそれはもう真っ先に取り囲まれた。

あれがアクシズ教徒か。アクシズ教の紋章を掲げる十人ほどの信者に取り囲まれて、ちやほやされるアクア様は、それはもう得意げに胸を張った。カズマがぽんぽんと、背中を叩いた。

「お、おい、アクア。分かってるな？」
「わかってるわよ……あなたたちはアクシズ教徒ね。入信はいいわ。なぜって？　何を隠そう、この私こそがーー」
「あーーー!!!　こ、このアークプリーストはアクシズ教徒です!!　大丈夫ですから!!」
「何と、そうだったのですか!!」
「聖地巡礼というわけね。なんて素晴らしい心掛けでしょう!!」
「同士よ。あなた方にとって今日この日が、良き日であるよう祈っていますぞ！」
　水の女神様は不満そうだったが、直後に耳をひっつかまれた後カズマに言い聞かされ、やがて納得したらしい。こんなところで水の女神を名乗ったら大変な騒ぎになるだろ！　とでも言われたのだろう。そりゃそうだ。
　そんな風に悠長に見ていると、アクシズ教の集団は次にこちらをギラリと見た。
　……嫌な予感しかしない。
　ゾロゾロ。一糸乱れぬ動きで近づいてくる。
　えっ怖い。なにこの人たち!?　彼らは、先ほどと一言一句違わぬセリフで迫ってきた。
「おお旅人よ！　ようこそ水の都アルカンレティアへ!!」
「そちらのお二方は観光ですか。それとも入信ですかな？　入信なら……」
「えっと、待ってくれ！　ゆんゆん。ちょっとペンダントを見せてくれないか」
「へっ？　うん、いいけど。はい」
　たわわな胸元にずっとつけているペンダントを取り出すと、アクシズ教徒の人たちは「おおっ!?」とみんな目をきらきらさせた。「へっ、へっ？」と戸惑うゆんゆんの手を、プリーストっぽい格好をした女性が両手を握る。
　ゆんゆんは何度か自分の手を、相手の顔を確かめ、信じられないものを見るような顔をした。誰かにいきなり手を握られた経験なんて

生まれて初めて、という顔だ。
「おお、あなたもアクシズ教を信仰される同士でしたか!!　素晴らしい！　あちらの方といい、聖地を巡る敬虔な信者に、アクア様も喜ばれていることでしょう！　今日はとても素晴らしい日となりそうですな！」
「え、えっと？　あ、あの。まだわたしアクシズ教というわけではないんですけど……」
「何と、そうでしたか。ということは洗礼ですな!!　私どもが教会の管理をしておられるプリーストの元まで案内いたしましょう!!」
「へっ!?　あ、う、えっと、そ、その、あの……っ」
「あ、いえ！　あのアクシズ教のアークプリーストの人にお願いしているので大丈夫です。少し彼女と観光してから、教会に向かおうと思いますから！」
「なるほどなるほど!!　それはよいですな。ここにはアクア様のご加護を受けたパワースポットがいくつもありますゆえ。街総出であなた方のことを歓迎いたしますぞ！」
「教会で洗礼を行うなら、ゼスタ様に頼むのが一番なんだけどねぇ……今は出かけてるんだっけ？」
「そう聞いてるぜ。しかもつい昨日この街を出られたばっかりだというのに。戻られるのは一体いつになるやら……」
「大丈夫です。あちらのプリーストの人に頼むことになっているので。うおっ!?」
　ずいと迫り寄ってくる信者達。輝く瞳を、より一層輝かせた。怖い怖い怖い。
「あちらの美しいプリーストの方のお知り合いでしたか！　なるほど。ならまずは教会に向かわれるといい。アクシズ教団の教会を管理しているプリーストが、ともに洗礼の立会いをしてくれるでしょう」
「それでは……コホン」
『ようこそ、水の都アルカンレティアへ!!』
　と、綺麗に挨拶をして。

アクシズ教の人たちは「よし、次だ次」と、また後ろのテレポートしてきた人たちに、流れるように話しかけにいった。
なんか……ここやばい。
ゆんゆんがアクシズ教に入るんじゃなかったら、どうなってたんだ？　集団で囲んでグイグイ来られるの結構怖かったんだが。そう思っていると、後ろではまた同じような歓迎の言葉が聞こえた。不幸にも、今度はアクシズ教徒のメンバーはいなかったらしい。あの暑苦しい集団が総出で入信を迫りはじめた。「あなたの為、あなたの為なんですぅぅ!!」と、すごい勢いで。
わかった。
もしかしなくても、これ関わっちゃいけない類の宗教だわ。
入信はやめ……
いや……でも俺とゆんゆんは、少なくとも、アクアに恩があるから。入信を止めさせようという考えをひとまず振り払った。肝心のゆんゆんはどう思っているだろう……うわっ、めっちゃ幸せそうな顔。
「街に入って、こんなに歓迎されちゃうなんて……こんなにいろんな人から祝われたの、いつぶりだろ。えへへぇ……」
「ゆんゆん……恍惚とするのはいいけど、今の別に祝われたわけじゃないからな。洗礼、すぐに行くのか？」
「えっ。あ、えっとね！　まだ朝起きたばかりだから……まずはこの街を見て回りたいなって思うんだけど……朝ごはんもまだだよね。だから、まずは街をゆっくり回らない？」
「そういえばそうだ。おーい、カズ……むぐっ！」
何やらアクアと談義している向こうのパーティーに呼びかけようとしたところで、ゆんゆんがぐっと手をあてがって口を塞いでくる。
「ま、待って！　あのね……昼までは二人でいたいっていうの、だめかな……」
ごくり、と思わず唾を飲んだ。
な、なんだこの雰囲気。さっきまでアクシズ教団にドン引きしてたのに、突然恋愛ルートに入ったのか。

押しに負けた俺は、「えっ……ああ、うん。ゆんゆんがそう言うなら」とゴニョゴニョ言ってから、動揺を隠すように声をあげる。
「カズマー!! 昼まで自由行動で、その後で教会に行く感じでいいか？」
向こうから「分かったー！」と返事が返ってくる。今日はまだ朝早い。向こうのパーティもこの街で軽く観光したり、色々とやりたいことはあるだろう。そして彼らは一刻も早く、背後のベレスからの出口となっているテレポートの魔法陣から離れたがっているようだった。
行ってしまったカズマの四人パーティーを見送ったら、あとは二人きり。
「ごめんね、ワガママ言って。その、まずは朝ごはん、一緒に食べに……いきたいな」
「お、おう。じゃあ俺たちも行こうか」
袖をぎゅっと握ってくるゆんゆんの存在を、かつてないほど強く感じた。
上目遣いな、かわいいパーティーメンバーな紅魔族の少女に、かつてない胸の高鳴りを感じながら、テレポートサービスセンターから一緒に出た。

水の都アルカンレティアは、それは綺麗な街であった。町中のいたるところに水路が張り巡らされ、そこを流れる王都よりも美しく透き通った水は、守護神でもある水の女神アクアの加護をうけているとされる。
「こんな風に一緒に歩くの、わくわくするね！」
川には小さなカエルや魚が泳いでいて、お祭りの時期には水源から灯籠を流したりもするそうだ。どこからか、小鳥たちの楽しげな祭囃子が聞こえてくる。確かに、のどかな異世界風景は新鮮で楽しい。
ゆんゆんは、楽しそうにそこらじゅうの青一面の景色を見まわしては、鼻歌を歌った。

「どこで朝ごはんにする？　名物は、お昼にとっておくとして……」
「それなんだけど……ごめんね。あんな誘い方したけど、実はそんなにお腹が減ってるわけじゃないんだ」
「んっ？」
「まだ言ってなかったなって……アクシズ教に入るまえに、ちゃんと言っておかなきゃなって思って……聞いてっ！」
たたたっと、ゆんゆんが前に出るとスカートがふわりと翻った。
感情が高ぶったときに紅魔族の目は赤く輝くのですよ。と、昨晩めぐみんが教えてくれたのをふと思い出した。
まさしく、ゆんゆんの今がそうだった。
「わたしのところに来てくれて、ありがとう。ショウくん」
ぐわっと、全身が熱を帯びた。
あ、たぶん顔真っ赤になってる。
耳まで熱い。
あんなに目を固くつむって、頑張って言ってくれたことは痛いほど伝わった。え、えっと。なんて返せばいいんだ。あ、頭が回らない……!?
「あ、ち、ちがうんだよ！　その、アクア様にはちゃんとお礼はいったけど、ショウくんにはちゃんと言ってなかったなって思って」
「そんな。まだアークウィザードにもなってないのに……!!」
「ううん、そんなの全然いいよっ！　パーティーメンバーとしては、めぐみんの言う通りダメかもしれないけど……友達としては、それ以上のものを、いっぱい、いっぱいもらったから！」
「そんな大げさな。ゆんゆんは、その、いい子だから。どこに行っても友達できるだろ？」
「……」
「ゆ、ゆんゆん……？」
「……ショウくんには打ちあけるね。実はわたし。紅魔の里では、族長の娘なのに、あまり馴染めてなかったの」
切なげに地面を見つめたゆんゆん。いつの間にか輝きはなくなって、遠い場所を見つめているよう。

「わたし、最初に会った時に……名乗りを上げたよね。でもそれが、どうしても恥ずかしくって。それだけじゃないの。みんながやってることが、どうしても恥ずかしくって、できなくて」
「ああ……あ、あのかっこいい挨拶か。めぐみんはすごい堂々とやってたけど、そんな深刻な顔して気にしなくてもいいと思うけどな。できることと、できないことがあるんだから」
「ううん。わたし変な子なの……自分の名前も恥ずかしくて……それで紅魔の里にも居場所がなかったの。だから誰とも話せなくって。でもアクセルの街にきてからも、パーティーメンバーどころかお友達もできなくって」
あの腕をビシッと伸ばす名乗り、可愛いと思うけどな。
……そんなことが平然と言える勇気と甲斐性があったら、前の世界で彼女の一人はいただろうな。出会いがそもそもなかったわけだけど。あと、〝ゆんゆん〟が本名と言われたら確かにびっくりするだろうな。
「でもね。アクア様とショウくんのおかげで、生まれて初めてパーティーメンバーができたの！　あんなにたくさんの人と話せて。すっ、すごく嬉しかったの!!」
「ゆんゆんはアクアに何をお願いしたんだ？」
「ええと……正直に言うとね、アクア様にお願いしたつもりはなかったの。ショウくんを見つける直前まで『誰でもいいです。パーティーメンバーや友達なんて贅沢は言いませんから、話し相手が欲しいです』ってお願いして……えっ。ショウくん、どうしてここで顔をそらすの？」
「ちょっと涙が出そうになっただけだから、気にしないで……」
「え、えっ。一度はみんなお願いしたことあるよね？　わたし紅魔の里にいたときからずっとお願いしてたもん。ショウくんもしたことあるよね？」
まさか「ないです」と言うわけにもいかず「お、おう」と返事を濁すと、ほっとしたようだ。
ごめん……嘘ついた……

「じゃあ、次はそっちの番。ショウくんやカズマさんはアクア様に祝福を受けたんだよね。ショウくんは、何をお願いしたの？」
そういえば、前にそんな話をしたことがあったな。
無難な答えを出そうとした。でも、言う寸前にゆんゆんの不安げな眼差しと、目が合った。
……
こうして聞いてくるってことは、そういう耳障りがいいだけの言葉が聞きたいんじゃないんだろう。
「実は、ゆんゆんと同じような境遇だったのかも」
「えっ？　わたし？」
「学校に行っても誰とも話さない。行かなくなったときもあったし……ええと、ソードマスターみたいな強い人たちの喧嘩に巻き込まれたこともあったな。筋力とかは平均の低ステータスなのにな、俺」
「そうだったんだ……」
ゆんゆんがすごい驚いたような顔をして、とても悲しそうな顔をする。
あっ……
ソードマスターってこの世界でまだ見た事ないけど上級職だ。例えが悪かった。ひどく同情するような視線が刺さる。いまゆんゆんの頭の中で俺は、ドラゴンのケンカに巻き込まれてるようなイメージを浮かべているんだろうか。
……ま、まあいいや。実際そんな感じだったし。
「そんで色々あって気づいたら変な場所で目の前にアクアがいて。魔王を倒すための願いを一つ叶えてくれるっていうから、女の子と冒険したいって言った」
「ええっ!?　アクア様にそんなことお願いしたのっ!?　そ、それに、気づいたら女神様に会ってたって……わ、わたしたちが女神様に会えるのって……」
「〝そんなこと〟でいいんだよ。スキルや魔剣もらうより、最高だと思ってる。アクシズ教に入るかは、まあ、さすがに普段のアクア見てたらちょっと考えるとこだけど」

「……そうだったんだ……び、びっくりしたな。でも、ちゃんと聞けてよかった……うんっ！」
不意に、息をするみたいに自然に立ち止まった。
「しょ、ショウくん。もし、わたしよりずっと強くて、魔法を教えるのも上手なアークウィザードの人が来ても……わたしと友達でいてくれる？」
「ゆんゆんに嫌がられない限り一緒にいたい。パーティーメンバーは……あの、嫌じゃなければこのままでいたいのですが」
「嫌なわけないっ！　アークウィザードになって、一緒に戦えるまで頑張ろうね。
だ、だって、わたしたち〝友達〟だもんね!!」
照れながら、ゆんゆんが俺に向けてそう言ったとき。
嬉しい感情が湧き出してくるわけではなく、何か致命的な失敗を犯したと思ってしまったのは、何故だろう。
なぜか胸のあたりがじんじん痛い。
悪感情の理由がわからないまま、辛うじて「そうだな」としか言えない。しかし、そのときゆんゆんは全く別方向を見てた。
「……あれ？　このあたり、水が流れてないんだね」
気づいたように指をさした水路は、象徴ともいえる水が全く流れていなかった。
二人でギリギリまで近づいてみると、確かに空っぽだ。水草が完全に干上がって、小さな道路みたいになってる。するとどこから来たのか、街の人が声をかけてきた。
「おお、敬虔なるアクシズ教徒の旅人とお見受けします。どうかされましたかな？」
「へっ、わたし？　あ、はい！　あの、このあたりは水が流れてないんだなってショウくんと話してて……どうかしたんですか？」
「それですか。どうやら何者かが悪戯をしたようでして。昨日ですかな、妙に毒々しい色が混ざっていたのを見つけて、教会のアークプリースト様に浄化していただいたのです。一応、様子見のために水門を閉じていますがね」

「まったくひどいことをするものです。このアクア様のように美しい水の都に、絵の具を流してアクシズ教の評判を落とそうなどと、このような悪どい行為をするのはエリス教徒以外に考えられませんわ！」
「へっ？」
　ゆんゆんが固まった。その硬直した手を、がっしりとアクシズ教の人が握り締めた。
「アクア様を信仰される同士旅人よ、もしも犯人かエリス教徒を見かけた暁にはすぐに知らせてくださいね！　こんな卑劣な行為、許す事はできませんわ！」
「あ、あの？　エリス教の方という証拠は……」
「ここはアクシズ教の総本山ですから。疎ましい我々を滅ぼすのに、この街自体に攻撃を仕掛けたとも考えられますからな！　あなたもどうかお気をつけて！　あ、これ石鹸。アクシズ教同士のあなたにプレゼントします！」
「はぁ……え、ええと。どうもありがとうございました……」
「同士旅人さん。何か困り事があれば、いつでも声をかけてくださいねー!!」
　夫婦らしきアクシズ教徒が、先ほど見ていた水よりもきらきらした瞳を向けながら立ち去っていくのを二人で見送って。
　見送ると、その向こうで男の旅人らしき人に声をかけ、すごい形相で石鹸の籠を押し付けながら勧誘をしてた。その様子を見て、とうとう顔まで引きつった。
「ねえショウくん。わたし。アクシズ教に入っても、大丈夫……なのかな」
「……今から止めてもいいんだぞ？」
「う、ううん。疑っちゃダメだよね。友達ができなかったわたしに、素敵なパーティーメンバーと、素敵な友達をくれた女神様だもんね。そう……だよね」
　……引き返したほうがいい気もするけれど、こればっかりは本人がどう思うかなので、何も言えなかった。ちなみに自分はアクアに恩を感じてはいるが、入信料とか、教会に祈りを捧げにいかなきゃいけな

いとか、そういった面倒くさいことがありそうだという理由から、洗礼を受けてまで宗教に加入する気はさらさらない。

ゆんゆんはそれでも入りたいと言っていたのだが、口元が引きつっていることから、揺らいでいるみたいだった。

その手には、行き場のない石鹸が握られていた。

第十話

「……お前らなんともなかったのか？」
「いや……まあ。うん。何があったかは……」
地獄絵図。
何があったかはすぐにわかった。カズマの目が死んでいて、ダクネスの肌は妙にツヤツヤテカテカしている。ご満悦の様子。ゆんゆんのものと少し違う柄のペンダントを、それはもう胸元に大事そうにつけている。
「ダクネス、そのペンダントは？」
「ああ、これは私がエリス教徒である証だ。これを出しておけば勧誘を受けないと思ったのだがな。予想以上の成果だったよ！」
「……散々だったの間違いだろ!!　頼むから早くしまってくれ！」
「断る」
しかしダクネスは仕舞う様子をまったく見せなかった。
お、おいおい。この熱心な信者だらけのアクシズ教の総本山であんなものを出してたら……
「ああっ!!」
「きゃぁっ!?」
背後でゆんゆんの悲鳴が聞こえ、振り返る。
食パンを口にした街の人と一緒に尻もちをついていた……お、おお。ゆんゆんほどじゃないけど結構可愛い子だ。って、いやそうじゃなくて！
「だ、大丈夫か!?　ゆんゆん、怪我とかしてないか？」
「そこの街の方も怪我はないか？」
「まっ待てダクネス!!　だめだ！」
ちょうど曲がり角で頭をさすりながら、俺とダクネスが慌てて駆け寄ったのを、なぜかカズマが慌てて止めようとした。
「あ、ああ……すみません！　私の不注意で。本当にごめんなさい！」
「へっ。う、ううん、気にしてませんから。あなたこそ大丈夫ですか？」

「平気ですっ。あ、すみません。手を貸していただいても構いませんか？」
「ああ、手を貸そう」
ダクネスの伸ばした手は完全にスルーされた。
二人で一緒に何事もなかったように立ち上がったあと、その子はあざとく後ろで手を組み、心から嬉しそうに顔を赤らめながら、胸を突き出すように笑顔を振りまいてみせる。ついでに俺とカズマに、ウィンクしてみせた。
……ええぇぇ。
「ありがとうございます。あっ、みたところ旅の方ですね。本当にすみませんでした！」
「い、いえ。その。気にしないでください。それよりどこか痛いところはありませんか？」
「わたしは大丈夫です。そ、それより、あなたにどこか怪我させちゃってたら……ああ、どうしましょう……あっそうだ！　このすぐ近くにアクシズ教団の運営している診療所があるんです！　お金は私が払いますので、診てもらいましょう！」
「え、ええっ!?　本当にどこも痛くないし、あ、あの。それに初対面のひとにそこまでしていただくわけには……」
「いいんです！　困った時はお互い様ですから!!　すぐ終わりますから皆さんもぜひ！　ぜひアクシズ教団に!!」
「結構です」
カズマの即答に、行く気になっていたゆんゆんが、がーんとショックを受けた。しかしカズマの方が正しい判断だと思った。
「ささ、そこのエリス教徒なんて置いといて行きましょう！　ねっ！」
「結構です」
親切にされたおかげかコロッと騙されかけていたゆんゆんを引きずり、いそいそと逃げ出した。
すると追いかけてきた。「ま、待ってください!!　ちょっと立ち寄ってもらうだけでいいんです!!　あなたの為なんです!!」と聞こえたが、全力で逃げる。

「ハァハァ……くそっ。この街は……この街はぁっ!!!」
「つ、疲れた……なあ。そういえば、アクアとめぐみんの姿が見えないけど？」
「二人とも先に教会に行ってる。アクアのやつがちやほやされたいとかなんとかいって……あいつ、旅の目的分かってんのか？　というか！　あのアホ女神にこのクソ強引な勧誘をさっさと辞めさせるよう言わねえと！」
「わ、わたしは別に構わないのだぞ？　こ、この強引に迫られる感じ、んっ……たまらん」
「おい。いまなんつった」
「何も言ってない」
　ダクネスは凛とした顔で返した。
「ところでカズマ。さっきから気になってはいたのだが、水の都という割には水路に水が流れてないな？」
「それより早くペンダントをしまえ、さっきから子供から石飛ばされてんぞ。いてっ、こっちも当たってるから！　……そういえばそうだな。これ水路だろ？　水の都っていうわりには見かけないな」
「なんかイタズラしたやつがいたらしいぞ。アクシズ教団はエリス教徒の仕業とか言ってたけど」
「絶対なんの根拠もないやつだろ……お、ここが教会か。へぇー、さすがにでかいな」
　そこは冒険者ギルドと遜色ないほど大きな、正しく一宗教の総本山といっても差し支えないほど大きな建造物。
　水の都の象徴とさえ言われるこの建物は、滑り落ちる水で彩られ、噴水の飛沫でステンドグラスが光り輝き、”水の女神”を祀る建物であると誰もが一目でわかるほどに美麗であった。
　カズマの「一刻も早くクエストを終わらせよう」という提案により、開きっぱなしの教会の扉をくぐる。
「あれ？　教会の人が見当たらないぞ」
「出かけてるんじゃないですか？　お買い物とか……」

「妙だな、アクシズ教のことはあまりよくは知らないが、普通は扉を開けたまま教会を留守にすることなどないはずなのだが……ううむ？」
広々とした身廊にも祭壇にも。
一通り見回したが、どこにも人がいない。
「なあ。管理する人の一人や二人もいないのか？　おーい!!　……それにアクアとめぐみんは先にきてなきゃおかしいだろ。なあショウ。ここで、間違ってないよな？」
「一番広い通りの、一本道の一番奥だぞ。間違えるほうが難しいだろ。な、ゆんゆん」
「待てカズマ。どこからか、何か妙な音が聞こえないか？」
「妙な音だって？　……確かに、なにか震えるようなカタカタって音が……」
耳をすませると、確かに、何かが聞こえてきた。何かが震えているような……
「ああっ！　め、めぐみんっ。めぐみんじゃない!?」
ゆんゆんが見つけた。
埃のたまった隅っこで、杖を震わせる小柄な身体を……
「ど、どうしたのそんな隅っこで……!?　か、顔も真っ青だよ……？」
「ああ……ゆんゆんですか……ひぃっ!?」
少し安心した表情を浮かべて、顔をあげためぐみん。
ゆんゆんの豊かな胸の間に下がったペンダントを視界に入れた瞬間に、頭を抱えて発狂する。
「や、やめてください!!　あ、あ、あっあなたもアクシズ教に勧誘するつもりですかっ!?」
「そんなことしないよ!?　ねえ、ど、どうしてそんなに怯えてるの？　わたしたち友達だよね?!」
「すみませんすみません！　本当にゆるしてください。私が悪かったですから、どうか勘弁してくださいお願いします！　お願いです、とも、友達でいいですからっ、どうか！　どうか許してください……!!」
「め、めぐみん……めぐみん、お願いだから怖がらないでぇ……う、うわぁぁっ、めぐみん、めぐみん、めぐみぃぃぃん!!」

胸元のペンダントを見た途端に、めぐみんは着信を受けた携帯となり果てた。教会の片隅で、トレードマークの帽子がずれているのも気にせず、杖を大切そうに抱きかかえながらガタガタ震えてる。てこでも動かなさそうだ。見捨てられたゆんゆんが涙目に揺すったが、同じ言葉を出し続けることはやめないのに、反応すらしない。カズマやダクネスも呆れかえっていたが、やがて覚悟を決めたカズマがめぐみんに寄り添った。

「大丈夫だぞーめぐみん、まだゆんゆんはアクシズ教徒じゃないぞー。なあ、アクアは一緒じゃなかったのか？」

「アクアは……プリーストの人と一緒に出て行きました……今日はプリースト案件の事件があったみたいです……」

「事件？　それにしたって誰もいないってのは妙だな。悪いけどゆんゆん、クエストは後だ。まずはアクアや他のプリーストを探すってことでいいか？」

「う、うん。ねえめぐみん、これが怖いの？　しまうから。ね、怖くないでしょ。ねえっ？」

「あぁぁ……アクシズ教が……アクシズ教の人がいっぱい……あわわ……」

同族の親友に怯えられて泣きそうなゆんゆんと、立ち直れないめぐみんは、しばらく動けなさそうだ。

「カズマ。どうする？　このままここで戻ってくるのを待つか？」

「それでもいいけど。あいつのことだからいつ戻ってくるかわかんねーし、探しにいったほうが早そうだ。けど、どこにいるのかな」

意見を聞くために「ダクネス」と呼び掛けたカズマだが、教会の外で子供達に石を投げられて丸くなっている真っ最中であった。うわぁ……あ、駆け出してった。

「こらーっ、ガキども！　散れ、散れっ!!」

「……なあカズマ、この街はいいな。いっそみんなでこの街に住まないか？」

「ぜったいに断る!!」

げっそりしたカズマに同情の視線を送る。でも、これがいつものこ

とらしいので、何も言わなかった。
「なあショウ。めぐみんも動けなさそうだし、アクアを探してきてくれないか？　こいつらから目を離したら大変なことになりそうだから……」
「ああ。それとカズマ、この前はハーレムパーティーとか言ってほんとごめんな。いやほんとに」
「そう思うなら、一人でいいからトレードしてくれ……上級職同士のトレードだし、悪くないだろ?!　な？」
「ごめんそれは断る。行くぞゆんゆん！　そっちはそっちで頑張ってくれ」
「くそおおおぉぉおっ!!　はやく行っちまえ!!」

教会の外は晴れ渡っていた。
透き通るような、どこかの女神の髪色のような青さが広がっていた。
「すみません。教会の人がどこにいるか知りませんか？　あと、アクア様みたいな水色の髪をした旅人を探してるんですけど」
「おや。もしかして入信の方ですかな?!　それでしたらこちらの紙にお名前を書いていただけば、あなたもすぐアクシズ教徒になれますぞ!!　今ならこのアクア様の加護を受けた石鹸も……」
「い、いえ結構です。ご存じないなら結構ですから。あの、いまは荷物になるんで、帰るときにでも……」
「そう言わずにですね！　ああ、ですが今は教会のアークプリースト様は、街の水源や湖を浄化しにいっているらしいので、洗礼は少し後になってしまいますな！」
「ありがとうございます!!　さ。ゆんゆん、行くぞ！」
「ああっ！　待って、受け取って！」
ずっと後ろに隠れてたゆんゆんの手を引いて、さっさとその場を逃げ出した。

「どうしたんだ？　さっきは話しかけられて嬉しそうだったのに。なんか元気ないぞ？」
「う、うん……めぐみんがね、私のこと怖いっていうの。わたしがアクシズ教のネックレスしてるから……アクアさまには感謝してるけど……アクシズ教に入ったら、めぐみんに嫌われちゃう……」
「……と、とりあえずめぐみんが回復してから考えようか。旅費がかかるとはいえ、そこまで急ぐこともないんだしさ。おや？　お、おい。なんだあれ」
「へっ？　あれって……」
　ゆんゆんが恐る恐る、背中から顔を覗かせた。
「な、なにあれ。湖が、紫色に……昨日はあんな色じゃなかったよね」
「煙が上がってるぞ。うへえ、なんか、変な臭いもする。ぜったいあれ、やばいやつだよな」
「さっきも街の人が言ってたよね。水路に変なものがばらまかれてたって……」
　坂道から見えた景色に、二人で顔を見合わせた。
　確実に何かが起こっている。広がる水辺の景観は〝アクア様の加護を受けた美しい水の都〟というにはふさわしくない。どちらかといえば、魔王城の毒沼と言われてもおかしくない、異常に禍々しい気が漂っている。
　何かが起きている。
「行くぞゆんゆん!!」
「う、うん!!」
　俺たちが走っていると、異変に気付いたらしい街の人も増えてきた。たまに湖のほうを指差しながら井戸端会議に勤しんでいる。
　湖のほとりにたどり着くと、十人ほどの青服のプリーストが湖に向けて、何かの魔法を放っていた。紫色が、澄んだ水色に少しづつ戻り始めている。プリースト職の浄化魔法だろう。
「あ、あのっ。これは一体……!?」
「おおっ、そのペンダントからお見受けするに、同士ですな！　ご心配をおかけしております。ですが何の心配もいりませんよ。いまはア

クシズ教のプリーストが総出で浄化に勤めています！」
「いえ、そうではなく！　何が起きてるんですか!?」
「う、ううむ。それがですな。まだ我々も事態を把握していないのです。街のアクシズ教徒の通報を受けて駆け付けたのですが」
　湖の入り口から拡散するように広がる紫色を、どうにか止めようとしているようだったが、芳しくなさそうである。
「あと、ここに青髪の旅人のアークプリーストが来ませんでしたか？
　連れなんですけど……」
「おおっ!!　あの方とお知り合いでしたか。でしたらお話してもよろしいでしょう。君、頼むよ」
「実はここ数日の騒ぎでばら撒かれたのは、特殊なモンスターの毒のようでして……幸いにも中毒者はおりませんが、あのアークプリーストの方にも協力してもらっていまして。いまは街のほうの浄化をお頼みしています」
「も、モンスター毒？　それってどんなものなんですか」
「それが、触れただけで麻痺毒状態に陥るような……原液であれば触れただけで死に至るような強力なものでしてな」
「死っ!?」
　腹の底から驚いた。
　どうやら、想像以上にとんでもない事態に遭遇してしまったらしい。
「アクシズ教徒の巡回のおかげで早期に発見できましたが、そうでなければ住人が危険に晒されるところでした……いまはアルカンレティア中の警備隊が巡回しておりますので、どうかご安心を！」
「そんなことになってたなんて……ありがとうございます」
「いえ、街を守るのはアクシズ教徒として当然のことですから。あなたがたの探しているアークプリースト様は、女神アクア様の石像のある噴水広場におられると思います」
　カズマはこのことを知らない。急いで戻ろう。
　頭をさげたところで、来た道からすたすたと歩いてきた。その人は足を止め、不思議そうに言う。

「あら、ショウとゆんゆんじゃない。どうしてこんなところにいるわけ？」
「ああっ！　旅のアークプリースト様!!」
　きょとんとしながら、向こうからアクアがやってきた。
「いや！　探してたんだよ。教会で待ち合わせしてたのにどっかいっちゃうから！」
「しょうがないじゃない。だってこのアルカンレティアの危機と聞いたら黙ってられないもの！　あ、えっと……ゆんゆん、あなたも納得してくれるわよね。ね？　報酬天引きとかならないわよね？」
「は、はい!!　あの、そちらの人たちは」
「アクシズ教のプリーストの人たちよ！　いま上のほうを、この私の聖なる力でまとめて浄化してきたところ。カズマたちは？」
「教会でお前を待ってるけど……なんか大変な状況みたいだな」
　後ろには十数人のアクシズ教のプリーストと思わしき人をゾロゾロと引き連れていた。
　そして、後ろの湖を見つけたアクアは。
「あああああっ!!!?　ちょっと、なに、ここもこんなに汚されてるわけ!?」
「は、はい。街のすべての水路はこちらにつながっていますので……」
「あーもう!!　誰よ、私の可愛い子たちの街でこんな悪どいことをしたヤツは！　うー、絶対許せないんだからぁ!!」
「アークプリースト様、管理をしておられます神官のゼスタ様が出かけられている以上、あなたが頼りです。同士とはいえ、旅の方にこのようなことを頼むのは本当に申し訳ないのですが……」
「何言ってるのよ!!　アクシズ教徒のためなら、この身にかえても何とかしてみせるわ！　みんな、ここを浄化すれば元通りだからね！　湖に〝ピュリフィケーション〟よ!!」
「はい!!　いくぞ、〝ピュリフィケーション!!〟」
「〝ピュリフィケーション!!〟」
「〝ピュリフィケーション〟！〝ピュリフィケーション〟！〝ピュリフィケーション〟っ!!」

アクアを筆頭に、数十人が湖に手をかざす。
唱えているのは先ほどと同じ魔法だ。しかし、アクアが加わった瞬間に、魔法は劇的に効果を変える。みるみるうちに湖は、今までの数十倍の速度で、透明色を取り戻していった。
「おおっ、何ということだ……あれだけ広がった毒に侵されていた湖があっという間に……」
「微力ながら続けよう！　魔力が尽きるまで、湖が汚れたままでは、女神アクア様に顔向けができないぞ!!」
「”ピュリフィケーション”！”ピュリフィケーション”！”ピュリフィケーション!!!”!!」

やがて俺たちが唖然と眺めているうちに、浄化は完了する。
まるで台風に雲が吹き飛ばされたみたいに、アルカンレティアの湖はもとの美しい透明色を取り戻した。
いや、もしかするとそれ以上かもしれない。
つい数秒前まで汚れきっていたはずなのに、いつの間にやら水鳥が優雅に泳ぎ、魚がポチャンと飛び跳ねるようになっていた。昼下がりの太陽の明かりを反射し、湖畔は宝石のように輝いている。
「ふふん、どう。この私の素晴らしく輝かしい聖なる力、カズマ達に見せてやれないのが残念ね!!」
「……奇跡だ」
アクシズ教の誰かが、ぽつりと呟く。
「おお……あれほどの毒を、一瞬にして浄化されるとは……」
「あなた様は、さぞ高名なアークプリーストなのでしょう。本当に、本当に感謝致しますぞ……!!」
「失礼ながら、私たちはあなた様のお名前を知りません。どうかお教え願えないでしょうか」
「ふ、ふふふっ……カズマには釘刺されてるけど、そんなに私の名前が知りたいなら教えてあげる!!」
あっ、これまずいやつだ。
そう思った時には手遅れ。

きらきらした視線を集めるアクアは、浄化した何よりも美しい湖を背景に、言い放った。
「お集まりの敬虔なるアクシズ教徒よ。私の名はアクア」
「えっ……？」
誰かが声を漏らした。
もうだめだ。
頭を抱えた。
「そう、あなたたちが崇める存在。水の女神、アクア。あなた達を助けるために、私が自らこうしてやってきたの!!」
「あ、アクア……様？」
「いや、でもそんな……いくら何でも……」
「……みんな!!　そのお方は確かに女神さまだぞ!!」
アクシズ教のプリーストの一人が、叫ぶ。それに次々に続いた。
「そうだ！　先ほども汚染された水源に、自らの身を投じて、毒を浄化されたのだ!!　そんなことはアークプリーストのゼスタ様ですらできっこない!!」
「おお、ではあのお方は本当に女神さまなのか！」
「何ということでしょう。それでは、私たちの危機を察知して、女神さま自らが降臨なされたのですね……!!」
「アクア様は私たちを見守ってくださっていたのですね……ああっ生きててよかった！」
どうしよう、カズマに怒られる。
ゆんゆんですら呆然としていたが、火のついた信者たちはもう止まらなかった。
「私が来たからにはもう大丈夫!!　この街を、モンスターの好きにはさせないわ!!」
信者達が完全に平服し、腰に両腕を当て、えっへんとばかりに胸を張るアクアはその信仰を一身に受けてご満悦だった。
「アクア様だ！　アクア様が、このアルカンレティアに降臨なされたぞおおおぉぉぉぉ!!!」
誰かの叫びをきっかけに、空気が震えた。

二人揃って「この後どうしよう」と口元は引きつっていた。

第十一話

この日、アルカンレティアの夜はお祭り騒ぎであった。
街のほとんどがアクシズ教徒で占められているこの街で、一つの噂が駆け巡ったためである。
「あなたはもう聞きました?!」
「ええそりゃもう!! この街に、アクア様が降臨なされたというじゃないですか! ああっ、わたしも是非一目お会いしたいですわ……!!」
「俺はアクア様を見たぞ! あの美しい水色の髪、水色の瞳、滑らかな羽衣……まるで噴水の神像の生き写し! あれがアクア様でないはずがない!!」
「聞けばこの街の危機を救ってくださったとか。ああっ、ありがたい。アクア様は私たちを見ていてくださった……」
「天から降りてまで私たちをお救いくださったって。今は、従者とともに教会に滞在されてるみたい。ああっ、生きていてよかった!」
熱心なアクシズ教徒の中でも特に地位のある教会のプリーストが触れ回ったため、異様な熱気に包まれていた。
町中の人が高ぶり、ある者は教会へ一目見ようと押しかけようとした。
「俺はアクア様を一目見にいくぞ! みんな、行くよな?!」
「お止めなさい、アクア様は街の浄化でお疲れです。今晩はもうお休みになるとおっしゃっておられます」
「そ、そうでしたか! アクア様がそれを望んでおられるなら……みんな、絶対行くんじゃないぞ!」
「おう、わかってらぁ!」
「アクア様のためですものね!!」

教会にはアクシズ教団による厳重な警備が敷かれ、誰も立ち入れないようになっている。
女神アクアを守るための厳戒態勢。

しかし遠巻きに教会を眺める人影は絶えないものの、近づいてくる人は一人として存在しなかった。
アクシズ教徒の人が律儀に「迷惑をかけてはいけない」という命令を守ったためである。知らない人は教えられ、それでも教会の前を通ろうとするものなら、引っ掴まれ、路地裏に引っ張り込まれ、十数人に囲まれながら入信書を渡され、ペンを持たされた。
おかげで、街のお祭り騒ぎからぽっかり外れたように、教会前の広場はがらんどう。
篝火だけがごうごうともえさかり、たまに本当に用事のある街人が、入り口のプリーストに話しかける程度だ。
そして、そんな騒ぎから外れたその建物の中。

「ささ、アクア様。こちらを……これはアルカンレティアで手に入る最高級の葡萄酒でございます」
「ありがとう。けど、あまり気を使わないでちょうだい。私はあなたがたが信仰してくれる、その気持ちだけで十分ですから」
「おおっ、なんという素晴らしいお言葉。私共一同、感服いたしました……！」
「……それはそうと、ちょっと飲んでみたいから……一口だけ。一口だけ頂けないかしら？」
「はい。それはもう、どうぞどうぞ。アクア様のために用意したものですゆえ、ご堪能くださいませ！」
教会内の、本来は街会を行うような長テーブルの上座に座って、ニコニコと信者の接待を受けるアクアに、カズマが耳打ちする。
「おい……俺は名乗るなって言ったよな。言ったよな？」
「何よ。カズマさん、いい？　今日はこの街のピンチだったのよ？女神としての力を明かしてでも救わなきゃいけなかったの。可愛い子たちを守るのは当然のことでしょ！」
「聞いてるんだからな。お前が、自分で不必要に名乗りを上げたこと。知らないと思うなよ！」
「え、えっとそれは……そ、それよりカズマさんも食べて食べて！

あっ、この葡萄酒すっごく美味しいわね！　さすがは私の可愛い子たち、お目が高いわね！」
「お気に召されたようで何よりです。あ、そちらの従者の方も、ささ。どうぞどうぞ」
「従者かよ俺たちの扱い……」
　機嫌がよさそうなアクアに、誰が従者だ！　……と言わんばかりに睨むカズマ。隣には時間が止まったように停止しためぐみん、料理と一緒に盛り付けられたドッグフードを、うっとり眺めて居るダクネスと続いて座っている。
「か、カズマ。まずいですよ。いくら女神アクアの特徴によく似ているからって、アクシズ教の人たちをここまで信じこませちゃって……！」
「……大丈夫だ。何かあったら、全部あいつの責任にして俺たちは逃げよう」
「わ、私は、どんな結果になろうと、この街に居続けてよいと思っているのだが……」
「いやマジで逃げろよ？　頼むぞ。てかほんとペンダントさっさとしまえ！」
　そんなアクア以外微妙な雰囲気なカズマのパーティーを対面に、ゆんゆんと食事をとっていた。
「ね、ねえ。どうしよう。ま、まずいよショウくん。もしかしてわたしたち、大変なことをしちゃったんじゃ……」
「大丈夫。どんな結果になってもゆんゆんのせいじゃないから。なっ。もっと落ち着いて？　震えなくても大丈夫だからな」
　本当に何もしていないはずなのに、カタカタ怯え震えるゆんゆんの背中をそっと撫でる。
　かわいそうに。
　ずっと一人ぼっちだったゆんゆんが、こんなに多くの人を巻き込んだ大変な騒ぎが起こってしまった。その中心に、自分が座っているのだ。人付き合いになれていないゆんゆんが想像できないほどのプレッシャーを感じていることは想像できた。

街で水戸黄門の正体をうっかりばらしてしまった、従者の気分というとこだろうか。
……よしよし。前を向けずにカタカタ震える頭をそっと撫でた。
「しかしアクアの騒ぎで忘れがちだが、毒がばらまかれたなんて、かなり酷い事件じゃないのか？」
「はい。町中に致死性の毒がばらまかれるなんて、どう考えても普通じゃありません。具体的には、アクシズ教徒の人もさすがに『エリス教徒の仕業だ！』と言いださないくらいの一大事です」
「なんつーか、それはかなり大事だな……」
「被害がなかったのも運がよかっただけだ。聞けば、この教会の最高責任者も他の街に出かけたばかりという」
「その隙を狙われたってことか……な、なんかやばそうな感じがビンビン伝わってくる……」
カズマ達と一緒に、改めてことの重大性を理解した。
すでに街の自警団やアクシズ教のプリーストが数人が巡回しているらしく、少なくとも今夜は大丈夫とのこと。本当なら水源の一つが根本からダメにされてしまったようだが、アクアの聖なる力ですっかり元通り。
根本からダメにされたものを、元に戻す。この能力は教団の人によると、魔法の存在するこの世界においても、途方もない奇跡らしい。
すごい、アクアが水の女神してる。
「けど犯人は一体誰なんだ？　わざわざそんな通り魔みたいなことするなんて……」
「ショウくん、もしそんなことをする人がいるとしたら……うん。一つしか考えられないよ」
「はい。ゆんゆんも気づいているようですね。私もそう思います」
「なんだよ、二人揃って。どういうことかちゃんと言ってくれ」
「つまり二人は、魔王軍の仕業と言いたいわけか？」
「んなっ!?」
ダクネスの言葉に、カズマが椅子を飛ばして立ち上がった。
「……そちらの紅魔族のお二方のお察しのとおりです。私どもアクシ

ズ教団も、このたびの非道は、魔王軍の仕業ではないかと考えております」
「ってことは。街に魔王軍が入り込んでるってことか?!」
「その可能性は十分ありますね。事実、モンスターに街を滅ぼされた例はいくつもありますし……」
「……これは他言無用なのですが。ここ最近、このアルカンレティアで、これに近しい事件が頻発していたのです」
「ええっ!? それって今までも毒が!?」
「いえいえっ!! これまでは毒などではなく、ただ毒々しい色になるだけの絵の具のようなものがばらまかれるだけでした。ですので今回も大したことはないだろうと思っていたのですが……我々の目は誤魔化せません。本物の毒と、色付きの水など、すぐに見分けがつきます」
「さすがは水の女神を祀るアクシズ教団。そういったことに関しての専門家というわけか」
　ダクネスが関心して、腕を組んでうんうんと頷く。
「けどモンスターなんて入り込んだら、すぐ街の人に見つかって終わりだろ?」
「えっとね、こういうのを見つけるのはすごく難しいんだ。中には人間に化けて入り込むモンスターもいて……過去の例だと、モンスターだけじゃなくて、主犯が悪魔だった例もあるんだよ」
「悪魔ですって!? モンスターでも絶対に許せないのに、悪魔だったら絶対に容赦しないわ!! だから安心してね、私の可愛い子たちよ!」
「おおぉぉ……素晴らしいお言葉。アクア様がいれば、たとえ悪魔の仕業であろうと、この街は安心です……」
　アクアが拳を掲げて、それを周囲のアクシズ教団の人たちがキラキラした瞳でもてはやした。
「なあ、俺たちはいつごろこの街を出られるんだ?」
「この様子……しばらくは出られなさそうだな!」
「そ、そんな……アクシズ教団で溢れたこの街でしばらく過ごさない

といけないなんて……」
　めぐみんがこの世の終わりのような顔で帽子を抱きかかえたが、それに追い打ちをかけるように、控えていた教団の人がにこやかに言い放つ。
「アクア様の従者の方は、教会にお泊まり頂けるように準備しております!!」
「ああっ！　めぐみん、めぐみん!!?　気を確かに持つんだ!!」
　ぶっ倒れためぐみんを介抱するカズマをよそに、アクシズ教の人は次は俺たちのパーティーに微笑んだ。
「そちらの付き添いの方も近くに宿を用意させて頂きましたので。どうぞ、アクア様が滞在されている間はそちらにお泊まりください」
「ゆ、ゆんゆんっっ!!　ご、後生の頼みです！　今すぐ私とパーティー変わってください!!」
「ええっ!?　めぐみん!!　そんなことでパーティー変えるなんて、冗談でもいったらだめだよ！」
「そこをなんとか！　ああっ、引っ張らないで！　や、ヤメロー……」
　いきなり復活しためぐみんに面食らいながらも、その後カズマ達はアクシズ教団の人たちに連行されていった。
　中でもアクアは教会の中でも、最高管理者の使っている部屋で寝泊まりするらしい。教団の人にズゾゾゾと、引きずられていく無気力めぐみんを、哀れに思った。
「ああ……めぐみんが……めぐみんが、行っちゃう……」
　ゆんゆんが見送りながらぽつりと呟く。
　ライバルのあんな姿を見ては、思うところがあるにちがいない。俺には肩をぽんと叩いて、励ましてやることしかできなかった。さようならめぐみん。おやすみめぐみん。
「お二方。あちらのアクア様の従者の方には既に申し上げましたが、我らが女神であられるアクア様が滞在されている間、アクア様が私どもの教会にお泊まり頂いていることは、アクシズ教の方以外には、くれぐれも他言無用でお願いします」
「いろいろと面倒ですもんね。わかりました」

「それでは宿までお送りします。こちらへ……ん？　何か騒々しいな……」
「あ、アクア様！　お待ちを、お待ちくださいっ!!」
「何だね君は。何かあったのかな？」
　背後から突然あがった声は、奥に行こうとしていたアクア一行の足を止め、振り返らせた。
　助かった、とあからさまに目に光を蘇らせるめぐみんだったが、その場の雰囲気が、あまり良い知らせではないことを伝えていた。
「お、お休みのところ申し訳ありません！　実はですね、先ほど教会の方に、毒を飲んで倒れたという子供が出まして……」
「何だとっ!?　被害者か！　……しかも子供とは。その子はどこにおるのだ！」
「旅の冒険者の方が連れてきて……こちらの子です」
　アクシズ教の一人が抱っこして連れてきたのは、顔を異常に青くした、まだ年端もいかない白髪の女の子だった。
　可愛い外見とは裏腹に、体のところどころか傷だらけなことに、全員が目を剥いた。
「なんと!!　浄化したのは昼だというのに、被害者が出てしまっていたとは……何ということ!!」
「おお、なんということか……こんなに血色も悪く、ひどい汗だ。このような症状を治せる方といえば、ゼスタ様か……あるいは……」
「ちょっと、どきなさい!!　ひどい状態ね……〝ピュリフィケーション〟!!」
　教団の人が何かいう前に、押しのけたアクアが、誰にも物言わせぬまま魔法をかける。
　光が女の子を包んだ瞬間にはひどく苦しげに腕の中で悶え、喉を押さえて暴れたが、光が消えると、硬直が解けた。今までによほど苦痛を感じていたのか、額からで続けていたであろう、脂汗が流れ落ちた。
　やがて、薄っすらと目を開ける。
「……あれ？　ここは」
「おおっ、奇跡だ!!」

「あのような状態から一瞬で回復させるとは……」
「さすがはアクア様、凄まじい御力だ……」
疲れたように目をぱちくりさせた女の子は、まるで女神のように優しく微笑むアクアをじいっと見つめる。
アクア、カズマ、ダクネス。そしてアクシズ教団の人が覗き込んだ。
「お姉ちゃんは……？」
「これでもう大丈夫。安心して、あなたの中にあった毒を消す魔法をかけたからね」
「ど、どく？　うぅ……すぅ……」
やがて力尽きたように、幼女は目を閉じて腕の中で眠ってしまう。
顔色も徐々によくなってきたみたいでほっと安心した。
「……どうやら寝てしまったようです。いやはや、素晴らしい御力でした。二度も奇跡を目の当たりにできるとは、ああっ生きて、アクシズ教団でプリーストの務めを果たせて、本当によかった！」
「そうでしょうそうでしょう。それにしてもっ、こんな幼い子まで……許せないわ魔王軍っ!!　必ず見つけて、とっちめてやるんだから!!」
「いや、まだ魔王軍の仕業と決まったわけじゃないだろ」
唯一カズマは冷静に突っ込んだ。
「あ、あの……ところで、この子どうしましょう」
「その子がどうかしたのか？」
恐る恐る、後ろのプリーストの人が申し出て、アクシズ教団の人が聞き返す。
「この子を連れてきた旅の方を探しているのですが、見当たらなくって。メイスを持ったプリーストの方なのですが……」
「何ですと!?　困りましたな……この子を起こすというわけにも……」
「それなら、もう夜も遅いしひとまず教会のほうで預かってあげたらいいんじゃないかしら？」
アクアが何かをするか、何かを言うたびに、すべてのアクシズ教団の人たちは感動して涙を流しかねない勢いで喜んだ。ついでに、歓喜

のたびにめぐみんがビクンと恐怖に震えた。
「おお……そうおっしゃっていただけるなんて、この子もさぞ幸運でしょう!!　我々を導いてくださるアクア様に感謝を……
　これ。旅の方とアクア様をお連れしなさい」
「はい。ささ、お二方はこちらに。宿はとってありますので、どうぞご安心ください！」
　その振り返りざまに、カズマが何か言いたそうにこちらを見ていたけれど、両者ともアクシズ教徒の人に連れられていってしまった。杖を抱きかかえためぐみんもズザザザと連れて行かれた。
　……まあ明日聞けばいいか。
　そう思いながら、俺とゆんゆんはその場を後にした。

第十二話

「お、おはよう……」
「ひゃいっ!!　お、おはようございます……え、えと、ショウくん……」
アルカンレティアの高級宿の、最も広くて贅沢な部屋で、お互いに目を合わせられなかった。
……まさか同じ部屋をあてがわれるなんて思わないって。
ああっ。初めて女の子と、一つ屋根の下でお泊まりしてしまった。
ゆんゆんも、ゆんゆんだ。こんなに恥ずかしがるならやめとけばいいのに。「パーティーメンバーだからこのくらい当然です」と譲らなかったので、こっちも本音は大歓迎だったので受け入れた。　さすがに着替えは見れなかったし、一緒にお風呂に入ったわけでもないけどさ。
でもこうして、寝癖がついたままの素の髪型と、パジャマ姿が拝めているので、女神アクアへの信仰心が少し増した。
ありがとうアクア様。ナムナム。
「と、ところで今日はどうしよっか。宿代は無料でいいと言ってくれてはいるけど、わたし、申し訳ないなって思うんだけど」
「急いでアクセルに帰る用事もないけど、事件が解決するまで、アクシズ教団の人に甘えて街に居続けるっていうのもなんだかなぁ……」
ゆんゆんには甘えっぱなしなのだが、それは言いっこなしだ。
どちらにしろアクセルには帰らないと。あの街にはずいぶん馴染み、親しんだ、冒険者ギルドがある。カズマのパーティーもきっと帰りたがっているにちがい無い。
「それなら、この辺りでレベル上げしない？　アクセルよりも強いモンスターがいそうだし、きっとレベルもいっぱい上がると思うの！」
「おおっ、そうしてくれると助かるよ。でもとりあえず朝は教会の様子を見に行ってみないか。ゆんゆんも、心配してるだろ。アクアはともかく、めぐみんとか、カズマとダクネスも」
「そうだね……昨日はみんな大変だったもんね。待ってて、準備してくるね！」

とてて、とお風呂場の方に行って、いろいろと朝の用意を整えにいった。
窓を開けて外を覗くと、街は昨日と全く変わらない活気に包まれていた。騒ぎがあったとは思えない穏やかな早朝にほっこりしていると、数人のアクシズ教徒の人が目に付いた。
旅人に群がって「こちらにサインして下さるだけでいいんです!!」と、紙とペンを押し付けようとしているのだと気づいてしまって、そっと窓を閉じる。何も見てなかったことにした。
「お待たせショウくんっ！　……どうしたの、そんな引きつった顔して？」
「何でもない。うん、この街は凄いなって思っただけだから、あんまり気にしないで。何も見てないから」
「？」
凄まじく外に出たくない気持ちが強くなったが、そういうわけにもいかない。
冒険の用意を整えて街へくりだした。
前に立ってくれるゆんゆん。胸にアクシズ教のペンダントをつけているおかげだろう。街の人たちからニコニコと歓迎の視線を浴びて、幸せそうに鼻歌なんて歌っちゃっている。昨日の凄まじい勧誘のことはすっかり忘れてしまったみたいだ。
そう、アクシズ教徒であれば、この街はとても住みやすい場所なのだ。
「あらぁ～そこのあなたっ！　一人旅？　大変でしょー！　服も汚れてるわ。そんなあなたに、とっておきのアイテムがあ・る・のっ！」
「ヒッ！　な、なんですかあなたは！　は、離れろおおおおお!!」
遠くで新しい旅人が、洗剤のカゴを持ったおばさんに絡まれているのを見ないふりをした。
うん。アクシズ教徒なら住みやすいのだ。
アクシズ教徒なら。
「ああ二人とも、おはよう。そっちはどんな調子だった？」

「おう。アクシズ教の教会に泊まるなんて言いだされるもんだから、一時はどうなることかと思ったけどさ。女神というわけあって、かなりいい扱いだよ。アクシズ教団じゃなかったら完璧だったな」
「カズマ。そんなことより早くこの街から出ましょう。一刻も早くそうするべきです。大変なことになる前に、今すぐにでも行きましょう」
「いや！　私はこの問題が解決するまで、この街を離れるべきではないと思う!!」
　そう主張するダクネスの肌は、まるで女神アクアの加護を受けたかの如く艶々に輝いていた。
　めぐみんは目に隈ができ、疲れを溜め込んでいる様子。
「アクアは？　一緒じゃないのか」
「アクアのやつなら、昨日運ばれてきた女の子と話してるよ。親御さん、まだ見つかってないんだってさ。部屋にいるし様子を見に行ってみるか？」
「そうだね。あ、あれ。めぐみん？　ねえ、なんでダクネスさんの後ろに隠れちゃうの？」
「あ、あわわわ……」
「ゆんゆん、そのペンダント、めぐみんの前では外したほうがいいかも」
　つけっぱなしのまま忘れていたらしい。アクシズ教団の紋章を懐にしまったゆんゆんが自らの親友をなんとか宥めている間に、アクアの部屋を訪ねた。
　コンコン。
「アクアー、入るぞ」
　カズマを先頭にぞろぞろ中に入っていく。
　贅沢とまで言わないが、宿屋と同じような内装の小部屋であった。
　そのベッドの上で幼女が泣きじゃくっており、それを「あーよしよし」と、頑張ってあやしている。カズマがドン引きした。
「お前、子供を泣かせるとか、一体何をしたんだ……」
「ちっ違うわよ!!　私のせいじゃないから！　この子が目を覚ました

とたん泣きだしちゃって……本当よ！　何もしてないからねっ!?」
アクアは必死に説得するが、どうだか、と言わんばかりに疑惑の眼差しである。
ダクネスがそっと視線を下げて女の子の前に出た。
「そこの子。昨日は魔物の毒など受けてとても辛かっただろう。よければ、お姉さんにいろいろと教えてくれないか？」
「うぅっ、えぐっ。ぐっ、お兄ちゃあああん……ごわかったよおぉぉ!!」
「えっ？　うおわっ!!」
アクアの側から、ダクネスをすり抜け。
えっ、お前カズマのほうに行くの!?
まるでアクアの側にいるのが辛いとでも言わんばかりに、幼女はカズマの胸に弾けるように飛び込んだ。ばふっ、とうまく受け止めた。
華奢な身体がかなり震えている。ぽんぽん、と背中を叩きながらジト目をアクアに向ける。
「アクア……お前……」
「ほ、本当ですから！　本当に何にもしてませんから!!　うわぁぁぁっ、お願いじんじでよぉ、カズマさぁぁん!!　あやすために渾身の『花鳥風月』も披露したのにぜんぜん泣き止んでぐれないのお”お”お”!」
「ううぅっ、お、お兄ちゃん、怖かったよぉ……」
「おお、よしよしかわいそうに。あの青いお姉ちゃんにいじめられたんだねー」
「うぁぁ、何もしてないってばあああぁぁ!!」
しばらく二人がワンワン泣き止むのを待っていると、幼女のほうが先に話せる状態になったらしい。
カズマが優しく頭を撫で続けている、その横で、ダクネスがもう一度同じ視線に屈んだ。
「なあ、君。どこから来たんだ？　名前は？」
「わ、わたしヨハネス……」
「ヨハネスというのか、よい名前だ。どこから来たのか言えるか？」

「……」
ふるふる、首を横に振った。
ダクネスが「この街の子か？」「お父さんかお母さんは？」「昨日連れてきたプリーストの人は知り合いか？」などと身元を丁寧に聞いていくが、一度も首を縦に振らなかった。この場の全員が顔を見合わせる。どうやら厄介なことになったらしい。ちなみにアクアは思いの外ダメージが大きかったのか、まだちょっと泣きじゃくってた。
「困ったな。どこから来たかが分からなければ……家に帰してやることができないぞ」
「こういうときは、街の人に相談するべきでしょう。私たちではどうすることもできません……」
「そうだな。ひとまずアクシズ教団の人に相談してから……」
「すっ捨てないでお兄ちゃん!!」
カズマにぎゅうとしがみついて、見上げる。綺麗な白髪を持った美幼女の純粋なキラキラした幼い瞳。愛くるしくも、憐れみを喚起させる上目遣い。ぐはっ、とカズマが爆発した。
「お、おいカズマ大丈夫か？　鼻血出てるぞ？」
「だ、大丈夫だ……問題ない」
「お兄ちゃんっ、捨てないで。わたしを捨てないで！　何でもしますから!!」
「うん大丈夫だよ。お兄ちゃんが悪いアークプリーストのお姉ちゃんから守ってあげますからね」
「……ロリニートのくせに！　ロリニートのくせにっ!!」
カズマは満更でもなさそうだったが、アクアがドン引きしてぼそりと呟いた。
しがみついて「捨てないで！」と何が何でも離すまいとがくがく揺さぶるさまに、カズマの仲間たちは、とうとう困り果ててしまう。
カズマが困ったように俺を見たけど、俺だってどうしていいかわからんって。警察に行くしかないだろ。
この場の全員が一時的に滞在しているだけの初心者冒険者だ。どうすることもできない。

「なあ。君のことを俺はよく知らないけどさ。君はお家に帰らなきゃいけない、わかるだろ？」
「う、ううっ……わたし、生まれてからずっと森で一人ぼっちだったの……」
「お父さんやお母さんは？」
「いないの。みんな、わたしが嫌いだって追ってくるの。ずっと、一人でいたの。ねえ格好いいお兄ちゃん、手を離さないでね？　ぜったい、ぜったいだからね！」
「か、格好いいって……なんなのよこの子」
「どうするカズマ。こんな幼い子を置いて、私たちだけアクセルに帰るなど……」
「そうだな……ごめん、ゆんゆん。本来ならすぐにクエストを終わらせて帰れるはずだったんだけど」
　何か他のことを考えていたらしい。俯いて考え込んでいたが、ふと、我を取り戻した。
「へっ？　ううんっ!!　わっ私は全然いいの！　泊まる場所も提供してもらってるし、も、戻ってもどうせ……用事も、知り合いもいないから……」
「そ、そうか……なんかごめんな？」
　徐々に言葉尻がしぼんでいった……この傷だらけの白髪の子とは別な方向で、憐れを感じたのかもしれない。
　すると後ろのドアから、控えていたアクシズ教団の人が入ってくる。途端にアクアがキリッとした表情になったが、ちょっと涙のあとが残っていた。
「こちらの子は当面アクシズ教で面倒をみることにしましょう」
「お気遣い感謝する。ところでこの子の親の調査はどうなっているのだ？」
　と、ダクネスが聞いたが全くそちらのほうを見ずに、教団の人はアクアに頭を下げた。
「このまま親元が見つからなければ、正規の手続きを踏んで街の預かりにさせますので。どうかご安心ください」

「……ダクネス、そう顔を真っ赤にしないでください。魔王軍に襲われてるかもしれないという話についてはどうなりました？」
「現状では、まだ……ですが過去の例から踏まえますと、その可能性は極めて高いとアルカンレティアの学者が言っておりました」
　カズマは露骨に嫌そうな顔をするのとは逆に、めぐみんは目を輝かせた。
「ま、魔王軍なんて……そ、そんな凄いのが来てるの……？」
「本当に魔王軍に襲われているとなれば、我々冒険者としては放っておけない事態ですよカズマ！」
「そうよっ!!　この街が魔王軍に滅ぼされちゃったら、私の可愛い子たちは行き場を失ってしまうの!!　カズマさん、この事件、ぜったい私たちで解決してみせるわよ！」
「……すみません。ほんの少しだけですが、アクセルに帰ったほうがいい気がしてきました」
「俺も俺も」
「ちょっ、めぐみん、カズマさん!?　見捨てないで、私の可愛い子たちを見捨てないでよおぉ、願いだからあぁぁぁぁ!!」
「め、めぐみんの言う通りだよ！　冒険者として、放っておけない！　わたし、この街に残る！」
「ゆ、ゆんゆんーーーっ!!」
　ゆんゆんが可愛らしい声で力強く宣言すると、アクアはすぐに機嫌を直し「あなただけが頼りだから！　お、お願いね!!　本当にお願いね？」とがっちり握手されていた。しかし、そうすると徐々に自信なさげな顔になっていった。きっと頼られ慣れていないのだ。
　調子を取り戻したアクアがやる気満々にカズマのパーティーを鼓舞しはじめたあたりで、ゆんゆんが俺の耳元にこそこそと言った。
「あのね、ショウくんにこんなこと頼むのは気が引けるんだけど……わたしと一緒に、残ってくれないかな……お、お願い……」
「お、おう……もちろん」
　ぎゅ、と俺の手を握った。残らない選択肢は木っ端微塵に消え失せた。たまらん。

カズマのパーティーも納得したらしい。
一通り落ち着いたあと、アクアがゆんゆんにありがとう、と手を握ってなんどもブンブン振り回す。
どうやら、俺たちはこの魔王軍騒動が解決するまで、アクセルには帰れないらしい。

「ええっ。それじゃあヨハネスは、ずっと一人だったのか？」
「うん……村にいても友達は誰もいなかったし、大人のひともお話してくれなかったの」
すでに回復しきった様子のヨハネスは、美味しそうにご飯を頬張った。
話を聞いてみると、かなり過酷な境遇で生きてきたらしいことがわかった。村では何かが原因で嫌われていたらしい。体の傷や血の滲んだ包帯は、そのためのものだという。
気を利かせたダクネスが包帯を取り替えてあげようというと、なぜか彼女はとても嫌がって、胸板に顔を隠した。カズマは慈愛の表情でそれを受け入れた。ロリニートめ。
「なぜ、そんな風になったのだ？」
「……わかんない。でも、それでね。村を放り出されて。怖いひとに攫われて売られそうになったところを、綺麗なお姉ちゃんに助けてもらったんだ」
「そうか。つらい思いをしたのだな……私たちがいるからには、もう大丈夫だからな」
「けどそうなると、言っていたプリーストの人もそんなにあてにできないって訳か……」
生まれの村に関する手掛かりは、どんなに聞いても出てこなかった。
だが話の内容から察するに、村が見つかってもそのまま返すというわけにもいかない。痛々しく巻かれた包帯や、傷や、ボロボロの服は、モンスターにやられたものではないだろうから。

どうすべきか、後で相談する必要があるだろう。
「……それにしてもカズマにそこまで懐くとはな。一体どういうことだろう」
「こっちに来てもいいんですよヨハネス。その男は、私たちをカエルの液でヌルヌルにさせるのが趣味の変態冒険者なんですよー」
「おい人聞きの悪いことを言うな！　それはお前が一発撃ったあとぶっ倒れるのがすべての原因だろうが。ねーヨハネス、あんな紅魔族のロリッ子の言葉なんて信じちゃダメだからね？」
「うん！　カズマを信じる！」
「な、なんということでしょう……この世の終わりです」
カズマの膝の上で、くるりと振り返って笑顔。めぐみんが大ショックを受けて、沈没。ダクネスだけは二人に生暖かい視線を向けていたが、アクアはすっかり胡散臭いものを見る目に変わっていた。
「ねえショウ。あんな可愛い子がこの私をさしおいて、いきなりロリニートに懐くなんて、おかしいと思いません？　もしかしてカズマさん洗脳系の魔法でも覚えたんじゃない？」
「いや、いくらなんでもそんな……あ、エリス教の子とかじゃないのか？　だからアクシズ教を怖がるんだ。てかアクア、あの子に本当に何もしてないんだろうな……」
「してないってばっ!!　むしろ、なんとか泣き止ませようと、泣く子も笑う超秘蔵の宴会芸〝機動要塞デストロイヤー〟まで披露したんですからね!?」
「な、なんだそれ。ちょっと気になる……」
俺も気になる。なんだその格好よさそうな名前の芸。
冒険者ギルドでは、魂の命ずる時に～～とか言って、ぜったい自分から披露しなかったのに。
「しかし、ヨハネス。あなたも大変だったんですね。安心してください、ここにあなたと同じ、村でぼっちで過ごしてたアークウィザードのお姉ちゃんがいますから」
「ほんと？　お姉ちゃんもおんなじなの？」
「煽るな煽るな……あれ、ゆんゆん？」

と、めぐみんがゆんゆんを指差す……しかし俯いたまま、まるで聞こえなかったみたいだ。お、おや？　と指差したまま首を横に傾けた。
つんつんと肩をつついて、やっと自分が話の輪に入っていることに気づいてくれた。
「ゆんゆん？　どうした。考え事か？」
「えっ……？　あ、いえ。すみません。え、えっと……何の話ですか？」
「あっ！　胸のおっきなお姉ちゃん！　その赤い目、お姉ちゃん紅魔族のひとなんだ！　かっこいい！　ね、わたしにもお名前教えて!!」
「え、えっ、あっ、その……わ、わが……わが名は……」
「ダメだぞーヨハネス、迷惑かけちゃ。おとなしくして。ほら、ちゃんとご飯食べて」
カズマがスプーンを口に放り込んで、もぐもぐ。食べさせて静かにさせる。まるで母親が娘をあやしてるみたいだ。
あんなに庇護欲をそそられてるのも無理はない。満たされたような顔しやがって。
「ところで、この後の予定はどうしましょう。ゆんゆんのパーティーは狩りに出るようですが」
「俺たちは……今日のところは待機だな。アクアを連れて街の外に出るわけにもいかないし、この子を置いてけないし」
「そうだな。買い出しがあれば、私とめぐみんで行くことにしよう。今日は冒険者稼業は休みだな」
「……やむを得ませんね。ではダクネス、後で街の外まで出かけるのに付き合ってください。こんな狭い部屋に引きこもっていては一日一爆裂がこなせません」
「こんなときでも日課は欠かさないのなお前。迷惑かからないところでやれよ？」
わいわいと今日の予定を立て始めたカズマのパーティ。
楽しそうだなあ、とその光景を眺めながら食事を進めていると、腕をつんつん突かれる。

ゆんゆんがかつてないほど神妙な顔で、こっそりと耳を近づけるようジェスチャーしてた。
「ゆんゆん、どうした？」
「あ、あのね……あとで外に出たら聞いてほしいことがあるの。いいかな？」

第十三話

「”ライト・オブ・セイバー”ーーっ!!」
魔法に打ち倒されたモンスターは、魔法の光剣に当てられ、過ぎ去った後には炭になって足をひくひく動かしている。
手の周囲で幾重にも重なった黄色の魔法陣が収縮して、役目を終えて消滅した。魔法発動のあとには、ゆんゆんと俺。そして消し炭となり、かろうじて生きているモンスターしか残らなかった。
「やっぱ凄いな。あれだけのモンスターを一気に倒すなんて！」
「ごめんね。パーティーメンバーでも、最後に倒さないとあんまり経験値は入らないんだけど……はやくアークウィザードになってもらって、一緒に冒険したいなって、すごく張り切っちゃった……」
「う、うん。更新するのが楽しみだな！　……といっても、まずはこの街を出ないといけないんだけどさ。ギルドカードの更新もできないし……よっと」
ダガーで一通り止めを刺したあと、気恥ずかしくなってギルドカードに視線を落とした。
レベルは相変わらず変わっていない。でも、この強い敵をバッタバッタ倒していくゆんゆんのおかげで、レベルは上がっているはずだ。かなりの数トドメを刺した。いくつになっているだろう。もうアークウィザードになれるくらいレベルは上がっただろうか。
「そろそろ街にもどろっか。えへへっ、お腹も空いちゃったね」
「そうだな。ところでカズマのパーティーは大丈夫かな」
「うん。連れてきちゃったのわたしだもんね。ううっ、まさかこんなことになるなんて、みんなにいっぱい迷惑かけちゃったよね……」
「いや、ゆんゆんのせいじゃないって。悪いのは毒をばらまいたやつだから！　そんな落ち込まなくてもいいって！」
体の周囲に黒いオーラが纏わり付いた。
思ったよりも、アルカンレティアまで連れてきてしまったことを気にしているらしい。こんなことになるなんて想定できるはずがないのだから、ゆんゆんに非はないのに……

なんとか励ましながら、そのまま何事もなく徒歩で街まで戻った。

水の都アルカンレティア。

最近起きた騒ぎもなかったかのように、すっかり元の様相を取り戻していた。

アクシズ教の信者がほとんどを占めるこの街で、ご神体のアクアが舞い降りたというのは大層なニュースであるはず。魔王軍襲来の可能性だってある。

それにもかかわらず、街は来た日と同じ、日常に戻っていた。

アクシズ教徒には「アクア様はお疲れだ。安心して過ごしていただけるよう、普段通り過ごすように」というお触れを出しているらしい。だが……こうも普段通りにできるものだろうか。アクシズ教徒ならできそうだから怖い。

そして今日も歩いていると普段通り、おばちゃんが大きなカゴを持って近づいてきた。

「あら、お若いカップルさん。アルカンレティアへようこそ!!」

「へぇっ!? か、かか、かかかっ、カップルだなんて、そそ、そんなっ……」

「パーティーですから! 冒険者です俺たち!!」

「あーらやだ。すっかり赤くなっちゃって、若いっていいわねぇ〜!

それはそうと、長旅大変だったでしょう。これね、アクシズ教団の作ってる洗剤なんだけどね」

「あの。俺たち、この街に滞在してるアクア様の知り合いなんです!」

「ええっ!? あら、あらあらまあまあ! そういえば従者の方がいるとか。おばさん、お邪魔しちゃったみたいでごめんなさいね! お勤めご苦労さまね!」

そのアクシズ教徒のおばちゃんをきっかけに、しつこかった勧誘はピタリと止まった。

ごく普通に挨拶を交わしたり、すれちがうだけ。店は普通に営業しているし、勧誘してきたあの大男も、ちょっと可愛い子も、おじさんも、挨拶はしてくるけれど全く声をかけてこない。まるでアルカンレ

ティアが普通の街に戻ったみたいだった。
どうやら、この街でアクアの知り合いであることは、大いに役立つらしい。
カズマのパーティーとは別行動になってしまったので、二人でちょうど見かけた店で食事をとることにした。観光地というだけあって割高だが、出てきた食事は、それはもう豪華なものだった。
テーブル席で向かい合って舌鼓を打つ。夢中にいっぱい食べるゆんゆんもかわいい。
「んっ、この藍海老の天丼いけるな。ゆんゆん、そっちの紅海老と一本交換しないか？」
「うんっ!!　もちろん！　……ねえ、ショウくん。ほんとにこの街に魔王軍がきてると思う？」
「そうだったら大変なことだよな。アクアはいつでも出られるように教会に釘付けになってるし……カズマのパーティーも、あんまり自由に動けなくなっちゃったし」
「魔王軍の目的は何なのかな。街を滅ぼすこと？」
いつの間にか箸を止めたゆんゆん。深く考え込んで、じっと丼の中を見つめていた。
どうしたんだろう。もらった海老天をもぐもぐ噛みしめる。
「そうだろうなあ。今は最高司祭の人は留守だっていうし、アクアがいなかったら、街中にばらまかれた毒でやばかっただろうなあ」
「そう……だよね。わたしたちがくるの、魔王軍の人はきっと考えてなかったはずだよね」
「どうかしたのか。何か、思いついたことでもあるのか？」
「うん。いま、あんまり良くないことを思いついちゃって……あ、あのね。この考えがあってるかどうか、ショウくんも一緒に考えてくれないかな？」
と、囁くように前置きをした。
何か思いついたらしい。でも、全く自信はないのだろう。手元はふるふる震えて、眉もしゅんと下がっていた。そんなゆんゆんの手に、手を重ねる。

「へっ!?　しょ、ショウくん!?」
「いいから話してくれ。いつも役に立てないんだから、こういうとき役に立たないとな」
「う、うん。あの……えっと、て、手を離してくれないと……うぅぅ」
熱した鍋に触れた後のごとく、超反射的に手をビュッと引っ込めた。
二人の頭から煙があがり、いよいよ周囲の街の人の視線が生暖かくなってきたのを感じた。
「そ、そそそ、それで。なんだって？」
「う……うん。えっとね、もしわたしが魔王軍だったらって考えてみたの……わたしだったら、妨害した人が誰かなって、まず探すと思うの」
「街にはアクシズ教団のプリーストの人がいるだろ」
「アークプリーストの人がいればいいんだけどね。でもプリーストの人たちだけじゃ、とても浄化は難しかったと思うから……最高責任者のゼスタさんっていう人がいないところを狙われたんだと思うの」
「確かに。前にも話してたけど、あからさまに怪しいタイミングだったし」
「それでね！　えっと、街にはアクシズ教の人が浄化を手伝ってっていう噂が流れたよね！　だ、だからね、魔王軍なら、どんな人なのかを確かめたいんじゃないかな……って、思うの」
「街にまだ、魔王軍の人が隠れてるってことだろ。たしかに人に化けられるならまだ逃げてないかもしれないけど……」
「いると思う。じつは、この人じゃないかなって疑ってる人がいるの」
核心に触れるべく一呼吸おいて、ごくりと唾を飲んだ。
「毒が撒かれた日の夜に、小さな子が運ばれてきたよね。今、カズマさんのパーティーと一緒にいる女の子」
ゆんゆんは真剣そのもので、冗談で言ってるわけではないらしい。
まさか。
そんなことがあるものだろうか。
でも、確かに何だか変な気もする。

続いて理由も説明してくれた。昼に浄化を終えた致死性の毒を飲んでしまった割に、教会に来たのは深夜。連れてきた人は行方不明。
言われてみれば、怪しい。
確かに超怪しい。
「……あっ、えっと、あの、かなり突拍子もない話だったよね！　ご、ごめんね！　困らせるようなこと言ったよね!!　わ、忘れていいから!!」
「確かにそんな気がする。ゆんゆん！　これ、カズマ達にも教えておいたほうがいいと思うんだけど」
「で、でも……証拠もないし……間違ってたら……」
「知ってるのと知ってないのじゃ、違うと思う。ぜったい、カズマ達にも相談したほうがいいって」
「……そ、そうだね!!　うんっ！」
そうと決まれば。
二人で急いで飯をかっこんで、カウンターにお金を叩きつけて店を飛び出した。

「会えない？」
「申し訳ありませんが、ここは誰も通すなと言われておりますので……」
「な、なんでですか？　今朝は普通に通ってもよかったのに！」
「色々な理由がありまして……」
入り口のプリーストの人は、困ったように頭を掻いてみせた。
「何かあったんですか？」
「はい。今夜、熱心なアクシズ教徒の強い要望で、ささやかながら女神降臨祭が執り行われることになりましてな。アクア様は準備にとりかかられております」
「えっ？　そんなの聞いてないですけど……」
「はい。今朝お触れが出まして。それまでは、教会に勤める者以外は通すなと言付かっておりますので……その」
「で、では、呼んでいただけるだけでもいいんです。アクアさまとはい

いません。カズマさんか、めぐみんか、それかダクネスさんを呼ぶことはできませんか？」
「それがですね……お二方とも、今はお出かけになっておられます。なんでもこの前運ばれてきた子供の姿が見えなくなったとかで」
ゆんゆんと顔を見合わせた。
子供がいなくなった？　ううむ……何か起きたのだろうか。けどとにかく、今は誰もいないというわけか。
「わ、わかりました……あの、ありがとうございます」
「いえ。お力になれず申し訳ない。戻られたときに、あなた方がこられたことを伝えておきますので」
親切そうなアクシズ教プリーストの人にお礼を言って、見送られながら教会から離れた。
これからどうしよう。
まさか教会に入れなくなってしまうとは。
近くのベンチに隣り合って腰掛けた。水の流れていない水路が、街の荒廃を予期させた。
調査が終わればすぐにでも水門も開放されるらしい。
しかし嫌な雰囲気が漂っているのも確かに感じた。
街の人も平気に振舞っているように見えるけれど、ちらりと水路を見てはため息を吐く人もいる。なんとなく、元気がないようにも見えた。めぐみんなら、これでちょうどいいくらいです、と言いそうだが。
「ショウくん……これからどうしようか」
「とりあえず街を探してみようか。いや、夕方まで待ってた方がいいのか……？」
「下手に探し回っても見つからないかも……あ、あのね。なら聞きこみとかしてみない、かな？」
「カズマ達を探すのか？」
「ううん。そうじゃなくって……その。あの子供のこととか、あとは不審なものがなかったかとか……そういう感じで……」
「うん。どうせ何もやることないし、行ってみようぜ。夜になる前に戻ってくればいいしな！」

「う、うん!!　じゃ、じゃあ急いで行かないとね！　ついてきて！」
元気よく立ち上がったまま手を引かれ、転げそうになりながら、いまいちど街に繰り出した。
それからしばらくゆんゆんと二人で色々な人から聞き込みを続けた。
勢いに反して、芳しい成果はあがらなかった。
そもそも白髪の子供は、この地域では珍しいらしい。
だからすぐに見たことある人が見つかると思った。しかしそんな子供はそもそも誰も知らず、見かけたことすらないという。かなり広い地区を探したのに。
門番ですら見ていないというので、ますます俺たちの疑念は深まった。
容姿だってよくて、超特徴的な白髪で、血の滲んだ包帯を巻いたような子を見逃すものだろうか。
また、事件が起きてから不審なものがなかったかという質問に関しては、こちらはアルカンレティアの自警団が聞いて回った後らしく、特に新しい情報があるわけでもなかった。
「うう……なかなかうまくいかないね……」
「聞き込みって初めてやったけど、大変なんだな。あとはこのあたりの人くらいか」
山なりに作られた街の性質上、坂を登らなければならない。
街は綺麗だけど移動も一苦労である。
階段を登りきると、大きな岩壁が立ちはだかった。その岸壁には女神アクアの像が設置されており、裏側から水が流れ出ている。この像は詐欺だな、と呆れ笑った。
ちょうどそのあたりで一休みしている、赤いアフロの人と、踊り子のような服装をした、アクシズ教徒らしき人に話を聞いてみることにした。
「えっ？　ここって毒撒かれた事件があった場所なんですか？」
「ああ。知らなかったのかい嬢ちゃん。大変だったらしいぜぇ。なんせここはアクア様の加護を受けた大切な水源の一つだからなぁ」

「あ、あのっ。わたしたち、調べ物をしてて……このあたりで昨日、何か変なものを見かけたりしませんでしたか？」
「そんなの見かけてたらとっくに通報してるわよ。何せ、アルカンレティア、ひいてはアクシズ教団の一大事だもの！」
　それもそうだ。
　アクシズ教の人が事件の現場を目撃してたなら、多少怪しいだけでも事件が起きた時点で全力で通報しているはず。ゆんゆんがしゅんと俯いた。時間的には、ここが最後の調査場所になってしまうだろう。がっかりするのも無理はない。
「あの。じゃあ……このあたりで白い髪の子供を見かけませんでしたか？」
「ああ、それなら見かけたぜ。俺たちが旅のプリーストをアクシズ教に勧誘してるときに、そのツレが珍しい髪色だったんでよく覚えてるぜ」
　ゆんゆんと目が合った。そして唾を飛ばす勢いで、その話に食いついた。
「そ、そのプリーストの人、もしかしてメイスを持ってませんでしたか？」
「ええ。ムカつくけどすっごい美人だったので覚えてるわ。あのチャーミングな泣きぼくろ、なかなか忘れられそうにないわ。アクシズ教の人かって聞いたんだけど、誤魔化されて逃げられちゃったわよ」
「んっ、そうだったか？　女の子がそこの噴水で遊んでたのを見て『そこはアクシズ教団の神聖な場所だから、だめですよ』って注意してたから、俺あてっきりアクシズ教徒のプリースト様かと……」
「そ、それっ。いつごろの話ですかっ!?」
「毒騒ぎの前の日の、日が落ちたくらいのことだったよね？」
「ああ。なあ、そのプリーストの姉ちゃんがどうかしたのか？」
「いえっ。貴重な情報ありがとうございましたっ！」
「気にしないで。同じアクシズ教徒でしょう！　困った時はお互い様。特にアクア様が降臨なされている今こそ、助け合って生きていか

ないとね！」
「またな、紅魔族の嬢ちゃんと、兄ちゃん。今日の降臨祭に来るだろ？
そこでまた会おうぜ！」
ありがとうございました、と二人で頭を下げて立ち去ってから、建物の陰で話し合う。

「ショウくん！　やっと、やっと目撃者見つけたね！」
「ただ遊んでただけかもしらないから証拠にはならないけど……あ。でも、あそこって毒が撒かれた場所なんだろ？」
「うん。毒騒ぎの直前に、あの子その場所にいたんだ……」
「一緒にいたプリーストの人が、あの子を預けたあといなくなっちゃったっていうのも怪しすぎる……」
「もしかして。昼に話していたみたいに、モンスターが人に化けてる……の？」
カズマに懐いた幼女の姿が、真っ先に脳裏を掠めた。
モンスターが化けてる説が正しければ、まずい。
「カズマ達に知らせに行こう!!」
「う、うん!!」

第十四話

「アクアさまーっ!!」
「女神さま、アクアさまっ!!」
「「アクア！　アクア！　アクア!!」」
ゆんゆんの顔が、いよいよ引きつったまま、固まりそうだ。
つい数時間前まで閑静としていた教会前の広場が、十秒としないうちに、人で溢れかえるさまを見れば、誰でもこうなるだろう。たぶん俺も同じ表情をしてるはずだ。
話を聞くところによると、どうもつい先ほどお触れが出たらしい。
ちょうどこの時間から教会前で待つことが許可されたとか。
「つい先ほどって……ええええ。それじゃあ、一瞬で飛んできたんですか？」
「ああ。みんな、隠しててもアクア様の御姿を一目見たいと願っているからな！」
信者の一人がにこやかに言い放った。笑顔が太陽以上に眩しすぎて直視できない。
つまり、このアクシズ教徒たちは〝テレポート〟の魔法を使ったかのような速度で、聞きつけた順にこの広場に駆けつけたことになるわけだ。
うん、ちょっと信じられない。半日聞き込みをしててわかったけど、この街そんなに狭くないはずなんだけど。
「……ど、どうしよう。あっ、あれカズマさんたちじゃ!?」
「ほんとだ。おーい、カズマ!!　カズマぁーーーっ!!」
ゆんゆんと一緒に手を振って、腹の底から大きく手を振り上げる。
だが、敬虔なアクシズ教徒たちの熱気に、姿も音も阻まれて何も届かない。全くこちらに気づくことなく、めぐみん、ダクネス、そしてカズマに背負われた問題のヨハネスは、普通に正門を通って中に入っていった。
だ、だめだ聞こえてないのか。そうだ門番の人に開けてもらおう！
慌てて追いかけようと、アクシズ教徒の集団に突っ込むが。

「ちょっとあなた！　割り込みはダメよ！」
「いくら熱心なアクシズ教徒でも、順番は守りなさい。でないと、とてもこれから降臨されるアクア様に顔向けができないわよ！」
と、一糸乱れぬ動きで振り返ったアクシズ教徒の皆さん。
総じて視線を浴びては、「あ、はい……あの、すみません。横入りするもりはなかったんです」と、すごすご引きさがるしかなかった。ゆんゆんはずぅん、と落ち込んだ。
どうやら、正面から入ることは不可能になってしまったらしい。タイミング悪すぎじゃないか……。
「ど、どうしよう。これじゃあ、とてもカズマさんやめぐみんに伝えられないよ……い、一刻もはやく伝えないと、危ないかもしれないのにっ……どうしよう、どうしようっ!?」
「とりあえず裏口に回ろう。ここからじゃ無理だ。向こう側にも教団の人はいるだろ！」
「う、うん。そうだね。正面からじゃ、だめそうだもんね」
こそこそと、どんどん集まってくるアクシズ教徒の人たちをよそにぐるりと回りこむ。
広場は、人生の中で見たどんなお祭りよりも高揚しており、騒ぎはひどく大きなものとなっていた。自分たちの信仰する女神様が現れたというのは、それほどのニュースなのだろう。神様に直接祈る機会なんて、俺とカズマの過ごしてた世界じゃ生きていても決して訪れないのだから、無理もないなと思った。少し離れた路地でも、すぐ隣にいるかのような声量で聞こえてくるのは、ちょっと恐怖すら感じたが。
そして教会の裏手は、表通りとは対照的に閑散としていた。
だがさすがに信仰している女神が滞在しているというだけあって、二人の教団員が警備に勤めている。建物の陰から様子を伺ってみたが、隙がない。
ひとまずカズマ達のところに行こうとするが、裏口の前で道を阻まれた。
「あ、あのっ。すみません。わたしたち……」

「あーダメダメ。君たち、いくら熱心なアクシズ教徒といってもここは立ち入り禁止だよ」
「あの違うんです。俺たちはカズマのパーティーに……」
「カズマ？　そんなプリーストはいないよ。いいから、正面のほうに行って。ほら、行きなさい!!」
　裏手の人は、どうやらカズマ達の名前を知らないらしい。話も聞かずに追い出されてしまった。
　取りつく島もないとはこのことである。
　止むを得ずすごすごと引き下がってきた。正面のアクシズ教団の人たちの熱狂が、どこかもの哀しく聞こえる。
「こ、これじゃあとても伝えられないよ……ど、どうしよう」
　ゆんゆんが慌てた。
　確かに、もしかすると一刻を争う事態かもしれない。もし一連の魔王軍騒ぎがアルカンレティアを狙ったものなら、街の人が一箇所に集まっている今に何かが起きる可能性が高い。
　正直、俺もゆんゆんも自信があるわけじゃない。だから何としても会って相談したいのに。
「……なあ。ゆんゆん、紅魔の里にはアークウィザードになるための学校があるんだよな。こういう時に使える便利な魔法、知らないか？」
「えっ？　な、なくはないけど。ううっ……ごめんなさい。わたしのは、モンスターと戦うための魔法だから……」
「そうじゃなくて。今俺が取れるスキルの中から、何かいいものはないか？」
「……っ!!　ちょ、ちょっと待って！」
　はっと気づいたように顔を上げた。
　どうやら心当たりがあるらしい。冒険者カードを渡すと、読めない異世界文字スキルの中から一つを探し出し、選択してみせた。
　だけれども、ふと気づいたように手が止まる。冒険者カードを返してくれなかった。
「……ショウくん、待って。スキルっていうのはね、一度とったらもう

二度と変えられないの。その人の一生に関わる……」
「いいから!! ああ、もう。これだな、このスキルなんだな?!」
「えっ!? そ、そうだけど……ああっ!!」
制止を振り切って、ギルドカードを指で軽くタップした。
スキル欄に書かれた文字が、燃えるようにゴウッと光り輝いた。その熱気は指先から全身に燃え広がり、けれど熱くはない。体内の遺伝子が根本から書き換えられていく。時間にして、1秒もかかっていない。けれど、決定的に何かが変わった。
感じることができた。
これが魔力。ウィザードになってスキルを得て、初めて力の流れを感じた。
「あわわ……スキルの説明からしようと思ったのにっ。なんで押しちゃうのショウくんっ!?」
「だって! どうみても、このままじゃあの中に入れないだろ! それで、これなんのスキルなんだ!?」
「ああっもう! せっかく貯めたスキルポイントだったのに、内容も知らないで取っちゃうなんて……上級魔法、一つとれなくなっちゃったんだからね!」
「うぐっ」
ゆんゆんが恨みがましそうに見てきたが、仕方ないと言わんばかりにため息を吐いて。
でもしっかりとスキルの説明はしてくれた。
取得したのは人の目を欺く魔法で、光を屈折させるらしい。そのおかげで、魔法の効果範囲内にいる人が見えなくなるのだとか。
「平たく言えば、透明人間になる魔法ってことか。ごくっ……」
「……ショウくんはもちろんわかってると思うけど。近づいたらわかっちゃうから女湯とかでは使えないからね?」
「う、うん。なんで突然そんな話を?」
「紅魔族でも、突然消えるのがかっこいいからってこの魔法をとる人は多いんだ。でもたまに、この魔法をとったからって覗きをする男の子もいて……みんな分かってるから、ぜったい捕まるみたいだけど」

「そ、そんなことしないって。な？　分かってるって！」
どこの世界でも、男の考えることは一緒らしい。
ちょっと膨れたゆんゆんをなだめすかす。
「と、ところで、もう一度確認しよう。カズマ達はこの教会の中にいて、俺たちは聞き込みの結果を伝えにいく。ゆんゆんは、サポートをお願いする。それでいいか？」
「うん。わたしに一つ考えがあるの。わたしが魔法を使って引きつけるから、プリーストの人たちがよそ見している隙に、あの扉を通ってくの。どうかな？」
「そのへん全部任せる。けど変な感じだな……初めて覚えたはずなのに使い方が分かるぞ」
「うん。魔力は大丈夫だから、さっそく使ってみて！」
ゆんゆんに教えてもらった通りに魔法を唱えると、何かが体から抜ける感覚とともに、足元で白い魔法陣が輝いた。
いつも見ている”ライト・オブ・セイバー”に比べれば、ひどく弱々しいもので。
けれど、これがこの世界に来て、自力で初めて発動した魔法。
本当に、こんな自分でも、魔法が使えるんだ。
拳を握りしめて感動した。すると一緒に魔法陣の中にいるゆんゆんが、目を閉じてぶつぶつと何かを唱えはじめる。何か状況を打破してくれる魔法を唱えているのだろう。
そのまま、少し待っていると、異変が起こった。
「……あっ、おい。なんだアレは!?」
見張りの一人が、そんな声を上げたのでびっくりした。
バレたのかとも思ったが、プリーストの人の指先は全く別方向を指していた。釣られてもう一人の見張りが、その先の道が奇妙な灰色に蠢いているのを目にした。
何だアレ……ね、ネズミ?!
ゆうに百を超える有りえないほどの大軍のネズミが、断末魔のような声を上げながら道端を駆け回っている。
「な、何だ。アレは!?」

「どこから湧き出してきてるんだ、くそっ！」
まるで地震の前に逃げ出すように慌てて駆けていく世紀末のような様相に、見張りの二人は立ち竦んでいるようだった。
えっ、扉の前にい続けられたら困るんですけど。
ゆんゆんもそっちに行ってくれると思っていたらしく、ええっと、ええっと、と戸惑っていた。
あっ……この手があった!!
動かない二人に迎えって、俺は咄嗟に叫んだ。
「あーーーー!!! アクシズ教団のプリーストさーーん!! エリス教徒が、あっちに逃げて行きましたよーーー!!!」
「な、何だって!?」
「邪悪なエリス教徒め!! これもやつらの仕業か。アクア様の降臨祭を知って！ くそっどこにいった!!?」
〝エリス教〟という単語を耳にした途端、先ほどの足すぼみは何だったのか。プリーストは血相を変えてネズミの大軍のほうへ突っ込んでいった。
扉から離れたのを確認したところで、隣にグイッと手を引かれた。
「ショウくん。魔力もいつまでも持つわけじゃないから、行かなきゃ!!」
「お、おう。あのネズミ、ゆんゆんだよな。こんな魔法も使えるのか！」
「モンスターをおびき寄せる魔法だったんだけど……いまのでうまくいったみたい！ さ、術者のショウくんが移動したら魔法陣も移動するから。行くよっ！」
言われた通りに飛び出すと、確かに魔法陣が移動する。
見張りの二人があっけにとられ、叫んでいるうちに、こっそり扉を開けて、中に滑り込んだ。
「おい、こりゃ魔法の幻覚だぞ!! どうなってんだ！」
「何だって!? やはり、エリス教徒の悪戯か！ くそっ、許さんぞ暗黒神の手先め!!」
まだ見ぬ女神エリス様。

悪評を広めてしまい本当にすみません。ほんとすみません。
あとで教会で祈りを捧げますので、どうかお許しください。
願わくば、どうか寛大な女神様でありますように。
気づかれなかったようだ。あたりに人がいないことを確かめて、まずは二人でほっと一息。
人の気配もない。落ち着いてくると新しい魔法の凄さに感動した。あれが幻覚だなんて、信じられない！　それにほんとに見えてないみたいだった。
「すごいな。あの二人、気を引かれてたとはいえ、堂々と移動してるのにぜんぜん気づかなかったぞ！」
「えへへ、役に立てたならよかったな。でもあの魔法は、臭いに敏感なモンスターにはぜんぜん効かないっていう欠点もあってね」
「そこに誰かいるのか⁉」
ビクンッと、奥の方から聞こえてきた声に、二人揃って震えた。
やばい。まだ廊下で、隠れる場所がっ……⁉
奥から女性プリーストがヌッと顔を出し、声が漏れかけ、ガバッとゆんゆんの手で口を塞がれた。そ、そうだった、俺の発動した魔法のおかげで見えていないんだった。
「……気のせいか？　んっ、扉が開けっぱなしだな」
や、やばい。
急いで来たせいで、閉めたつもりの扉が、まだ少し開けっぱなしになってた！
プリーストの人は少しづつ歩み寄ってくる。魔法陣の中に足を踏み入れたら、きっと見えてしまうのだろう。ゆ、ゆんゆん。何とかならないか⁉　と助けを求める……泣きそうな顔で首を振ってた。
それは手段がないことを顕著に示しているのだとわかって、さぁっと青ざめる。こんな魔法使って侵入しているとこ見つかったら、逮捕だ。犯罪者だよ俺たち。
プリーストはどんどん近づいてくる。
そして、とうとう魔法陣に爪先を踏み入れ、ブゥン、と淡く輝いた。
ああ終わった。

「おい!!　持ち場を離れるんじゃない。降臨祭の準備はどうした！」
「あ、すみません！　おーい、見張り番。扉閉めとけよ!!　まったく、アクア様がおられるというのに、表の者は信仰心が足りなすぎだな……」
踏み入れかけていた爪先がくるり、と反転する。
結界は鼻先を擦り、半分ほど入り込んでいた。しかし反転して、とん、とん。離れる。途中まで来かけていたプリーストの人が見えなくなってから、へなへな……力が抜けた。
「い、行ったみたい……よかったぁ。もうだめかと思ったよぉ……」
「き、緊張したぁ……こんな魔法使ってるとこ見つかったら、いくら何でもとっ捕まるしな……今のうちにカズマを探しに行こう……」
「たぶん、こっちだよ。まだまだ大丈夫だと思うけど魔力が尽きないうちに行こっ！」
魔法を発動させっぱなしのまま、今度はこっそり扉を閉じてから、なるべく離れないように移動を開始する。
その直後。
閉じたはずの扉がもう一度開いて「一体なんだったんだ」と、見張り番の人が内側を覗いてきてた。しかし何事もなく、そのまま、扉を閉めて引き返してくれた。
魔法のギリギリ有効範囲から外れていたらしい。
あ、危ない……
しかし中にさえ入ってしまえば、こっちのものだ。
ゆんゆんと顔を合わせ、一緒に頷いて、俺たちはさらに奥に進んだ。

第十五話

入り口の他に見張りは誰もいなかったが、油断はできない。
不法侵入の手前、透明化の魔法はかけっぱなしである。会ったことのあるアクシズ教団の人か、カズマのパーティーが見つかれば、近づいてこっそり話しかければいい。必要なのは、あのボロボロの少女や、知らないアクシズ教団の人に見つからないようにすることだ。
もし心配通り、あのヨハネスが魔王軍的な存在なら、教会が大変なことになりかねない。
「このあたり、見たことある。アクアもこの辺りにいるかな？」
「ううん。でも、奥にけっこう長い廊下が続いてるかも。それに階段もあるから……下から探そう。昨日会ったプリーストの人が見つかればいいんだけど」
「あ。待って、なんか人の声が聞こえないか？」
「本当だね。あそこからみたい。昨日お世話になったプリーストの人が見つかるかも……どうかな、見える？」
俺はひょこっ、とカーテンの陰から顔をのぞかせる。
とことこと後ろからついてきたゆんゆんも興味があるのか、背中に手を当てて、軽く体重を乗せてきた。
「何か見える？　誰がいるの？」
「いた。みんないる！　けど……まずいな。あの子もいるぞ。うわ、ずっとカズマの膝の上に座ってるのか？」
そこは広めの部屋で、ちょうど壁にかかったカーテンの裏側から覗いているような形だ。
部屋にはカズマのパーティーと、アクシズ教団のプリースト。そして白髪のボロボロ少女……ダメだ。これじゃあ出ていけない。
「どれ？　あ……あわわっ、め、めぐみん!?」
「……うわぁ」
あわわわわ、と震えながら、死んだような瞳でぶつぶつと何事かを呟き続けるめぐみんに釘付けになっていた。
椅子にロープでグルグル巻きにされて、動けなくなってる。

いったい何があったのか。俺たちがいない間に。まあきっとろくでもないことだろう。
「ああ、とんでもないことになってしまいました……ど、どうしましょうダクネス。今からでも、私たちだけでも逃げませんか？」
「それは難しいだろうな。見張りは厳重になっているようだし、どちらにせよこの状況で出ていけば大変な騒ぎになってしまうだろう」
ダクネスが宥めているが、縛られていることに突っ込む様子はない。一体何があればああなるのか想像もつかなかった。爆裂魔法を教会に打ち込もうとでもしたのだろうか。
アクアは一番奥に座り、優雅にワイングラスを呷っていた。それをカズマがたしなめる。
「おい飲みすぎだぞアクア。これから人前に出るのに、顔真っ赤じゃないか」
「いいのよ。私を誰だと思ってるの？　こんなお酒くらい、その気になればチョチョイと浄化できるわ！」
「それ酒飲んでる意味がないんじゃ……おおっ、よしよし。どうしたヨハネスー」
「カズマお兄ちゃん。それちょうだい！　のんでみたい！」
「これはダメだぞー。小っちゃいうちからお酒を飲んだら、このアークプリーストのお姉ちゃんみたいにパーになっちゃうからな」
「ちょっとそれどういう意味よ！　って、あああああ!!　カズマさんそれ私のグラス!!　かーえーしーてー!!」
アクアのための祭りを前に、休憩しているらしい。
よく見ると全員が普段の服装ではなく、正装らしき服を着ている……異世界だから本当に正装かわからないけど、めぐみん以外はみんなキリッとしてる。こんな時くらいあのローブ外せばいいのに。
アクアの机にだけ昨日見た異世界文字で書かれた葡萄酒のボトルがあり、カズマがグラスを奪い取って、女神様が素っ頓狂な悲鳴を上げた。いつもの調子のカズマのパーティーにちょっと安心だ。
さて、何とかカズマだけでも呼び出せないものだろうか。
……いや、いっそのこと、飛び出していったほうがいいかもしれな

い。この辺は顔見知りだから、もう捕まることもないし。内緒話は後ですればいいし。
ゆんゆんとアイコンタクトをとる。
……おや。
ゆんゆん？　ゆんゆーん。
ヨハネスを注視して、まったく動かなくなってしまっていた。何かあるのだろうか。
「返しなさいカズマ!!　それは、わたしの可愛い子達が持ってきてくれた大切なお酒なの!!　返せーーー!!」
「馬鹿！　飲むなとは言ってねえ。あとで飲めって言ってんだよ!!」
「だって、もう注いじゃったんだもの！　今更ボトルに戻すわけにもいかないでしょ!!　とらないでよ、ねえ、とらないで。私の楽しみとらないでよぉーーーー!!」
……出て行くタイミングじゃない。
カズマがグラスを取り上げているが、後ろのプリーストの人が止める様子はなかった。察するに、同じようなことが何度もあったのかもしれない。従者との戯れ程度に思っているようだ。でなきゃ止めるだろうし。
どうしよう。悩んでいると、ゆんゆんが、肩をつついてきた。しっ、と人差し指を顔の前に立てた。
何やら揉めている二人の間で、ヨハネスが視線だけで周囲を見渡していた。
キョロキョロ。何見てんだろ。
そして静かにカズマが遠ざけているグラスに手を伸ばす。
……!?
ヨハネスの指先から、ぽちゃん、と何かが落ちたのを、確かに見た。そして素知らぬふりをして手を引っ込めたところも。
カズマ達は相変わらず争い、プリーストの人も、めぐみんもダクネスも気づいていないみたいだった。思わず、ゆんゆんを見ると、同じく目撃したらしい。
「お、おいゆんゆん。見たか？」

「う……うん！　いまのって、もしかして……」
「おい、カズマ、ちょっと待て!!」
俺はカーテン裏から飛び出した！
「な、なんですかなあなたは!?　……おや？」
俺に、驚いたようなすべての視線が集中する。
全員が警戒するように、こちらに魔法を打つべく手のひらを向けてくる……しかし、目をきょとんと開いた。
姿を隠す魔法は既に解除してあるため、全員から見えている。カズマはグラスを空中に持ち上げた体制のまま、唾を飛ばして抗議した。
「おっ、ショウ!?　び、びっくりさせんな！　どうしたんだよ。ってか、どっから出てきた!?」
「ごめん今ゆんゆんと不法侵入の真っ最中！　てか、カズマ。今すぐそのグラスを離せ。そこの子供が、今何か入れたぞ！」
「はぁ!?　不法侵入って……どうしたんだよそんな慌てて」
「だから、言った通りだって。早くそこの子供から離れろってば!!」
「お前何言ってんだ。何か入れたって……ああっ、ちょアクアおまっ!?」
「とったあーーーーっ!!」
我が意を得たり、という風に無邪気に喜びながら。
誰もが油断したその瞬間にアクアが奪い取って、あろうことか、そのまま口をつけてしまう。
俺とゆんゆんは絶句した。
「あああっ!?　おまっ、何してんだよ！」
「んぐっ……ぐえっ!!　げほっ!!」
アクアが凄い勢いで咳き込みはじめたのを見て、血の気が引いた。
の、飲んでしまった!?
全員が事態を飲み込んだ瞬間、ヨハネスは底知れぬ黒い笑みを浮かべた。まるで悪戯を成功させた子供のような笑みに悪寒が過ぎった。
だが、しかし。
「な、なによこれ、マズっ。すっごいマズっ！」
「えっ？」

アクアがペッペと唾を吐き出したのを目にして、邪悪な笑みが、あまりに間抜けなキョトン顔に変わる。
「ちょっとカズマ!!　げほ、いくら飲ませたくないからって、一体何を入れたの!?」
「ちょ、俺は何もしてねえよ!?　人の話を聞けよ!!　いまそういう流れじゃなかっただろ!!」
「へっ？　何かあったっけ。カズマからグラスを取るのに夢中で聞いてなかったんですけど」
「……いや。アクア、お前何ともないのか？」
「何ともないわけないじゃない!!　ああっもう、この神聖なアクア様にいったい何飲ませたのよ。まだ舌がピリピリする……うぅ、〝ピュリフィケーション〟……」
自分の口に魔法をかけて、ようやく安心したようにアクアは息を吐いた。
かなり平然としている。残されたワイングラスは倒れ、テーブルクロスを汚した。それには葡萄の色だけではなく、得体の知れない艶やかな黒色が混ざり、浮かび上がっていた。
まるで水たまりに油をぶちまけ、虹色に濁っているさまのよう。明らかに不純物が入り混じっている。
「ゆんゆん。もう一度言ってください。今なんて？」
「そ、その子が、アクア様の飲んだグラスに何か入れてたって……!!」
「何ですって!?」
今度は、カズマに媚を売っていた少女に視線が集中した。
汗がダラダラと滝のように流れていた。カズマも思わず手放し、椅子を倒してあとずさる。
幼女は取り繕うように、みんなのほうを見て、最後に涙目で水をあおったアクアに視線が固まった。
「み、みんな？　どうしてわたしを見るの？　っていうか、お前なんで何ともないの?!　今けっこう本気でやったのに!!?」
未だゲホゲホ咳き込んで苦しそうなアクアを見て、そんなことを言った。

真っ黒だった。
誰もが理解したその瞬間、カズマが誰よりも早く手を向けて、叫んだ。
「〝バインド〟おっっ!!!」

「んぅーーっ、んっ!!」
「アクア様の従者の方。あなたがたの証言が正しいことは、ただいま、アクシズ教徒の証言から確認がとれました」
「ということは……この子供が、連日の騒ぎの主犯？」
「何ということだ！　この街を汚すモンスターめ!!　魔王軍の手先にちがいない！」
「しかも偉大なる女神アクア様に毒を飲ませるなど!!　大層お目にかけられ、寵愛を受けていたというのに、何ということか!!」
「神罰だ!!　そのモンスターに神罰を下せ!!」
「「神罰！　神罰!!　神罰!!!」」
「んーーっ!!!?」
アクシズ教団の視点に立ってみると、珍しく十分に理解できる対応だと思った。
なにせ自分たちの信仰する神様が、街が滅ぶかもしれない危機を前に自分たちを救いに天から降りてきてくれた。しかし、そんなところを、人間なら死ぬ量の毒を盛られて殺されかけたのだ。
……まあ、制止したのに、自分から飲んでたけれども。
しかし端から見れば、だ。
ロープで縛り上げた幼女を、大人がよってたかって糾弾している危ない図である。
事情を知らないエリス教徒がこの場に入って来れば、慌てて止めに入ることだろう。
「お、おい。さすがにこれはやりすぎじゃあ……」

「んー……!!!」
床に放り出されたヨハネスは罵倒に囲まれながら、弱々しい潤んだ瞳でカズマを見る。
まるで雨の中ダンボールから顔を覗かせる捨て犬のようだ。
ここしばらく膝に抱きかかえて可愛がっていたカズマだが、さすがに面と向かって止めることはできなそうだ。だが、やりすぎだと間に入ろうとしたところで、アクア達の会話を聞いてピタリと手を止めた。
「アクア様、本当に大丈夫ですか？　えとっ、毒が体に残ったりしませんか？」
「この私を誰だと思ってるのよ。水の女神様よ？　モンスターの出せる毒ごときで死ぬわけないじゃない。けど、ひどい目に遭ったわ……というかあたしが咳き込むほどの毒って、ヤバすぎるですけど。あいつ超ヤバいんですけど」
「具体的にはどのくらい毒性が強いんだ？」
「そうね。カズマが飲んだら、一秒と持たずに死後の世界でこの私に会えるくらいかしら。わたしは聖なる水の女神だから何てことなかったけど、常人なら臭いでコロリね」
「……」
「んーっ!!!」
死にかけていたと知ったカズマは、そっと背を向けた。
「とにかく、裏口からでも何でもいいから出せ!!　これ以上アクア様に近づけるな!!」
「申し訳ありませんっっっアクア様!!　私共が気付けなかったせいで、危険にさらしてしまい……」
「私たちの提供した葡萄酒でこのような事態になるとは、恩を仇で返すようなもの。いっそ死んでお詫びを……」
信者がアクアにひれ伏し、冷や汗を流しまくっていた。
命じれば腹でも切りそうな勢いだ。しかし当のアクアはケロッと、まるで気にしておらず。
「あーいいのよいいの。それより、あなたたちが無事でいてくれて本

当によかったわ。私はこんなことじゃあなた達の前から消えたりしないから、安心して！」
「おおっ、何というお慈悲……」
「偉大なるアクア様……お前ら、この恩を忘れるんじゃないぞ!!」
「もちろんです！　今すぐこの魔王軍の手先は、我々が始末いたします！　おい、まずはこいつを教会から叩き出すぞ！」
「「「「神罰！　神罰!!　神罰!!!」」」」
ズルズルと床を引き摺られ。
モンスター幼女はアクシズ教団の皆様の手によって部屋から連れていかれてしまった。とうとう観念したのか無抵抗だ。ジロリと部屋の人間を一瞥したが、引っ張られ、やがて部屋から見えなくなった。
「まったく、ひどい目にあったわ！　女神に毒を盛ろうなんて、ほんっと、あの幼女モンスターいい度胸してるわね!!」
「いや、警告されてたろ。お前が奪い取って飲まなかったらそんな目には遭わなかったからな」
「しかしよく気づいたな二人とも。私たちはほとんど疑っていなかったのだが……騎士として恥ずかしい」
俺たちを見たが、怪しいと気づいたのはゆんゆんである。
俺がゆんゆんを見ると、全員がゆんゆんを見た。
大勢に注目されて、恥ずかしそうに顔を真っ赤に「ち、違うよ！　これはみんなが一緒だったから……！」と言い訳し……やがて指をこすり合わせながら、ぽつりと恥ずかしそうに語る。
「いつからあの子供が怪しいと気づいていたんだ？　俺たちずっといたはずなのに、全く気付かなくってさ」
「うん。実は……最初に会った時から」
「えっ!?　そんな時から気づいてたのか。教えてくれりゃよかったのに」
「ごっごめんなさい！　そのときには、ちゃんとした確信はなくって」
「なぜ気付けたのですか？　確かに私も、最初は怪しいと思っていましたが……」
「えっと、あの子……ずっとひとりぼっちだって言ってたよね。でも

わたしよりずっとお喋りするの上手だし。あ、あとは、わたしと違ってあの子は知らない人にどんどん話しかけて、会話の輪に自然に入ってたし……ちゃんと相手の目を見て話しなさいって。めぐみんに怒られて、ようやく最近ちょっとだけできるようになったのに、あの子は最初からできてるみたいだったし」

「……」

「他の人のことをはっきり褒めれてたし。それに〝かっこいいお兄ちゃん〟なんて、わたし一生かかっても言えそうにないし……それから」

「ゆんゆん……」

「もういい……もういいです……私が悪かったですから」

帽子を深くかぶっためぐみんがそう言い、俺はぽんと肩を叩いて言葉を止めさせた。

当人は平然と首を傾げたけれど、さっきまで張り詰めていた部屋の空気は、同情の色で満ち溢れた。

ようやく場の雰囲気に気づいたゆんゆんが、おろおろし始め、涙目で「なんでそんな目でわたしを見るの!?」とめぐみんに縋った。カズマが、そんな空気を打ち破るために、わざと明るい声を出した。

「で、でもこれで、この街の毒騒ぎは解決したってことだよな!! 一件落着！」

「そのようですな。どうやらあの汚らわしいモンスターが元凶であれば、我々が責任を持って処分いたしますので」

「処分とは穏やかではないですね。まあ、あんな事件を起こしては当然と言えなくもないですが……」

「み、みんなちょっと待って!! わたしたちの聞き込みでは、まだもう一人、メイスを持ったプリーストが……」

それを口にした瞬間、地面が言葉を遮った。

まるで内側から突き上げられたみたいに振動した。

全員が一瞬体制を崩しかける。地震か。「うわわ」と、カズマが尻餅をつき、天井からパラパラと石片が落ちてきた。

揺れはすぐにおさまったが、凄まじく嫌な予感がした。

「な、なになにっ、何なのこの揺れ!?」
「おい、なんだ今の……」
「地震でしょうか。あの、そろそろロープを解いてくれると助かるのですが」
「……こんなタイミングで地震だと？　カズマ、何だか嫌な予感がするぞ……おおっ!?」
ダクネスの言葉の途中で再び縦揺れの地震。
断続的なものではなく、まるで巨人が足踏みをしているような、大きな揺れ方。
ばらばらばらっ、棚からアクシズ教の聖書が滑り落ちる。
次の瞬間、外のほうから「助けてくれぇ!!」と、悲鳴が聞こえてきた。
ダクネスと、解放されためぐみんが飛び出していった。
「お、おい待てダクネス！　ああっもう、ショウ俺たちも行くぞ！」
「分かった！　裏口のほうだな！」
「あっカズマ、待って!!　わかんない、何がどうなってるのよーっ!?」
一テンポ遅れて、俺とカズマ、ゆんゆんとアクア。そしてアクシズ教のプリーストの人と一緒に駆け出し、外へ。
裏口を抜けて外に出ると、連れて行った教団員、そして裏口を警護していたプリースト二人もぐったりと倒れていた。
打撲の跡が、服の上からでもはっきり残っており、プリーストのローブは大きく千切れている。
「どうしたんだ！　おい、何があった!?」
「う……うぅ」
「待ってダクネス。〝ヒール〟っ！　……これで話せるようになったでしょ！　ねえ、あのモンスターは？」
「あ、アクア様……申し訳ありません……に、逃げられ……」
「どこに逃げたか分かるか!?」
「う、上……水源のほうへ……」
「……私の可愛い子たちよ、倒れた子達を任せます」

既に介抱に入っていた信者の人たちだが「あ、アクア様は……？」と一人が不安げに見上げる。
「私はカズマとショウ達と一緒に上に向かいます。可愛い子達を傷つけたモンスター……完膚なきまでに、ボコボコにするわ。絶対許さないわ……!!」
「おおっ……何ということだ。アクア様自らがお出になられるとは……」
「私も付き添いたい……しかしっ、介抱せよというのがご神託。分かりました。ですが他に何名かを一緒に向かわせることをお許しください。この場はお任せください！」
「安心して。ぶっ倒したあとは、ちゃんと降臨祭に間に合うように戻るから！　……さっカズマ。あいつをボコりに行くわよ!!」
「……」
しかし、カズマは周囲の惨状を見て固まっていた。
普通のモンスターではこうはならない。まともに相手したモンスターといえば、アクセルのジャイアント・トードばかりで、それ以外の戦闘経験はカズマにはほとんどない。俺もないけど。
「なあアクア。これ、どのくらいヤバい相手なんだ？」
「へっ。そうね……私を苦しませるくらいの毒を持ってて、これだけの人数を一気に倒してるのよ？　相当ヤバいのは確かね。魔王軍の幹部って言われても頷けるくらいには」
「ちょっとお腹痛くなってきたから、あと頼むわ。先に部屋戻ってるな」
「ちょちょ、ちょっとカズマ!?　どこに行くの、アクシズ教団の危機なのよ!!?　行くのよ！　行かなきゃ私の可愛い子たちが危険な目に遭っちゃうんですけど。カズマーー!!」
「いやだって魔王軍の手先かもしれないって……いきなりハードル高すぎだろ」
「カズマカズマーー!!　見捨てないで、私の子たちを見捨てないでよぉーーーー!!」
アクアは慌てたが、それ以外のパーティーメンバーはあまりアクシ

ズ教団を助けることに乗り気ではないようだ。
縛られていためぐみん。恍惚とエリス教徒のペンダントを出しっぱなしにするダクネス。振り回されるカズマ。女神待遇のアクア。
……ろくなことがなかったにちがいない。
「あ、アクアさん！　わたし一緒に行くよ……!!　放っておけないもん！」
「あっ！　よく言ったわね、ゆんゆん!!　さすが私の敬虔なる……あれ？　なんか私への敬称変わってない？　ねえっ？」
「仕方ないですね。ゆんゆんが行くというなら、私も行かざるを得ません」
「わ、私も行くぞ。私はこの街が好きなのだ。滅びられては困る」
「カズマ、俺たちも行こう。諦めろ」
「……ったく。俺たちは初心者冒険者だぞ。分かったよ!!　解決して、さっさとアクセルに帰んぞお前ら!!」
ヤケクソ気味に叫んだカズマに同調し、全員が「おー!!!」と、思いっきり腕を上げて呼応した。

第十六話

全員が、あのモンスター少女を追いかけてアルカンレティアの頂上を目指して走っている。

街にはほとんど明かりが灯っていなかった。

女神が来るというお触れが出た今、ほとんどが教会前に集まっている。今も、まだ時間があるにもかかわらず、女神の登場を全員が待ち望んでいる。それにしたって、こんなに人がいないというのは。伊達にアクシズ教の総本山といえるだろう。人っ子一人見かけない。

「……まったく。けど、おかげで誰もいないのは助かるな。被害が出なくて済む！」

「くっそ。どこに行きやがった？」

「ここからは一本道です。頂上の階段があるだけですが……あっ。あれを見てください!!」

ぐねぐねと頂上に向けて伸びる階段を駆け上る人影。

ちょうど街の切れ目となる木造の門は、半開きになってキィキィと揺れている。

間違いない。この向こうに逃げたんだ。

「こっちには何があるんだ？」

「こちらは山頂の水源があるだけです。逃げられるような場所は、ここにはとても……」

「いいから行きますよ!!　嫌な予感がします！」

走りだす。階段を途中まで登ったあたりで、疲れた俺たちのペースはどんどん落ちていったが……。

『魔王軍襲撃警報！　魔王軍襲撃警報!!　現在、魔王軍と思われる敵影を確認。住民の皆さんは直ちにアクシズ教団の教会まで避難してください!!　繰り返しますーー』

ヘロヘロになりながら登っている途中、街のほうから切羽詰まった声色の放送が聞こえてきた。

……あんな騒ぎになってる場所が避難場所になってるのか。

一応エリス教徒の人もいるのに、アクシズ教以外の人も避難させて

いいのか……一体何が起こるのか想像もつかない。ただ無事を祈ることしかできなかった。
真っ先に頂上に到着したのはダクネス。ゆんゆん、めぐみん、カズマと俺、アクアとプリーストの皆様の順にたどり着いく。
そして、皆が一様に足を止める。
岩の広場の中央に、それは立っていた。
「ふふふ。よく来たな、馬鹿な冒険者ども。こんなところまで追って来るなんてなぁ！」
「馬鹿なのはそっちだ、もう逃げられないぞ。お前、魔王軍の手先だろ」
「愚かな人間どもよ！　追い詰められたのは貴様らだと知れ。教えてやろう！　我の正体をっ!!」
「おおっ！　なんか敵ながら超かっこいいです！」
手を広げて高らかにそう宣言する幼女を見て、めぐみんが興奮していた。あ、ゆんゆんもちょっと興奮してる。どうやら今の口上は紅魔族の琴線に触れたらしい。
しかしすぐに、そうも言ってられない状況に陥る。
「な、何ですかあれは!?」
少女の瞳が紅色に輝きだした。
紅魔族特有のものとは異なる、ひどく邪悪な赤色で。
広げた腕からは中心に紫色のオーラが湧き出し、指先からドロドロと、毒々しい液体が溢れ出す。
ぽちゃん、と岩に落ちた液体が蒸気をあげる。
直接落ちた岩の周囲が溶け出したのを見て、カズマと俺の異世界転生組は顔を見合わせた。
あいつは、絶対ヤバいと、お互いの意見が一致する。
そして、全身から分泌した紫色のローションのような物質に包まれる幼女。
グニャグニャと陰影すら変異する。小さな背丈から、大人のような体のシルエットへ変異し、粘液は体内に吸収される。
「……えっ」

「……はい？」
幼女の形は消え失せ、そのあとに出てきたのは、毒々しい異形の魔物……などではなく。
何の変哲もない男であった。
黒髪でムキムキの。どこにでもいそうな何の変哲もない成人男性。
「あれ……あのヨハネスは？　俺の膝の上で可愛らしく微笑んでくれた幼女はどこに行ったんですか？　なんだあのおっさん」
「カズマ！　あれは明らかにスライムです。スライムの上位種ともなると、捕食した対象に化けることができるのです！」
「ってことは何か!?　俺はあんなオッサンを幼女だと思って、ずっと抱きかかえてたってことか!!?」
「あっ、おいカズマしっかりしろ！　カズマーーー!?」
カズマが致命的なショックを受けて、ダクネスの胸の中にぶっ倒れた。
「な、何者ですかあなたは！　早く名乗りなさい！　っていうか名乗ってください！」
「……よかろう。フフッ、俺はデッドリー・ポイズン・スライムの変異種、名をハンスと言う……!!」
「”デッドリー・ポイズン・スライム”っ!?」
「なんだそりゃ。確かにやべー毒出せそうな名前だけど、スライム？　てっきり人に化けた悪魔か何かかと……」
「何を落ち着いているんだショウ!?　それに……そうか、思い出したぞ。ハンスといえば、八人の魔王軍幹部の一人ではないか!!」
「はぁっ!!?」
「な、なんだそりゃ!?　魔王軍はわかってたけど……か、幹部ううっ!!!?」
ショックから立ち直れないでいたカズマまで、素っ頓狂な声を上げた。
魔王軍はわかってたけど、幹部っ!?　出会うの早すぎないか！　この世界でまだ一年も過ごしてないのにっ!?

「馬鹿な、その存在は何十年も昔に滅ぼされたと聞いていたが……生きていたのかっ?!」
「そうなっているらしいな。とは言っても……魔王様の御力で、永き眠りから覚めたばかりでな。俺のことを知っているやつがいるとは。なかなか、勉強しているようだなぁ」
「あっ、そういえば紅魔の里でも習ったかも……そ、そうだった！　八人の魔王軍幹部の中にそんな人がいたって習ったような……！」
「おや。ゆんゆんは覚えていなかったのですか。私はもちろんちゃんと覚えていましたよ。習いました。ええもちろんですとも」
「張り合わんでいい！　いやそんな場合じゃねえ!!　ま、魔王軍幹部って……やべえ、俺たちの冒険はここで終わりだ……」
　異世界転生組が絶望している最中、ふぅ、と。
　幼女ヨハネス改め魔王軍幹部〝デッドリー・ポイズン・スライム〟のハンスが声を上げた。
「それにしても……よくも、まぁやってくれたな冒険者ども」
「うわやばいぞカズマ。なんかお前にお怒りみたいだぞ、あのオッサン」
「えっ俺何もしてねえよ!?　俺じゃねえ、悪いのはこいつだ!!」
「ちょっと！　なんで私を指差すの!?　してませんから。私今回ばかりは何にも悪いことしてませんから!!　むしろ被害者なんですけど!!」
「黙れえええぇ!!!　お前らのおかげで！この街をイカれたアクシズ教徒ごと滅ぼす計画が台無しだよ!!　何なんだお前らは！　水源もろとも汚染するように仕組んだ俺の自慢の致死毒を、一晩であっさり浄化しやがって!!　しかも街に出れば、アクシズ教団に入れだの、石鹸だの洗剤だの、もううんざりなんだよ!!　おい、そこのクソアクシズ教団ども。お前らには常識ってものがねぇのか!!　そんなんだから俺みてぇな奴が派遣されてくるんだ!!」
「……なんだかお怒りのようですね」
　そういえばこのオッサン見たことあるぞ、と後ろのアクシズ教団プリーストの方々がこそこそ囁いた。

……こいつらか！　お怒りの原因こいつらかよっ!!
全員の視線を集めたアクアは、気まずそうに視線を逸らして、口笛を吹き始めた。
「おいアクア、あいつを早いとこ浄化してくれ。お前の力で毒は浄化できるんだろ」
「そんな幹部クラスを浄化できる魔法、いきなり打てるわけないじゃない。ちょ、ちょっとカズマ!?　逃げないで!!　そこの……えっと、なんちゃらスライムのハンス!!　よくも私の可愛いアクシズ教徒たちを傷つけようとしてくれたわね!!　絶対に許さないんだから!!」
「ふざけんな！　テメェが一番の害悪だってんだよ!!」
「えっ」
意気揚々と、がっつりハンスを指差したアクアだが、言い返されて凍りつく。
「どんな手を使ったか知らねえが、渾身の毒は効かねえし。あのクソ不味いうえに悪酔いする、潜入向けの都合のいいモンスター（安楽少女）に擬態までして、やっとの思いで教会まで潜入したはずが……とんだ目に遭ったわ!!　初心者冒険者のアークプリースト如きが調子に乗るんじゃねえよ!?」
「うるさいモンスターね！　むしろ泣きたいのは私よ！　せっかくこの私が、自分の誇りに反してまで宴会芸を披露したっていうのに!!　裏切り者！　恩知らず!!　毒殺魔!!」
「誇りだと？　ケッ。教会に軟禁して、自分に懐くようにと四六時中、何度も何度も何度も何度も何度も聞きたくもねえ教義を聞かせまくりやがって!!　逃げても、そこの冒険者仲間どもが連れもどしやがるしよぉ!!」
「お前……俺たちがいない間に、そんなことを」
「え、ええっと……も、モンスター如きに、崇高なアクシズ教団の教義が理解できるはずがないのだから、潜入なんてしてたあなたが悪いわ！　ねえ、私の可愛い子たち。そうよね!?」
俺たちは誰も返事をしなかった。しかしもちろん、背後で様子を見守っていたアクシズ教団のプリーストたちは口を揃えて擁護。

「そうよ!!　モンスターに崇高な女神アクアさまの教えが理解できるはずがないわ!!」
「我らがアクア様を毒殺しようとした罪は万死に値しますわ!!　地獄の炎で永遠に焼かれなさい!!」
「恩知らずのスライムめ!!　アクア様の神罰を受けやがれェ!!」
「神罰です！　そのモンスターに神罰を下すのです!!」
「「神罰！　神罰!!　神罰!!!」」
　ハンスの額にピクンと青筋が浮かび上がった。
　ノリノリで魔王軍幹部を煽りまくり、異世界転生組の俺たちと紅魔族組の二人が揃って頭を抱えた。
「初心者冒険者のパーティー、イカれたアクシズ教団のプリーストよ。よほど死にたいようだな。クククッ、ならば冥土の土産に一ついいことを教えてやろう」
「うわ……い、嫌な予感がする。このタイミング、ろくでもない事実を明かされるやつじゃ……」
「ついさっき、この街の水源に仕掛けておいた汚染魔法を発動させた！　今頃、この街の水は水源ごと毒水と化している頃ッ!!　これでアルカンレティアも、アクシズ教も、終わりだァ!!」
「な、なんですってええええええ!?」
「ほらあああああ!!　やっぱりいいぃ!!!」
　この言葉をきっかけに、ハンスの魔法が発動した。
　この街の上部にいくつか点在する全ての水源から注がれる液体が、汚泥のような紫色に染まり尽くす。
　純粋で清純な水をあっという間に飲み込み、染める。
　闇に包まれた水の都アルカンレティア中を流れる水路を、蛇のように這いはじめる。
　この言葉を受けてアクシズ教団のプリーストの人が何人か階段下に向かったが、おそらく、浄化はできないだろう。
「最初の仕掛けは、そこの青髪のプリーストに浄化されたようだが、今度はそうはいかねえ。全ての水源となりやぁ、どんなに腕のいいアークプリーストでも浄化しきることは不可能ッ!!　滅びろ、こんな街、

とっとと滅びちまえっ、はははははは!!」
「そんなことさせっこない!! ふふん、なんか大きく出たけど、あんたはこの私にあっさり水源を浄化されちゃった雑魚モンスターよ。これだけの数に勝てるのかしら? ねっそうでしょカズマさん!」
「馬鹿、んなわけあるか!! この上挑発すんな!!」
「……いい度胸だアークプリースト。そんなに黙らせてほしければ、いますぐ黙らせてやろう……おらぁっ!!」
「うわわぁっ、危ないっ! みんな逃げろ!!」
真っ先に異変に気付いたカズマが叫んだが、とっさに動ける人間はそうはいなかった。
こちらに伸ばしたハンスの腕。
肘までの変化が解けて異形のスライムに変化し、毒々しい紫色が一直線にこちらを目指して、飛び込んできて、そして。
「荒れ狂う暴風よ、その大いなる力で守護せよ! ”トルネード”ッ!!」
暴風が立ち上る。
砂を巻き上げ、目に見えるほどに天高く舞い上がった一陣の旋風。ドロリとした毒々しい粘液ごと巻き上げたため、一直線に向かうだけだった液体は、巨大な岩石に派手な音を立ててぶち当たる。
散り散りに弾け飛んで毒煙を上げたのを見て、全員が表情を引きつらせた。
間違いなく、当たったら死ぬような猛毒である。
ゆんゆんが恥ずかしそうに詠唱を終えて、役目を終えた魔法陣が霧散した。
「ナイスだゆんゆん!」
「ほう、紅魔族の魔法か。小賢しい真似をする。だがその程度単なる時間稼ぎにしかならんぞっ!!」
体内から湧き出してきた粘液が、どるん、とハンスの腕を再構成する。
「みんな早く逃げてください!! 急いで下ればまだ間に合います!! わっわたしが魔法で時間を稼ぎますから!」

「できないわよゆんゆんっ！　ここで私が見捨てたら、大勢の可愛い子達が犠牲になってしまうもの！　残ってあいつをしばき倒してやるんだから！」
「おい！　一応聞くが……お前分かってるんだろうな！　あれは魔王軍の幹部だぞ!!」
「魔王軍の幹部だろうと関係ありません！　ここで見逃せば多くの犠牲が出ます！　カズマ、我らが大切なパーティーメンバーを置いて、ここを逃げるわけにはいかないです！」
「私も残るぞ、カズマ。クルセイダーとして、アクアを傷つけようとした奴を絶対に許すことはできん。それに街の壊滅などという事態を放ってはおけん！」
　最初は青い顔で頭を抱えていたカズマも、仲間のアクア、めぐみん、ダクネスが立ち向かおうとする様子を見て、ヤケクソ気味に叫んでいた。
「……ああもうっ！　ほんとに俺の仲間はろくでもないやつばっかだっ!!　ああそうだよ、仲間を傷つけられて黙っていられるかってのは大賛成だ!!　やいハンスとやら！　お前は必ずぶっとばしてやる！　うちのパーティーメンバーがっ!!」
「自分でやれよっ!?」
「もちろんやるさ！　一箇所に固まったら危ない。アクアは俺についてこい！　ダクネスは撤退するやつらの援護、めぐみんは今こそ出番だ。爆裂魔法を打てるようにしとけっ!!」
　ハンスを指差し、まさかの堂々たる宣戦布告。
　さらに次々指示を飛ばすカズマに、アクアは思わず感動に打ち震えていた。
「カズマさん……!!　そうよ！　この神聖なる私を害そうとしたんですもの。天罰を与えてやらないと気が済まないわ!!　みんなでぶっ倒してやりましょう！」
「ああ。実は俺も頭にきてんだ。そんでもって一つ考えがある。そっちのパーティーの二人もだ。よく聞いてくれ。まず……」
　カズマは、聞こえないように6人の輪を作ってこそこそと策を述べ

る。
やる気になった冒険者たちを見て、好戦的な笑みを浮かべるハンス。
やがて作戦会議を終えためぐみんが、漆黒のローブを華麗に翻して高らかに名乗りを上げた。
「ううっこれは何という燃えるシチュエーションでしょう!! 我は紅魔族随一の魔法の使い手、めぐみん! いずれ魔王を倒す者として、魔王軍の幹部ハンスっ! あなたはここで倒させて頂きます!」
「めぐみんがやるなら、わ、わたしも!! ……我が名はゆんゆん! アークウィザードにして、あなたを倒し、やがては紅魔族の長となる者!!」
めぐみんが「おおっ!? あの、名前を恥ずかしがってゆんゆんが、恥ずかしがらずに名乗りをあげるなんて!」と、感動していた。
すぅ、と思いっきり息を吸って言い切ったゆんゆんは、しかし顔を真っ赤にして首を引っ込めてしまった。
やっぱり恥ずかしいのね、それ。
「……しょ、ショウくん! 考えがあるの。お願い、魔法をかけて!」
「おう。いくぞ!!」
パーティーメンバーの成長に感動しながら、今日覚えたばかりの唯一の魔法を発動する。
地面に浮かび上がった魔法陣が、白色に輝くと、カズマやダクネス、ハンスまでもが感心するように目を見開いた。
「あ、あれっ!? おいめぐみん、どこ行った!?」
「わたしはここにいます! 魔法で見えなくなっているだけです。……これは、紅魔族がよく好んで使う魔法ですね。ゆんゆんが教えたのですか?」
「うん! カズマさん、あの人の気をひいておいてください! わたしたちに考えがありますから!」
「任せとけっ! 囮は俺らが引き受けたっ!」
親指を立てたのを見届けて、俺たちは三人で背後を移動する。
カズマは続けて、その場に残ったダクネスとアクアに振り返った。

「ダクネス、あいつのこと知ってんだろ。特徴とか弱点とか知らないか!?」
「そう言われても……一般的に、スライムは物理攻撃が一切効かない。我々に勝ち目があるとすれば、アークウィザードである二人の魔法攻撃、そしてアクアの浄化魔法だろうか」
「凄腕ウィザードと、一撃必殺ロマン砲、そんで女神……まるっきり勝ち目がない戦いってわけでもねえ！　……アクア！　あいつを浄化できるような魔法は当然あるよな?!」
「誰に口きいてるわけ？　この私を誰だか言ってみて……って、うげぁっ!?」
「何を企んでいるか知らんが。そこのアークプリーストに何かされると面倒なのでな、まずは葬らせてもらう！　死ねやぁ!!」
人一人飲み込んでしまいそうな毒の粘液触手が降ったが、間一髪。カズマ達が飛びのいてかわした地面が、新たな毒の蒸気を上げてジュワァァァと溶かされる。打撃では、これほど綺麗な痕は残らない。触手が持ち上がると、地面の毒液がボコッと泡を立てた。
「む、無理無理！　いくら私でもこんな毒々しいの浴びたくないから!!　ちょっとカズマさん！　まずはあいつの気をひきつけてくれないとっ!!」
「くそっ、アクアを集中狙いする気か！　うおわっ!?」
「わぁーっ!!　なんでよーっ!!　なんで私ばっか狙われてるわけーー!!?」
一度落ちた触手が再びうねり、鞭のようにビシバシと、アクアを叩きつけようとする。
必死の形相で、なりふりかまわず情けなく叫びながら逃げ惑う。だが、執拗にアクアだけを追いかける。
なぜかカズマと一緒に逃げてる。
「おい!!　こっち追いかけてくんな、お前を追いかけてるんだろ!!そっちに行け、あれ当たったくらいじゃ死なないんだろ!!」
「カズマあぁぁぁん!!　なんとかしてぇ、無理無理！　あんな汚いの無理だからぁ!!　カエルに食べられるほうがまだマシよぉーーー!!」

「くっそぉぉぉ!! ダクネス!!」
「任せろ！ 〝デコイ!!〟 ……ってあれ。全然効いてないぞ!?」
「当たり前でしょ！ この聖なる私を狙い撃つくらい知能のある魔物に、そんなの効くわけないでしょ、うひぇゃあああ!! かすった、いま掠ったあああ!! 服がシューシューいってるんですけどおおお!!?」
平らだった広場が毒液の水溜まりだらけになっていく。
その背後で、一人たりとも逃げ出さなかったアクシズ教団のプリースト達が、ハンスに必死の形相で浄化魔法を唱え続けている。だが、ハンスは髪をかきあげて、ため息を吐いた。
「「「「〝ピュリフィケーション〟！〝ピュリフィケーション〟！〝ピュリフィケーション〟!!!」」」」
「フン、無駄だ。たかがウィザード如きの魔法、何人束になったところで魔王軍幹部たる俺に敵うはずがなかろう」
「そいつはどうかな！」
「うん。いくよ、〝ライト・オブ・セイバー〟っ!!」
「何ッ!?」
ハンスが慌てた様子で振り返るが、もう手遅れだ。
回り込んだ俺たちが魔法を解除し、姿を現したゆんゆん。
発動した魔法が、防ぐ間もなく、ハンスの肉体に鋭く突き刺さり、薙いで、突き抜ける。
驚いた表情のまま停止し、アクアに対する攻撃がぴたりと止まった。
「おおっ、真っ二つに。やったか!?」
ズルッとハンスの体がずれた瞬間に、ダクネスの歓喜にカズマが「それフラグだからっ!!」と頭を抱えた。
そして、そんなカズマの不安は的中した。
切り裂かれた箇所はずれ落ちることなく、切断部がスライム化して結合し、元の形を取り戻す。倒したと一瞬でも思っていた人たちは絶望の表情を浮かべた。
「あああああっ、だから言わんこっちゃない！」

「なっ、今のは私なのか!?　私のせいなのかっ!?」
「ふんっ、なかなかいい魔法の腕をしている。流石はイカれた紅魔の一族といったところか。だが、この程度通用せんわぁ！」
「まだだ。ゆんゆんっ!!」
「うん！　〃ボトムレス・スワンプ〃っっ!!」
「うおわぁっ!!　なんだこりゃ、くそっ、面倒くさい魔法使いやがって!!　こんなもの！」
隙のない連続魔法により、おっさん姿のハンスは避けられずに、ズブズブと足から沈んでいく。
忌々しそうにゆんゆんを見ていたが、ふと、血相を変えて、一筋の汗を流した。
天を駆け巡る真紅の魔力波を目にしたのだろう。
そちらに視線を向ければ、その正体を見つけることができた。
「純然たる我が黒紅の魔力よ、魔王を討つ銀の弾丸となりて、崩壊の理（ことわり）を齎さん……!!」
「なっ……その魔力の密度……まさかっ!?」
全員を見下ろせるほど高い岸壁。
その上で整然と位置して杖を握りしめためぐみんの杖。そして異常な量の魔力の集合。
詠唱の通りに紅黒い魔力が羽衣のように杖の宝玉に纏わりつく。毛糸玉のように見えるそれだが、そのような生易しいものではないことは、ハンスの表情からも明らかであった。
「くそっ、足がハマって……な、なぜだ。なぜあんな初心者冒険者がこれほどの魔法をっ!?」
「これが私たちの結束！　これが人類最大にして、究極の攻撃魔法ッ！　さあ、我が最強の魔術で獄炎に落ちよ魔王軍っ！」
「いいぞ、やれぇぇ！　めぐみんっ!!」
「……カズマさん？　ここにいたら私たちも危なくないですか。ねえ？」
「えっ……うおおおおおっ!?　に、逃げろアクアあああああ!!!」
「ふあああぁ、待っためぐみん、ちょっとタンマあああああぁっ!!!」

事態に気付いたカズマとアクアが慌てて転がるように離れた瞬間、ハンスの頭上に何重もの魔法陣が浮かび上がる。
全員が理解し、岩陰に隠れようとする。
中央に取り残されたハンスの瞳に、美しい紅い輝きが映り込んだその瞬間。
「”エクスプロォオオーージョンッッ!!!!!!」
ーー解き放たれた魔力は、暴力的なまでの爆破を引き起こした。
暴風が肌を掻き毟り、土塊が服にばらばらと衝突する。髪が乱暴に梳かれ、思わず腕で目をかばった。
やがて暴風は風となり、風は大人しい凪に変わる。
残されるは閑静とした広場。
魔法陣の中心地は、毒溜まりを全て完膚なきまで蒸発させる。
さながら不発弾の爆心地のような爪痕を残し、人類最強にして最高峰の魔法の発動後は、跡形も無くなっていた。
「……ふぁぁ」
その魔法の主人である魔術師は、へたんと地面に力なく崩れ落ちる。
魔力を消費しすぎたのだろう。
物陰から、恐る恐る、様子を伺うアクシズ教団のプリーストたちが、その姿を見て。
「おおっ!!　見よ。あの邪悪な魔王軍が跡形もないぞ！」
「素晴らしい！　さすがはアクア様の従者!!　一撃で葬ってしまわれた!!」
「あのような強力な魔法は見たことがない……!!　さすがアクア様の従者だ!!」
目を輝かせながら、本当に感動して褒めちぎりまくった。
自慢の爆裂魔法を褒められたものの、従者扱いされためぐみんは一体どのような表情をしているのだろうか。ぶっ倒れているから確認できないけれど。
「倒した……!!」
「なぁんだ！　大したことないじゃない!!　なーにが魔王軍の幹部

よ。私の出る幕もなかったわね!!　んんぐっ!?」
「この大馬鹿女神が!!　さっきフラグだって言ったばっかだろうが!」
「……全く。やってくれるな、紅魔の小娘風情が」
ビクッと、ゆんゆんと、ぶっ倒れためぐみんが小刻みに震えた。カズマは「間に合わなかった……」と愕然とする。
未だ爆破の余韻で煙る爆心地。
波紋状に広がった爆破の中心地点から、ぬるりと。押し出されるようにようにぐにゅうと捻り出された、紫色の毒々しいスライム。それが、人形に変化する。
「そんな……めぐみんの魔法が直撃したはずなのに……」
「なめるなよ。爆裂魔法など飛んでくるとは思ってもみなかったが……初心者冒険者の未熟な魔術など!　効くかぁ!!」
残っていた土煙が、ハンスの作り出したであろう空気の波動で一気に晴れ渡る。
爆破の中心に立っていた。
あれほどの魔法を受けて立っているのかと、誰もが恐れ、おののき。しかし表情が「えっ」という風に変わった。
「よくもやってくれたな、この報い、たっぷり受けさせてやる……ん?」
「おお……なんだよ、しっかり効いてるじゃねーか」
「な、なんだ。声が妙に甲高く……何ぃ!?　な、なんだこれはあああっ!!」
肉体を形成したハンスは指さされ、自身でもその違和感に気付いた様子。
そこに立っていたのはハンスではなかった。ハンスのつもりなのか男口調で喋る、幼女姿のヨハネスであった。ちなみに声も幼女のものなので、男口調がひどく新鮮であった。
ハンスは再びスライム体に戻り、変異を繰り返そうとするも、上手くいかない様子。
「くそっ、身体が蒸発しちまって、元に戻れん……く、くくくっ……よ

くもやってくれたな、紅魔の娘ども!!　そんなに死にたければ貴様から葬ってやるわぁぁ!!」
「……!?　やばい！　避けろめぐみんっ!!」
腕をスライム触手に変えたヨハネスが、関節を最大限に折り曲げ、拳を振りかぶる。
明確な意思を持った、真空を揺らす正拳突き。先ほどより少しだけ細い触手は真っ先に岩場で倒れ伏すめぐみんを狙い撃つ。遮るものなく、一直線状に。
鮮明な破砕音に、全員が目を剥いた。
「めぐみんっ!?!!」
カズマは知っている。
パーティーメンバーのぽんこつウィザードが、爆裂魔法を撃った後に一切動けなくなってしまうことを。
爆裂魔法専門のアークウィザードは、発動後は自力で避けることはできない。
大砲でも撃ったかの如く、岩石が飛散し、めぐみんのいた場所はもうもうと土煙に包まれる。
しかし、幸いだったのは、それを知っているのはカズマだけではないということ。
「くっ、大丈夫かめぐみん！」
「ダクネス……ダクネスっ!?　よ、鎧がっ!?」
「う、ぐぐぅぅっ……へ、平気だ。この程度……」
ダクネスが、ぶっ倒れためぐみんを引っ張り、寸でのところで避けたのだろう。
しかし無傷とはいかず白銀色の鎧は煙を上げていた。その一部に毒液が染み込んだらしく、紫色に染め上げられていた。内部まで達しているかどうかは外見ではわからない。だが、確実に顔色が悪くなっているのを見て、めぐみんは息を呑んだ。
俺たちもぞっとした。
毒耐性のあるアクアがおかしいだけで、本来はこれほどの猛毒。
もしも掠ってしまえば、それだけで最悪な未来が訪れる。

「チッ、小賢しい真似をッ！　ならばそちらの紅魔の娘!!　……あれ、どこいった？　うおおおおっ!?　なんだこいつらはぁっ!!　邪魔だぁっ、このっ、このぉっ!!」
「なんだぁありゃ!?　ネズミの大軍がどっかから湧いてきたぞ！」
「なんでわざわざあいつに向かっていくんだ！」
ヨハネスの小さな足を避けて、どこからか湧き出して一直線に列を成す、薄汚れたドブネズミの大軍。ハンスが毒液の鞭で払おうとするが、まるで幻覚のようにすり抜け、擦りもしない。
ダクネスとめぐみんのすぐ側に移動し、俺の魔法陣の上で目をつむったゆんゆんが、詠唱を続けていた。
透明化の魔法を発動させたまま、屈んでダクネスの様子を伺う。
さすがのクルセイダーでも、染み込んだ毒には勝てなかったらしい。
アクシズ教徒のプリーストが、傷ついたダクネスに回復魔法と浄化魔法をかける。その甲斐あって、毒の苦しみも幾分か和らいだようだ。
「どこ行きやがったぁぁ、紅魔の娘ェ!!　こんなくだらない囮魔法が何になるというのだ!!」
「……そりゃ時間稼ぎのためさ！　今だっ、やれ、アクアぁっ!!」
「何だと!!?」
声の方を見たヨハネスは、小声で呪文を唱え続けるアクシズ教のプリーストと、汗を流しながらもドヤ顔な冒険者を目にすることとなった。
青髪のプリーストが唱え続けていた呪文は、完成する。時間は十分に稼げた。
眷属達の力を蒐集し、水の魔力をその手に収縮させるその瞬間だけは。
この街に祀られる水の女神の御姿のように美しく思えた。
怪我人のめぐみんと、毒を受けたダクネスに回復魔法を唱えるアクシズ教団も。
俺とゆんゆんも。

普段は駄女神と罵るカズマでさえ、息を呑むほどに。
「魔王軍幹部、ハンス。私どころか、私の可愛い子たちまで傷つけようとした。あなただけは絶対に許さない……水の女神の名において、ここで散りなさいッ!!」
「な、なんだこの力は……貴様っ!! ただのアークウィザードではないな?」
ハンスが慌てた様子で問いかけ、目を瞑ったまま答える。
「あなたには名乗ってなかったわね。冥土の土産に教えてあげる、耳の穴かっぽじって、よく聞きなさいっ! 我が名はアクア! アクシズ教団で崇められている水の女神アクアその人よ!!」
まさかこいつが、という。
信じ難いものを見るような目でアクアを見ていた。
モンスターを殺して奪い取った姿のスライムに立ちはだかる、羽衣のように自在に舞う水色の魔力帯が、その手に収束し、一つの魔法を作り上げる。
あれが先の六人の作戦会議で聞いていた魔法。
詠唱に時間はかかるが、一発当たれば確実に浄化が叶う女神の魔力が創り上げる魔法だ。
「な、なっ……女神、女神だと。永き眠りからようやく復活したというのに、女神と鉢合わせるなどと! そんな馬鹿なことが、あってたまるかあああああぁぁっ!!」
ドルンッと。肉体の全てが元の紫の毒々しい粘液に戻り、小刻みに震える。
見る見るうちに、風船を膨らますように膨らんだ。冒険者たちの身長の三倍以上のデカさになったとき、誰かが恐怖で尻餅をつく。
カズマ達も、俺たちも、この瞬間に自分が何を相手にしていたのかを、このときになって理解した。
魔王軍の幹部足るに相応しい、禍々しく恐ろしい終末の怪物。
どの生物にも当てはまらない、自在に蠢く二十の牙。何者をも飲み込む巨大で虚ろな腔内。粘体を通り抜ける血管。
女神に楯突く悪魔が、天を目掛けて。

アルカンレティア中に、魔物の不気味な咆哮を発した。
「危ない、アクアっ!!」
「アクア!!」
「アクアさまっ!!?」
最悪の敵を滅ぼさんと、迫る。地上に生きる地球上のどの生物をも超える体格を持った、恐ろしい巨体が、恐るべき水の女神へと。
だが、モンスターの恐れた魔法は、既に完成していた。
カッと目を見開いたアクアは解放する。
神にしか扱うことが許されない、女神足るに相応しい、聖なる魔術を。
「水の女神の浄化の力を受けて、懺悔なさい！
”セイクリッド……っ……ピュリフィケーショオオオンッッ!!!!”」
天の薔薇の杖から放たれた輝き。
それは真夜中のアルカンレティア中に救いの光を届け、終末の怪物を跡形もなく飲み込んだ。

最終話

「静かなもんだな。静かすぎて不気味なくらいだ」
　長かったようで、短かったアルカンレティアでの冒険。その旅立ちの日にカズマがぼそりと呟いた。
「そうですねぇ。ここに来た日は、アクシズ教の人たちが、息もつくことができないほどに、入信書を押し付けてきたというのに」
「いざ去るとなると寂しいものだな。だが、またこの街にくればいいさ。冒険者の旅というのは、いつの時代もそういうものだ。というか絶対にまた来よう。なあ二人とも」
「「絶対に断る」」
　カズマとめぐみんが完全にハモった。
　来た時とは比べ物にならない、テレポートサービスセンターの壁に背中を預けながら、ぼんやり空を見上げていたゆんゆんに声をかける。
「どうかしたのか。宿に忘れ物か？」
「ううん。なんだか、すごい冒険しちゃったなって思って……里にいたときは、こんなの想像もつかなかった……」
「俺はもう二度とごめんだけどな……アクアがいなかったら、今頃みんなまとめて溶かされて毒液の中だったぞ。この街も無くなってただろうし。最初からすごい冒険しすぎだな……」
「あはは……うん。でも、こんなこと言ったら不謹慎かもしれないけど……わたしね、みんなで冒険できてね、すっごく楽しかったんだ」
　ゆんゆんは、未だ魔王軍幹部討伐の熱が下がっていないのだろう。頬っぺたがいつもより倍ほど赤く、ひたすらに指をこすり合わせた。
　最後にかろうじて見える街を振り返る。
　一時は汚染魔法に汚された水源だが、もはや毒は見る影もない。
　街の頂上から流れているのは澄み切った純粋な水である。
　アクシズ教のプリーストたちが数人、俺たちを見送りにきていた。さらに建物の陰や、窓から、何十人、何百人のアクシズ教徒たちもこっ

そりとアクアの見送りにきてた。
……その情熱、わかるけどちょっと怖い。あの後にあった降臨祭のときにも思ったけど。
「アクア様、行かれてしまうのですね。我々はいつでも、お待ちしております……」
「ちょ、そんな顔しないで！　私の従者と魔王をチョチョイと倒してくるだけだから。またそのうち遊びにくるわよっ！」
「いつでもアクア様にお泊まり頂いた部屋は空けておきますので。まさかその身を張ってまで、この街を守ってくださるとは……命を捧げても、受けたご恩は足りませぬ」
「命なんていらないわよ、仕事増えるだけだし。それよりこれからも教義をよく守って、私を崇めなさい!!　これからもアクシズ教をもーっと崇めるの!!」
「もちろんですとも!!　私共一同、より一層励んでまいりますので！」
「よしよし。ただ、えっとね……あのモンスターの泥に突っ込まれるのはもう勘弁してほしいかなって思うの……」
後から聞いた話だが、最初の日に汚染された水源。
あれを浄化したのは魔法ではない。
毒々しい水にびっくりして、勢い余って足を滑らせて落ちたアクア。偶然、水の女神の体質によって浄化されていったというのが真相らしい。
魔法で浄化することもできるらしいが、アクシズ教の信徒たちは、浄化の条件が水の女神が浸かることだと勘違いして、その願いを断れずに一つ一つに浸かったのだ。毒水に滝のように打たれたり、足を突っ込んだりとさんざんだったらしいが、自分の信者たちが信じてくれるなら……と、最後までやりきってしまった。
女神の鑑だな、ほんと。
「しかし、あれだけの戦闘があったというのに、死人どころか怪我人もほとんど出なかったのは幸いだった」
「街の住人のほとんどは教会に集まってて、アクシズ教じゃないやつらも街の防衛や見張りに駆り出されてたしな。警報がすぐ出たおか

げで、毒を口にすることもなかったみたいだし」
「ああ、今思い出してもあのモンスターの毒は凄かった。あんな凄いのは初めてだ。ジワジワ侵食されていく感触に、痺れて徐々に動かなくなっていく素晴らしい感覚……思い出すだけで震えが……っ」
「おい。素晴らしいってどういうことだ」
「言ってない」
「しかし、反省の多い旅となってしまいました……まだまだ、私は未熟です。もっと強力な爆裂魔法を打てるようにならないと……」
「何言ってんだよ。今回のＭＶＰこそアクアだが、勝てたのはお前の爆裂魔法があったおかげだ」
　真顔のダクネスを一瞥もせず、めぐみんは背丈ほどある杖を、悔しげに力強く握りしめる。
「いえ。本当の爆裂魔法はあんなものではありません。幹部クラスとはいえ、一撃で葬れなかったのは、私が未熟なゆえです。カズマ！アクセルに戻ったら修業です!!　もっともっと爆裂魔法を打ちまくって、レベルを上げて、最強の爆裂魔法を完成させましょう!!」
「ゆんゆんみたいに上級魔法とってくれよ……」
「ありえません。我がスキルポイントは、すべて愛すべき爆裂魔法に注ぐために存在するのですから。しかし今回のことで、カズマも我が究極魔法と、それを扱える私の価値がどれほどかを、ようやくその身で理解したのではないですか？」
「まあ、ほんの、こんくらいちょっとだけな」
「ちょっとですか……まあいいでしょう。また魔王軍の幹部が現れたときは、私に任せてください。次こそは一撃で葬ってみせますからっ!!」
「二度と会いたくねえよ!!」
　ビシッと、紅魔族特有のかっこいいポーズを決めるめぐみんに唾を飛ばして反論し、カズマはため息を吐いた。
　アクセルは初心者の街だ。旅さえしなければ、もう二度と魔王軍の幹部など会うこともないだろう……そのとき、血色の悪い魔法具店の店主がカズマの脳裏を過ぎったが、あれは例外だと首を振った。

「それにしても、俺たちよく幹部クラスの大物倒せたよな。報奨金とか貰えるのかな？」
「すまん。私は把握していないが、幹部クラスならかなりの高額になるだろう」
「報奨金もらえるのっ!?　カズマカズマ、アクセルでお祝いしましょうっ！　遊びまくりましょう!!　みんな夜明かしでパーティーナイツよ！」
　戻ってきたアクアが、純粋な子供が未知のおもちゃを前にしたような、それはもう素晴らしい笑顔を浮かべて近づいてきた。
　わかったわかった、とあやすカズマもまた、楽しみにしている雰囲気を隠しきれていない。
「おーい、カズマ。そろそろ行くぞ！」
「……さて、呼ばれたことだし。帰るとしますか。みんな！」
　全員が、来る時よりも大きな魔法陣の上に乗り、アクシズ教の信者達に見送られながらアルカンレティアを去った。
　アクアは魔法陣ギリギリまで近づいて、またねーーーーっ!!　と、名残惜しそうに手を振り。
　めぐみんはゆんゆんと、今回の戦いでどちらの功績が大きかったかを言い争い。
　ダクネスは静かに瞑想……たまに何かを思い出して頬を赤らめて、腕を組みながらテレポートの発動を待ち。
　俺とカズマは、なぜ自分たちが生き残れたかを延々と語りあいながら。
　六人の乗った魔法陣が輝き出した。
　帰ろう、アクセルの街へ。
「……そういえば、なんで私たちアルカンレティアまで来たんでしたっけ」
「あ〟っ」
　めぐみんの言葉を最後に、勇敢な冒険者たちの姿は消えた。

結局テレポートサービスセンターを出た俺たちは、温泉の町ベレスを経て、来る時よりも豪華な六人乗りの馬車に乗って、アクセルまで帰還した。

アクセル行きの馬車に乗る前に「戻りましょう！　ねえ戻りましょう。クエスト未達成になっちゃう！　お願い、お願いよカズマぁぁぁ!!」と、泣きついたアクア。

だが、当のゆんゆんが申し訳なさそうに。

「あ、あの……アクア様には感謝してもしきれないほど感謝してて……あの、でも、今回のことで、アクシズ教として信仰するのとは違うのかなって思って……」

という依頼主の意向により、そもそも依頼自体が取り下げられることとなった。

そのときアクアは「なんでよーーーっ!!」と叫んだ。俺はとても賢明な判断だと思った。あれを見た後でアクシズ教に入ろうとはしないだろう。

まあ、アクシズ教のペンダントは相変わらず大切に持っているみたいだが。

それくらいがちょうどいい距離感なのかもしれない。

懐かしの我が街に帰ってきた俺たちは、別れて、それぞれの生活に戻っていった。

今回のクエストは依頼主の都合でのキャンセル扱いとなり、心配していた報酬は無事に支払われることとなった。まあ、ゆんゆん曰く、ギルドが認めなくても払う手筈は整えていたらしいが。

アクアの旅費と、ベレスでの豪遊費、そして三十万エリスがアクア個人に支払われ、女神の美しい瞳を”▪”のマークに変えた。

もっとも、その三十万エリスはアクセルに残してきたツケや、酒と遊興費に消えたようである。

……にも相変わらず、ここ数日の金使いは荒いままだった。

報酬額を超えて、ツケで飲みまくっているらしい。
なぜか。理由を聞くと、こう答えた。
「ふふふっ……いい？　私たちは魔王軍の幹部を討伐したの。報酬は一体いくらになると思う？　どんなに少なくとも一億エリスにはなるわ！　六で割っても相当残る。それに比べたら、こんな金額屁でもないってわけ！」
「お前の辞書には貯金って言葉はないのか。昼間っから飲んでんじゃねぇ！　今回の件でちょっとは見直したってのに、この駄女神が!!」
「なによっ!?　私のお金なのよ。私が今回の一番の功労者でしょう！　いいじゃないちょっとくらい贅沢したって！　……っていうかまた駄女神って言ったわねヒキニート!!　謝って！　駄女神って言ったことを謝って!!」
と。普段通りの調子のカズマパーティーを横目に、昼間の冒険者ギルドでぷはぁーっ！　と、二人でジュースを煽った。
やがて小さな喧嘩も終わって調子を取り戻したアクア。
口に泡をつけたまま、美味しそうに唐揚げをつつく姿は中年のおっさんのようで。
アルカンレティアで見せた女神の威厳はどこに行ってしまったのだろう。
自慢の宴会芸を披露する女神を前に、げんなりするカズマを、ゆんゆんと二人で遠くから合掌した。

俺も、ゆんゆんとの日常は今も続いている。
クエストを受けて、街周辺の低レベルのモンスターを狩りにいく。
そんな普段通りの和やかな日々は、アクセルに戻ってから決定的に変わった。
「おめでとうございますっ!!　ショウさん。このステータスならアークウィザードへの転職が可能になります！」
「ほ、ほ、ほんとですかっ!?!!」
いつも通りの冒険者ギルド。
ギルドカードを提出しにきた俺は、そんな宣告を受けて、つい受付

嬢の金髪お姉さんの鼻先まで身を乗り出してしまう。
「は、はい。本当です。あの近いです……一体何をしたらこんなに早くレベルが上がるんですか……?!
私も長いことこの仕事をやっていますが、こんなにも早く上級職に転職される方はそうはいませんよ！」
「すみません……あ、ありがとうございます。あはは……」
「とにかく、ウィザードから上級職アークウィザードへ、転職されますか？」
「……お願いします！」
魔王軍の幹部を倒したときの経験値はアクアに吸われてしまった。
しかし今回の旅で全員のレベルが一気に上昇している。自分に限っては、アルカンレティアやその道中での”養殖”分の経験値がある。
レベルアップ？　ゆんゆんが全部やってくれました……とは、とうとう言えなかった。
冒険者の持つギルドカードには職業が記される場所がある。
絶対に偽造不可能な特性故に、身分を証明するそれはこの世界において意味を持つ。
元の世界での運転免許証や保険証、学生証や社員証などとは比べものにならない、強者の証明。
それが書き換えられる。
天球儀のような機械から放たれる一筋の閃光が、既存の文字をかき消し、新たに理解不能な書き加える。
「……はい、完了しましたっ。それでは伊藤翔太さん。改めて、冒険者ギルド一同、あなたの今後の更なる活躍をお祈りしております！」
受付嬢のお姉さんににこやかにカードを返される。
俺は、その日一日中、自分のカードに釘付けとなった。
アークウィザード。
そう。一握りしかなることの許されない、上級職のアークウィザードとなったのだ。
山ほどあるスキルポイントを上級魔法に割り振って、ゆんゆんやめ

ぐみんのように強力な魔法を使いこなせる。
その舞台に、ようやく手を届かせてもらったのだ。
もう、ヒモとは言わせない。ここからようやく異世界英雄伝が始まるのだ。

「えっ、ショウくん。”ライト・オブ・セイバー”を取るの？」
「もちろん！　心から決めてたんだ。いつかゆんゆんを超えるくらいのアークウィザードになって、もっと凄い”ライト・オブ・セイバー”を使いこなせるようになってやる！」
「……うんっ！　そう決めてるんだったら、すっごくいいと思う！」
嬉しそうに手を合わせて、宿に戻った俺をゆんゆんも祝福してくれた。
ここ数日、ゆんゆんは本当に嬉しそうで、なんというか、とても明るくなった。
出会う前は柱の陰に隠れて様子を伺ったりするばかりだったのが、今では「めぐみん、勝負よ!!　今回は勝たせてもらうんだから！」なんて言いながらめぐみんの泊まっている馬小屋に堂々と挑戦に行くし、受付嬢のお姉さんのところについてきてくれるようになったし、アクアやダクネスとよく話している姿を見かけるようになった。
もっとも、めぐみんには2回に1回は面倒そうに適当に追い払われるし、昔を知っている受付嬢のお姉さんは生暖かい目で見られているし、アクアやダクネスと会える頻度はそう多くはない。
でも、だけれど、間違えようもなく彼女は変わった。
周囲の人たちはゆんゆんを見かければ声をかけるようになったし、カズマのパーティーと冒険にいくこともある。
異世界転生者として願った特典は、素晴らしいものだった。
ゆんゆんと出会い、命の危険もあるけれど、昔よりもずっと楽しい。
「転生特典だから彼女になって」……なんていまさら言えないけれど。
こんな子と冒険に行けるだけで、俺も十分幸せだ。
といっても……
俺もアークウィザードにはなりたてで、まだまだまともに戦えな

い。
相変わらず異世界文字だって覚えてない。
ゆんゆんから離れられない日々は続きそうだ。
「それじゃあ、今日はアークウィザードになれたお祝いだね！　え、えっとね……ねえ。せっかくだし、これが終わったら、どこかに行かないかな？　前にね、ちょっと高いけど、お祝いにピッタリな店を見つけたんだけど……」
「いいな！　討伐報酬も入ってくることだし、今日は気にせずに楽しもう!!　……これでどうだ！　もう打つ手はないだろ！」
「あっ!?　むむむぅっ……〝エクスプロージョン〟を使ったら味方も巻き込んじゃうし……」
ゆんゆん所有のボードゲーム板に集中する二人。
アークウィザードになったおかげか、勝ち続けているゆんゆんを珍しく追い詰めることができて、最高の気分だった。

「おはよう、ショウくんっ！」
「おぉ、ゆんゆん、おはよう。さすがに遊びすぎたな。結局昨日も勝てなかったなぁ……今日はどうする？　俺としては、さっそく覚えたばかりの上級魔法を試してみたい気持ちなんだが」
「いいよ！　じゃあ最初みたいにジャイアント・トードの討伐に行こっか！　その後は、めぐみんやカズマさん達と一緒に夜ごはん食べよう！」
可愛らしくローブを翻して、後ろで腕を組んでにこりと微笑むゆんゆん。
不意に胸が高鳴った。つい顔を逸らして、ついでに話題も昨日のゲームのことに逸らして並んで歩きながら、いつも通りアクセルの冒険者ギルドの扉をくぐる。
「だから、どーいうことなのっ!?　おかしいわ。そんなの絶対おかしいじゃないの!!」
とても聞き覚えのある声で、ゆんゆんとの話題が途切れた。

「どうしたんだ、四人揃って」
「あっ……ショウさんとゆんゆんさんのパーティの方も関係者でしたよね」
申し訳なさそうにうつむき、上目で見上げてくる受付のお姉さん。
テーブルに手をばんばんと叩きつける女神さま。
苦い顔をするカズマ。
集まる冒険者たちの同情の視線。
めぐみんとダクネスは、冷静そうにやりとりを見ていたので、ゆんゆんが聞いた。
「めぐみん、ダクネスさん。なんでアクアさんはあんなに怒ってるの？」
「ああ。あれはですね……」
「絶対におかしいわ！　あれだけの力を持ったモンスターよっ!!　魔王軍の幹部を、私たちで倒したのよ！　ほんとですってば!!」
「で、ですから。魔王軍幹部デッドリー・ポイズン・スライム”ハンス“はすでに何十年も前に討伐が確認されておりますので、報酬をお出しすることはできないと……」
「おかしいわ！　だって、居たのよ！　あれだけ苦労して倒したのに!!　ほら！　ちゃんと冒険者カードにも書いてあるじゃない、これよこれ!!　あんたこの文字が見えないの!?」
「も、もちろんそれはわかってます！　ですが、魔王軍幹部であるかは分かりませんし、それに今は懸賞金もかかっていません……万一を考えて、念のため冒険者ギルドで確認を行ったそうですが……その。アルカンレティアの方々は口を揃えて『何もなかった』と仰ってまして……」
「なんでよぉぉーーーっ!!」
……ああ、そういえばアクシズ教団の人たちは、外部に箝口令を敷いてたんだっけ。
信仰するアクア様の御身を守る為。他宗教の恨みを買わないため……エリス教徒では決して得られない優越感を感じるためと言ってた信者もいたが。

とにかく、そのときの号令を律儀にずっと守り続けているらしい。
魔王軍幹部のハンスがアルカンレティアに攻めてきたのは紛れもない事実である。
しかし、仮に復活が信じられたとしよう。
それが討伐されたとなれば「どうやって？」という話になる。
最後のトドメはアクアがさした。女神の魔法によって。だからアクシズ教団の皆様は万一を考えて口を閉ざしたのだろう。
今更、討伐したのはアクア様のパーティです、なんて彼らは言わない。
……たぶん、煮ようが焼こうが磔にされようが、決して口にすることはないだろう。
カズマもそれは理解しているようで、報酬がもらえないことに、ひどくがっかりしていた。俺も落ち込んだ。最低一千万エリスとか聞いてたのになぁ……
「か、カズマさあああん!!　私、ツケでいっぱい飲んじゃったの。どうすればいい？　ねえどうすればいい!!?」
「知るか!!　俺は何回も、調子にのって飲み過ぎるなって言っただろ!!　ああっ、命がけの戦いだったってのに……こんなオチかよ……」
「ゆんゆん！　あ、あなたは私の味方よね？　ねっ？　あ、あのね。女神の名に免じてお金を貸してくれないかしら！」
「い……いいですけど、あの。カズマさんがいいって言うならですけど……」
「駄目だ。絶対甘やかすんじゃないぞ……」
「カズマーーーー!!」
袖を握ってがくがくと何度も揺さぶった。
だがショックを受けているカズマは、とうとう反応すらしなくなった。
やれやれ、と首をふるめぐみんとダクネス。
俺たちはお互いに隣のパーティーメンバーを見て、苦く笑った。
そんないつもの光景が、とても心地よかった。

そして今日も、そして明日も。
みんなで。
俺たちはこの素晴らしく、痛快な世界を冒険しに行くのだ。

第二章
第一話

山道に住み着いたゴブリン討伐のクエストを受けた俺たちのパーティーは、二人できょろきょろと挙動不審にあたりを見回しながら、アクセルより離れたとある山中を歩いていた。

「出ないな、ゴブリン」

「うん。でも、山道を狙うみたいだから、きっともうすぐ出てくるよ。頑張ろうね！」

黒い衣装を纏い、特徴的な紅の瞳を宿した少女が隣で嬉しそうに、がんばるぞ！という雰囲気を醸し出しながら、微笑ましく意気込んでたわわに実った胸が揺れた。

そんな相方がそばにいることに嬉しさと気恥ずかしさを感じながら、自身の冒険者カードを眺めた。この世界の文字は相変わらず読めないままだが、隣のパーティーメンバーの指導のもと、ようやくいくつか単語を覚えられた。苦労なく読めるカズマが羨ましい、なんて考えが頭をよぎる。

今日何度目かわからないくらいポケットから取り出し続けている手元のカードの職業欄には”アークウィザード”と記されてる。

俺の名前はショウ、異世界転生者である。

現世の死後に女神さまに選択肢を与えられ、強力な転生特典をもらって、この世界に転生してきた若者の一人だ。

異世界転生者――それは、地球で何らかの原因で死んだ若者が、神様およびそれに準ずる存在によって、魂だけ地球外に転移……肉体を得て新たな生を送っている人間たちのことである。

しかし、一般的にはそれだけではない。

異世界に転生した人間は、チート能力を貰えるのが物語のお決まりである。

例えばドラゴンを切り倒すような凄まじい肉体能力、優れた魔法力、あるいは世の中の理から外れた特殊能力で敵をばったばったなぎ

倒し、美少女パーティーとハーレムを築きあげるのが、いわゆるお約束というやつだが、残念ながらこの世界においては異世界転生者は珍しい存在ではない。チート能力をもらっている者もおり、同じように女神に転生させてもらった若者が大勢存在している。

いまも王都で活躍している……らしい彼らをよそに、なぜ俺は最初の街で燻っているのかは、いまは語るまい。

……何はともあれ、あまり転生者に優しくない世界で、俺はようやくアークウィザードとして大成することができたのである。

そして親愛なるパーティーメンバー、生まれながらにして魔法使いになることを宿命づけられた紅魔族という一族の長の娘とともに、冒険者として活動している真っ最中なのである。

「ショウくん、今日はずっと冒険者カード見てるね」

「早く試してみたくて、仕方ないんだよ。せっかく上級魔法を取れたんだし……なあ？」

「えへへ。このためにずっとスキルポイント貯めてきたもんね！」

頬を緩ませて冒険者カードを見つめる男と、それを後ろからニコニコと嬉しそうに見守る女は、さながら男女の付き合いをしている二人連れのようにも思えるが、残念ながらそういった付き合いをしているわけではない。

俺がこの世界に来て、ようやく初めてまともな攻撃魔法を取得することができた。

そう、〝ようやく〟だ。

ある同期の異世界転生者は短剣や弓矢を自在に操り、あらゆる状況に適応できる万能なスキルを得て仲間たちと冒険するほど成長しているのをまじまじと見せつけられながら、魔法使いという職業に就きながらも魔法の使えない、ヒモという非常に不名誉な称号を与えられてはや数ヶ月。耐え続けた甲斐があったというものだ、と密かに拳を握って涙を流した。

この世界では、冒険者カードでスキルの振り分け……俺の場合は、新しい魔法の習得を行うことができる。

オンラインゲームのように、この世界の住人にはレベルの概念が存

在する。レベルを上げることでスキルポイントを得ることができ、各人の職業に応じて、決められたスキルを取得できるのだ。
さて。最初にウィザードという職業に就いた俺が、なぜ〝ヒモ〟と同期の異世界転生者に罵られなければならないのかを説明しておこう。
俺は今でこそアークウィザードであるが、その前に、習得しなければならないウィザードという前提職業がある。
世の中のウィザードは、自分の経験値をためるために普通は中級魔法を取得して、戦いの中でレベルを上げてからアークウィザードになるのが一般的である。
しかし、紅魔族という魔法使いの天才……ゆんゆんのアドバイスを受けて、状況は変わった。
「あの、あのね。これは学校で習ったんだけど、普通に中級魔法をとるよりも……アークウィザードになってから一気に上級魔法をとったほうが、凄い冒険者になれると思うの！」
この世界には〝養殖〟という冒険者用語がある。
敵を倒せば経験値を得て、レベルが上がる。自身で敵を倒さずパーティーメンバーに倒してもらっても、トドメさえさせば自分に経験値が入る。
そう、パーティーを組んでくれたゆんゆんに敵を倒してもらうことで、ほとんど序盤のスキルを取得せずに、大量にスキルポイントを余らせることができたのだ。
ぶっちゃけ、同期冒険者の言うとおり、寄生していただけのヒモに他ならなかったわけだ。
しかし、今日でそれも卒業だ。
「うへ、へへ……ふふふぅ……っ」
いまだ山のように余るスキルポイントを見るだけでもにやけが止まらないが、それよりも、取得した上級魔法を使ってみたくて、ずっとうずうずしていた。気味の悪い笑いを零していたことに気づいて、おっと、と慌てて口を塞いだ。
アークウィザードとしてのスキル欄に浮かび上がっている唯一の

文字。そこには明るく〝ライト・オブ・セイバー〟と記されていた。
「ところで、もう体調は大丈夫そう？　昨日は真っ青だっだけど……」
「ああ。ごめんごめん、アルカンレティアの後はカズマたちのパーティーと飲みまくったからなぁ……ほんとごめん、昨日一日寝てたのに、まだ頭ちょっと痛いかも」
「ううん！　わたしも楽しんじゃったから……えへへ」
　昨日よりもマシになったものの、いまだ痛む頭。ゆんゆんはシュワシュワは飲んでいなかったけれど、昨日までのお祭り騒ぎが忘れられないのか、思い出したようにちょっと赤くなった頬が緩んでいる。
「あっ、カズマさんたちは大丈夫かな。ショウくんよりずっと遅くまで飲んでたみたいだったよ」
「あいつらはヤケ酒だから、まあ仕方ないさ。アクアなんて、ギルドの裏手に行っては飲みの繰り返しだったしな」
「あ、あはは……アクアさんは水の女神だから……大丈夫だよね？」
「女神の威厳はこうして失われていくのであった」
「そ、そ、そんなことないよっ!!　い、いまでもすごく感謝してるよっ!?」
　いま話に出たカズマとは、俺と同じ異世界転生者の名前だ。
　本名は佐藤和真。アクシズ教の御神体である女神アクアとともに、この世界に降り立った冒険者である。
　先日、色々あって、この世界に俺たちを転生させるように導いた女神アクアを信仰しようと考えたゆんゆんは、アクア本人に洗礼を受けたいと願い出て、アクシズ教総本山であるアルカンレティアに向かった。
　しかし、女神の加護を受ける神聖なはずの街は、魔王軍が謀略を巡らしている真っ最中であった。そこで、アクアを筆頭に俺たちのパーティーで、〝デッドリー・ポイズン・スライム〟と呼ばれるモンスターである幹部ハンスを見事に撃退してみせたのだ！
　……あのときは、一歩間違えれば死んでいたかもしれなかったな。
　で、そんな後世にまで語り継がれそうな大冒険を乗り切った俺たちは、調子に乗って連日飲みまくった。

吐き続けるまで飲んだ。
そりゃもう、毎日。
ハンス討伐の報酬が貰えないことがわかり、その日はアクアに付き合ってみんなでヤケ酒もした。
そして当然グダグダになり、ようやく動けるくらいまで復活したのが今日の話。きっと俺みたいに、カズマ達も昨日はどこかでぶっ倒れていたことだろう。
まあ、俺たちは勇者でもなんでもない、チートをもらわなかった一般人だから、こんなものだろう。
「あっ。ショウくん、見て。これゴブリンの足跡じゃないかな」
ゆんゆんが地面を指さすと、確かに人間ではない、何かの生き物の足跡があった。
山道を逸れてその方角を追ってみる。すると、そこには小さな広場のような場所があり、数匹の緑色の生物がたむろしていた。
身長は子供程度で、錆びた槍やら、剣を地面に引き摺っている。
間違いない、モンスターだ。
「あれがゴブリンか」
「うんっ。ショウくん、がんばって！」
とうとう魔法を使うときがきたのか、と意気込んだ。使い方は、手に魔力を集めて使いたい魔法をイメージするだけだ。
ゆんゆんを見て頷く。うきうきと、大きな胸を寄せながら両拳を握って「がんばれ」と言わんばかりに目を輝かせていた。
よし、いくぞ。
そうと決まれば先手必勝。
初めての攻撃魔法を使うため、俺は意気揚々と草むらから飛び出して、ゴブリン達がこちらに気づく前に手をかざした。
そして、ヒモから卒業する瞬間が、とうとうやってきたのだ。
「行くぞ、〝ライト・オブッ……セイバァァァーーーーッ〟!!!」

冒険者ギルドに戻ってきた俺は、受付に向かった。
「おかえりな……あ、あの……どうかされたんですか？」
「いえ。なんでもないです。達成報告お願いします」
「え？　あ、は、はい。それではカードの提出をお願いします」
金髪のお姉さんはこちらの様子を見て顔を引きつさせた。
何も言わずに冒険者カードを提出すると、お姉さんも乾いた笑いを気にするそぶりはあったが、追求はしてこなかった。何も言わずに確認を済ませ、カウンターから金貨数十枚をトレーに乗せて差し出してくる。
「はい、確認できました。ゴブリン十匹の討伐で二十万エリスになります」
「ありがとう、ございます」
「あ、あのー。何があったのか分かりませんが、元気出してくださいね？」
「はい。どうも……あは、あはは」
頷いて、受付を離れると柱の陰で待っていたゆんゆんが駆け寄ってきた。
「あ、あの……お疲れ様。あ、あのね。考えたんだけど……今日の報酬はショウくんが全部もらうべきだと思うの！　ゴブリンは全部ショウくんが倒したんだから！」
「うん……そうなんだよな。あ、ははは」
「ええっ!?　ちょ、ちょっと、どうして泣いてるのっ!?」
完全に気をつかわれていることが分かって、涙が溢れそうになった。
そうさ。薄々は感じていたさ。
たかだか少し才能があるだけの、アークウィザードになったばかりの身。そんなちっぽけな存在が、生まれながらにしてアークウィザードになることを宿命付けられたベテランと並べるはずがないということだ。
技のレパートリーで負けるのはわかっていた。そもそもレベルは

ゆんゆんの方が上だし。
でもな。同じ魔法なのに、あそこまで才能の差が出てくるなんて思うか？
例えるなら、ゆんゆんが天を貫くほどの光の聖剣なら、俺はただの道具屋の平凡なロングソード。
いや、決して弱いわけじゃないんだ。
比較対象が悪いだけ。
うん。
ちっくしょう。他の異世界転生者は王都で大活躍してるっていうのに。
「おい店員、シュワシュワ持ってこい!!」
「だ、だめだよ!?　まだ昨日の酔いが残ってるのに体調悪くしちゃうよっ！」
「ええい離してくれ！　飲まずにやってられるか！」
「だ、大丈夫だから！　これから頑張ればちゃんと威力も上がっていくからっ、ね!?」
「あら、私の敬虔なる信徒のゆんゆんとショウじゃない。何で、こんなところで騒いでるのよ？」
テーブルに置いた報酬の金貨半分を、無理やりゆんゆんに押し付けたところで、入り口のほうから透き通るような水色の髪の持ち主がとてとてとやってきた。
俺を転生させた例の女神アクア。アクシズ教の御神体にして、カズマのパーティーのアークプリーストだ。
昨日までの二日酔いっぷりを忘れたかのようにけろっとしており、整った美しい顔でしばらく俺の顔をじいっと覗き込んで、むっとした表情で言った。
「あらやだ。二日酔いでしんどいのはわかるけど、駄目よ、あなたたちはアクシズ教徒見習いなんだから。〝汝、何かのことで悩むなら、今を楽しく生きなさい〟ってあるでしょ!!」
「うん……ありがとう、アクア。あと俺はアクシズ教徒見習いじゃないぞ」

「んー？　まあちょっと他の人よりも少ないけど信仰心を感じるし、信徒みたいなものよ」
「そういうものなのか……？」
まあ確かに転生させてくれた恩とか、アルカンレティアの件で感謝はしているけど……というか。女の子二人に気を使われて励まされたかと思うと、どんどん悲しい気持ちになってきた。
「よう。昼間っからなにをそんなに落ち込んでんだよ」
「ああカズマか。一緒に飲まないか」
「……お前、本格的にヒモが板についてきたな。クエストに行ったんじゃなかったのか？」
すると続いて同郷であるカズマもやってきた。すっかり毒気を抜かれた俺は、手を上げて挨拶を交し合った。
「あっ。か、か、カズマさんも。え、えと、二人ともクエストを受けにきたの？」
「もちろんそうよ！　私たちはお金を稼がなきゃいけないんだから！」
「……はぁ、金が必要なのはお前のせいだがな。本当は寝てるつもりだったんだが、今日は妙にカラスとアクアがうるさくってな」
ジロリとカズマが、胸を張るアクアを睨みつけ、息を吐いた。
あー、ここ数日の金使いは荒かったからな。俺は、まあ、ゆんゆんのお金で払えたからギルドに借金をせずに済んだが……俺たちのいないところでも飲みまくっていたらしいから、現在の借金額も相当なものだろう。
ハンス討伐の報酬をあてにしていたようで、貰えなくなった今……噂によれば、借金総額は五十万エリスを超えるとか。
……どんだけ飲みまくったんだよ。
リーダーのカズマも、普段なら「お前の借金はお前が払え！」怒鳴りつけるところだ。しかしアクアほどではないがノリノリで宴会に参加していたせいで今は強くは言えないらしい。
「と、そんなわけだ。今日はいいクエストは出てないか？　できれば一攫千金のうまいクエストがいいんだが……そんなの、あるわけない

よな」
「今日はもう締め切られたけど、ゴブリン討伐のクエストは美味しかったぞ。一匹で二万エリスだからな、カエルよりお得だ」
「へえゴブリンか……うーん、それなら俺たちにもできそうだな。明日めぐみんとダクネスも連れて四人で行ってみるか」
「そういえば二人を見かけないけど？」
「ダクネスはなんか用事があるらしくてな。めぐみんは、まだぶっ倒れてるよ。今頃は馬小屋で顔を青くしてるんじゃないか？」
「めぐみんったら。調子にのってシュワシュワ何杯も飲むから……」
ゆんゆんはそう言いつつも、ソワソワとしだした。親友のことが心配なのだろう。まあ、かといってどうしようもないが。
俺たちとしては、頭痛のあまり街中で爆裂魔法をぶっ放さないかのほうが不安である。
「カズマカズマ、これなんていいんじゃない？」
ピリッと掲示板から一枚の紙を剥がして、アクアが持ってきた。
「おい勝手に剥がすなって！　は、ダンジョン探索クエスト？　……ってお前。こんな高難易度のやつ受けれるか!!!」
「あ、ちょっと!?　返しなさいよー!!」
〝氷災狼の迷宮　ボス討伐クエスト〟と書かれたそれには、髑髏マークがいくつも記されていた。いわゆる、報酬はめちゃくちゃ高かったが、難易度の高いクエストだ。カズマは持ってきたそれを取り上げて、アクアを怒鳴りつけた。
初心者の街にそんなクソ難易度のクエスト張り出しておくなよと思った。駆け出しの俺たちが、そんなの受けれるはずないんだからさ。
……魔王軍幹部を倒した俺たちなら、と一瞬思わないでもなかったが。
しかし、あの時は運がよかっただけだ。
そもそも、ダンジョンとなると勝手が違う。地上探索ですらまともにできないのに、受けられるはずない。
じゃあカズマはどれがいいと思うわけ？　と、腰に手を当てて鼻を

鳴らしたアクアを横目に、めんどくせーという表情を隠しもせずに掲示板に向かった。もちろん、美味しいクエストなど早々増えているはずもない。
　すると、つんつんとカズマの背中がつつかれる。おそるおそるな表情の、ゆんゆんだ。
「あ、あの。カズマさん……クエストじゃなくて、ダンジョンに潜ってみるっていうのは、その、どうでしょうか……？」
「ダンジョンに？　でも、経験のない俺たちじゃさすがに無理じゃないか？」
　カズマは不思議そうな顔をした。アクアは我が意を得たりといわんばかりに手をたたき合せる。
「そうよ、わかってるじゃないゆんゆん!!　ダンジョンはお宝でいっぱいだもの。王都では、一回で何億ってエリスを稼いだ人もいるって話よ。ほらカズマ、やっぱりそれで行きましょう！　うまくいけば億万長者にだってなれるわ！」
「経験のない俺たちがダンジョンなんて潜ったら、一発で囲まれて終わりだっての！　高レベルのダンジョンじゃ、俺の使える盗賊スキルだって通用しねーし。てかフェンリルなんて明らかやばそうなやつのダンジョン、行くならお前一人で行って食われてこい!!」
「うー……仕方ないわね。じゃあ、他のダンジョンでもいいわよ。私のアークプリーストの魔法に、カズマのスキル。あとはそこの二人のアークウィザードの魔法があれば、そのへんのダンジョンなんて楽勝だと思うんですけど？」
「まあ、そりゃそうだが……お、そういえば、ゆんゆんは真っ当なアークウィザードだったっけ。ショウ、お前もとうとう攻撃魔法を使えるようになったって言ってたよな」
「うん……まあ、うん……」
「……あっ」
　へこんだ俺を見て、何かを察したカズマは慌てて話を逸らした。
「うん！　まあなんだ。やっぱ、経験者なしでいきなりダンジョンってのは、どう考えても不味いよな！」

「でもダンジョンでもないとわたしたちの借金は返しきれないわよ？」
「わたしたち、じゃなく、お前の作った借金な」
「そ、それなら、ここの近所に初心者向けのダンジョンがあるって聞いたことがあるんですけど……そ、そこはどうかな？」
「そんなダンジョンがあるのか？」
全員に目配せする。そういえば、この前の宴会でその話をしていたっけ。思い出していると、先にアクアが説明してくれた。
「そういえば、アクセルの近くに初心者向けのダンジョンがあるとは聞いているわ。けど、もうさんざん探索された後だから、いいものは残ってないと思うわよ？」
「ふーん。そうだな……でも、俺たちみたいなパーティーにはうってつけだ」
「練習がてら行ってみるってのはありじゃないか？」
「ええー……？　でも初心者用ダンジョンなんて大したお宝はなさそうね？」
「今後、高難度のダンジョンに潜るのに必要な経験になるだろうが。よし、じゃあ今日はそこに行ってみようか！」
「う、うん。じゃあみんな頑張ってきてね……」
「いや、俺らも行くんだぞ？」
「ふえっ!?　ほ、ほ、本当にいいの？」
「行く流れだったろ。それにカズマ達二人だけで行かせるわけにはいかないだろ」
「わたしなんて一回もダンジョンに潜ったことないから、皆さんにご迷惑をかけるかもしれないし、いつも森の実習ではみんなに忘れられて置いてけぼりになっちゃうし……」
とかなんとか。
両指をつんつんしながら俯いてぶつぶつ言いはじめたので、可哀想になった。ほらー行くわよ！　とアクアが先に行ってしまったので、俺は無理やり腕を引っ張ってギルドから連れ出すことにした。
「え、ふええ、ショウくん！　ま、まって、引っ張らないでー!!」

ダクネスとめぐみんも誘いたかったが、いないものは仕方ない。ゆんゆんの手を引いてギルドを出てから明日以降に伸ばしてもよかったなと思ったが、どうせ今回は金の手に入らない冒険だし、お互いのパーティーで都合を合わせるのも大変だろうということでカズマと話し合い。

今日の午後は、ここに集まった四人で、初心者御用達迷宮〝キールのダンジョン〟を冒険することに決まった。

第二話

キールのダンジョンは、まるで古代遺跡のような佇まいであった。
城を思い起こさせるその建築物だが、時間の流れからか、いまやその風格を全く異種のものに変えていた。一体どれほどの年月が経過したのだろう。入り口を構成する石材は劣化し、ダンジョンであることを示す固有の紋章もボロボロに欠けてしまっている。
ある種の威圧感を放つ建造物を前にして、もしこれが探索されつくしたと言われているダンジョンでなければ、軽い気持ちでダンジョンに潜ろう、などと言ったことを後悔していたに違いなかった。
入り口は冒険者達を闇に誘うべく、奥の暗闇へと長く続いている。
物語でダンジョンは地獄への入り口と表現されるが、よく言ったものである。俺たちの前に現れた下り階段を前に、案の定尻込みしてしまっていた。
「ここがダンジョンか、なんか物々しいな」
「見たことない紋章に古びた建物か。うわ、なんか、すげえ異世界って感じする……」
「ほら。二人ともバカなこと言ってないで、さっさと潜るわよ」
異世界情緒というものが分からないアクアに呆れられた。
まず俺たちはパーティーの隊列を考えることにした。だが隊列といっても、この場には全員後衛しかいないのでよく考える必要がある。
冒険者にアークウィザード二人、そしてアークプリーストという微妙な組み合わせ。
初心者ダンジョンに挑むには十分すぎる戦力といえる。とはいえ、ゆんゆんとアクアは前に出せない。ここは男が、という見栄と意見の一致によって、カズマと俺が先行することになった。
「ここがダンジョン……なんだな。嫌な雰囲気だ……」
ダンジョン内に足を踏み入れると、得体の知れない何者かに肌を撫でられたような錯覚に陥る。カズマが思わず後ずさってしまったのも無理はないと思うくらい、不気味な空気に満ちていた。

用意していたギルド貸し出しのカンテラを掲げて、中に踏み込んでいく。
　既に何人もの冒険者が探索済みであるという情報を事前に聞いていても、とても気を抜くことはできなかった。道が狭いという点だけでも、未知の環境は相当なプレッシャーだ。いつどこから敵がやってくるかもわからない。今にも、背後から襲いかかってくるかもしれない。奥に進んでいるうちに、そんな不安が胸から溢れてくる。
「いったいどこまで降りるんだろうな、この階段」
「まだしばらく続いてるわよ。それよりカズマ、敵感知スキルはちゃんと発動してるんでしょうね」
「当然だろ。っていうかアクア、さっきから危なげなく歩いてるけど、もしかして見えてるのか？」
「もちろん。カズマは知らないかもしれないけど、女神の目には全てを見通す力があるの。今は地上に降りているから全てとまではいかないけど、闇を見通すくらいは余裕よ」
「す、すごいです、アクアさん！」
「ふふん。もっと褒めてもいいのよ」
　ゆんゆんが尊敬の眼差しを向け、アクアは増長してまた胸を張った。
「それよりカズマ、気をつけたほうがいいかもしれないわね。この先から嫌な気配がするわ」
「女神が嫌な気配ってお前、アンデッドの臭いでも嗅いだか？　まさかカエルじゃないだろうな？」
「そりゃカエルは苦手ですけど……ってそうじゃなくて！　くんくん……アンデッドでもないし……うーん、わからないけど、とにかく気をつけなさい。なんかすっごい嫌な臭いがしてるの」
「そうか？　俺は何も感じないけど。二人はどうだ？」
　俺もゆんゆんも鼻を嗅ぐが、カビ臭い臭いこそすれ、特に何も感じない。
「そうじゃなくって……この臭い、どこかで嗅いだことがあるのよねー……なんだったかしら」

「ちょっと待て、前から何か来てるみたいだ」
カズマが手で三人を制する。どうやら、敵感知スキルに反応したらしい。
何が来ても対応できるように、身構える。すると次第に聞こえてくる。低い声のような音……白い、包帯？　人？　いや、違う!!
「お、おおおっ!!?」
「ななな、なんじゃありゃあ！　ほ、ほ、包帯巻いた干からびたおっさんだ！」
「落ち着いて二人とも！　ただのアンデッドだよっ!?」
暗闇の中、カンテラの明かりに照らされたのは、干からびたミイラのような物体だった。剣を片手によろよろと近づいてくるのが見えて仰天し、頭が真っ白になりかけた。
アンデッドの群れは前にも遭遇したことがある。しかも今回はたった三匹。
だというのに突然のことすぎて、慌てて何も考えられなかったのは、初めてのダンジョンで気が張っていたせいにちがいない。冒険者としては致命的な隙を見せた俺たち一行だが、一人だけ冷静なパーティーメンバーがいた。
「迷える死者の魂よ、女神アクアの名においてあなたたちを浄化します……天に還りなさい、”ターンアンデッド!!”」
身体を蒼く輝かせながらそう告げると、三匹のミイラの立っていた地面に淡い青色の光が浮かび上がる。
光にあてられたアンデッドのうめき声は徐々に弱くなり、こちらに伸ばしていた腕を垂れ下げる。死体は光の粒子となり、ふわりと空に消えて、その場には何も無くなった。
暗闇でパニック気味だった俺ら三人はぽかんと一部始終を見ていた。
「ふふん、アンデッドならアークプリーストであるこのアクア様に任せなさい！」
まるで絵画に描かれる女神のように慈悲深い表情は、一転して子供のような威張った表情……どや顔に様変わり。

「たまにはやるじゃないか、アクア。ほんのちょっとだけ、見直したぞ」
「何よ、ちょっとだけなの？　ま、いいわ。とっとと行きましょ。言っとくけど宝は見つけたもの勝ちだからね！」
「探索され尽くしたダンジョンにそんなものがあるのかね……」
「……これは、俺たちの出番はないかもな」
「油断しないでね。こういうところは、いろんな種類の危険なモンスターが生息してるって紅魔の里で習ったから……」
　勇んで先に進んでしまったアクアを追いかける。すると、前で再び青色の光が輝いた。
　またアンデッドが出たのか。
　これはしばらく俺たちの出番はないだろうな、と思っていると再びダンジョンの廊下が青く光る。消えて、光る。繰り返す……さすがに多くないか？
「おーい、アクア。前に出過ぎだぞ、戻ってこーい！」
「そんな場合じゃないわよ！　ちょ、ちょっと三人とも！　早くこっち来て!!〝ターンアンデッド〟！　いやぁぁぁ！　多すぎよ、こっち来ないでーー!!」
「お、おい!?　大丈夫かよ!?」
「ま、待っててください！　ええと、〝ボトムレス・スワンプ〟!!」
　ゆんゆんが魔法を唱えると、アクアの正面の廊下が沼に変わり果て、押し寄せようとしていたアンデッド達の足がずぶりと沈み込む。しかし、それでも沈んだアンデッドの背中を踏みつけて、耳のでかい猿のような生物が何匹もこちらに迫ってくる。
　仲間を犠牲にするなんて。な、なんて執念深いモンスターだ！
　沼が越えられそうだと分かるや否や、カズマが、前線で慌てふためくアクアの手を引っ張ってこちらに引き寄せ「ちょっと静かにしてろ！」口を塞ぐ。
「おい、いいから静かにしろ！　な？」
「んーー！　んーっ!!」
　俺もゆんゆんと一緒に、女神の口を塞ぐカズマの近くに寄りそっ

た。その目の前で、奇妙な小柄なモンスター達があたりを見回した。
あれは……グレムリンか？
悪魔に分類される十匹程度のモンスターは、ゆんゆんの作り上げた沼を越えたあと、近くにいる俺たちに気づかなかった。カズマはもごもごと呻いて、手をはずそうとして暴れるアクアを抑え続けている。
真正面にいるグレムリンたちは、しばらくあたりを探しているみたいだったが、やがて奥に引き上げていった。
ようやくアクアの力が、カズマの手の力を上回り、荒い息遣いが聞こえてくる。
「ぷ、ぷはっ。な、な、何するのよ!!　あやうく窒息するところだったわよ！」
「何って、助けてやったんだろうが！　ったく。アンデッドもわんさかいるみてーだし、パーティーから離れて一人で先に進むなよ、いいな？」
グレムリンもまた暗闇を見通すことができる魔物。あらかじめ、そういう魔物が出ることは知っていたので、あらかじめ俺が覚えていた透明化の魔法を発動していた。
最初から目のないアンデッドには効かなかったようだが、小悪魔の目を欺くことはできたようだ。
「ってアクア！　まだ来てる来てるっ、今度はゾンビだ!!」
「へ、またぁ!?　あーもうなんなのよーっ！　〝ターンアンデッド〟!!　〝ターンアンデッド〟!!　〝ターンアンデッド〟ーっ!!」
沼をものともせず近づいてくる、廊下一杯の死者の群れ。ついでに今度は人型だけでなく、蝙蝠の屍までもが襲いかかってくる。
しばらくすると、押し寄せてきたアンデッドはようやく途切れた。アクアがぜー、ぜー、と息を吐く。
「はーはー……ここ駆け出しのダンジョンよね。なんでこんなにアンデッドが出てくるわけ？」
「確かに妙だな」
憤慨し、誰もいなくなった闇に向かって怒鳴り散らした。
もちろん既にアンデッドはすでに浄化されており、魔法の効果が消

えたため、ゆんゆんの作った沼も無くなっている。
「初心者用ダンジョンって話なんだがな。それこそアークプリーストでもいないと、駆け出しの冒険者がこんな量を相手にできるはずないだろ。入るダンジョンを間違えたんじゃないのか？」
「でも、アクセル周辺には他のダンジョンなんてなかったような……」
「もしかして、ダンジョンに何かあったのかもしれないな。どうするカズマ、もう少し奥まで行ってみるか？」
カズマは少し考えているみたいだったが、すぐに結論を出す。
「もし何か異変が起きているなら、素直にギルドに戻って報告するのがいいのだろうな」
「ってことは、一旦引き上げるのか？」
「えー……私としては、奥からなんか嫌な気配がするから、それを確かめに行きたいんですケド」
「無茶言うな。こういう場合は、ちゃんとギルドに報告して、調査してもらうのが筋だろ」
……そうだな、撤退しよう。
俺たちがそんな雰囲気になったときだった。ゆんゆんが、キャッ、と可愛らしい悲鳴をあげた。
「どうした!?」
「あ、あの、あ、あれなんだろ……？」
全員が、今やってきたばかりの方向に振り返る。
カンテラを掲げると、紅色の光に照らされて小柄な姿のそれの姿がはっきりと見え、背後に影が色濃く映し出された。一瞬、モンスターかと思ったが、そうではなかった。
「な、なんだこのちっこいの」
その背丈からゴブリンかと思ったが、光源に近づくと、思っていたそれとは姿が異なっていることがわかった。
人型のそれは蛮族のような姿ではなく、それどころか、小さな礼服にスカーフのような紳士風の格好をしていた。二頭身で、顔に仮面のようなものをつけているのが特徴的。どう見ても小型の人間だ。
いや、デフォルメ感があるので、ぬいぐるみといったほうがいいか

もしれない。
俺たちの前で足をぴたりと止めたその仮面紳士をしばらく見守った。
「……なんだろう、これ」
襲いかかってくる様子はなさそうだったので、みんな首を傾げた。
ゆんゆんが不思議そうに屈んで、その小さな人形を観察する。小さな仮面の紳士に「ねえ、あなたはどこから来たの」と語りかけると、〝それ〟は思い出したように、ゆんゆんに向かって歩き始める。すると、紳士はゆんゆんに抱きつかんとばかりにジャンプした。
「待って、そいつ危ないっ!!」
「えっ？」
振り返るや否や、アクアがゆんゆんを突き飛ばした。
抱きつかれようとした人形は、そのまま宙を舞い……地面に落ちる直前に、白く輝いた。
そして廊下に、響く軽快な爆発音。
軽い爆風に服がはためき、突然の出来事に、俺とカズマはあんぐりと口を開けた。すぐに、我に返る。
「お、おいゆんゆんっ!?　大丈夫かっ!!?」
我に返った俺は、煙を払ってゆんゆんに駆け寄った。手を引くと、のそりと起き上がって、何が起きたかわからないという風にぽかんとした表情で見返してくる。
一方でアクアは「てて……」と頭をさすりながら、カズマに手を引かれて起き上がった。
よかった、無事だった。しかし安心する前に、とこ、とこっ。何かが近づいてくる音が聞こえる。なんの音だ。嫌な予感しかしない……カンテラを掲げて、今度こそ全員青ざめた。
「……みんな、逃げろッ!!」
そう叫んだのは誰だったのか。地面から弾かれるように立ち上がり、すぐさま、反対方向〜〜ダンジョンの奥に向かって走りだした。
照らし出された、百を超える自爆紳士の軍団が、足並み揃えて近づいてくる。さながら軍隊のようだ。

ニヤニヤとした笑顔で、てくてく。てくてくと。これまた廊下を埋め尽くしていた。
「なんなんだあいつらっ。さっきは、どこにもいなかったのに!!」
「ま、まって、みんな、おいてかないでぇー!?!!」
これは、明らかな異常事態だ。舌打ちしたい気持ちを抑えつつ、罠が出ないように祈りながら、まだ探索していない廊下を走り抜ける。しばらくして、開きっぱなしになった小部屋が見えて、飛び込んだ俺たちは扉を閉めた。
部屋の中にモンスターの気配がないことがわかると、ずるずると、背中から壁にもたれて四人同時に座り込んだ。
「はぁっはぁっ、な、なんなんだあれ」
「わ、わかんない。あんなの見たことないよ……」
「あーーーーっ！　わかったわ!!」
視線が、唐突に立ち上がったアクアに集中する。
「はぁ、おいアクアっ、お前なんか知ってるのか？」
「ダンジョンに入ったときから若干感じてたのよ！　この臭いの正体っ！」
「臭いって。そりゃ、まあ。この部屋はさっきよりカビ臭いけど」
「ちっがうわよ!!　悪魔よ!!　このダンジョンの奥にいくほど、悪魔のイヤ～な臭いが充満してるの!!」
悪魔、ねえ。
カズマを顔を見合わせるが、どちらも具体的なイメージを持っていないみたいだった。
「さっき言ってたグレムリンとかいうやつのことか？」
「あんなのは大したことないわ。そうじゃなくて、もっと強くてくっさい悪魔の臭いよ。この悪臭だと上級悪魔ってとこかしら。カズマさんたちは感じないわけ？」
「まったく感じない」
「これっぽっちも」
「わ、わたしも……」
カズマもゆんゆんも首を横振り。ならきっと、女神特有の感覚なの

だろう。
　しかし……上級悪魔か。名前からして、なんかやばそうな感じがするな。真っ先に三叉の槍を持った赤鬼や、三頭犬を思い浮かべる。
　このダンジョンにそんなやつがいるのかとぞっとした。悪魔の名前が出てから、震えはじめたゆんゆんに尋ねてみる。
「……参考までに、上級悪魔ってどんなやつなんだ。どのくらい強いんだ？」
「じょ、じょじょ、上級の悪魔っていったら……魔王軍の幹部くらい強いって言われてる悪魔のことだよ……どんな姿かは、習わなかったけど……」
　そう言われて、事の重大さを遅まきながらようやく理解した。世の中の理不尽に、カズマが叫ぶ。
「はぁ!?　なんでそんなやつが、こんな駆け出し冒険者のダンジョンにいるんだよ!?」
「私だって知らないわよ！　ふふん、でも任せなさい。あなたがたの目の前にいるのは一体誰だと思っているのかしら？」
「宴会芸の神様」
「ちっがうわよ!!　水の女神だって言ってるでしょ!!　たかが悪魔ごとき、この女神であるアクア様に敵うはずがないんだから！　これから、みんなで悪魔退治をするのよ！」
「馬鹿言うな！　ハンス並みのヤツなんてもう二度とごめんだっつうの！　おい、今すぐ逃げるぞ。準備しろ！」
「はぁ!?　カズマさんこそなに言ってるの。地上が悪魔に汚されようとしてるのよ？　この神聖なる女神アクア様が悪魔ごときから逃げ出すなんて、ありえないわ！」
「ふざけんな！　お前はいいかもしれないけどな、こんなとこで魔王軍の幹部並みに強いやつにこられたら、俺たちは即死だっての!!　いいから脱出だ、脱出！」
「あ、あの……でも、入り口のほうからはさっきの小人が来てるんじゃ……」
「え？　あっ……」

恐る恐る言ったゆんゆんの言葉で、今自分たちが追い詰められていることを思い出した。
「嘘だろ……ってか、なんか俺たちダンジョンの奥に誘導されてないか？　もしかして詰んでね？」
「ふんふん。おそらくあれも悪魔の策略ね、さっきのやつからも臭いがしてたから。でもこれは好都合ね！」
「なあカズマ。行くしかないんじゃないか？　上に戻ろうにも、あの数の小人爆弾はどうにもできないだろ」
「……マジかよ。俺たち、ここで死ぬのか？」
「安心しなさい。女神たるこの私がついているんですもの、心配ないわ！」
カズマは頭痛がした。確かに魔王軍幹部を倒した経験はあるパーティーだが、あれはたまたま、偶然だ。
魔王軍の構成員は本来、王都の高レベルの冒険者が相手取るレベルの強さで、幹部ともなれば、さらにその比ではない。アクアが側にいるから倒せるかも……と思わないでもないが、危ない橋は渡るべからず。所詮俺たちは、駆け出しの街アクセルの初心者冒険者なのだから。
「とにかく、今はここに隠れておこう。あの妙ちくりんな人形に見つかったら面倒だ。アクアを連れてきたのがせめてもの救いか……」
「私としては今すぐ悪魔退治に行きたいんだけど……ところでカズマ、ここはなんの部屋なのかしら？　って、ちょっと待って。ねえ……あれ、宝箱じゃない？」
「えっ。どこだよ、全然見えないけど」
「あ、待ってね。よいしょ……あれじゃないかな、ショウくん」
本当だ。ゆんゆんの掲げたカンテラの先に、小さな宝箱が置かれていた。
しかもただの宝箱ではない。黄金色の装飾で彩られ、所々に紅色の宝石までついちゃってる。おもわず固唾を飲んだ。宝箱だけでも相当な価値がありそうだ。
「え、なに!?　宝!?　やったわ！　こんなところに宝が残ってるなん

て、今日はツいてるわね！」
「待て待て！　バカ、こんなところに無造作に、あんな宝箱が置かれてるわけないだろ！」
「えー……何よ、つまらないわね」
　聞いたことがある。ダンジョンには宝箱があり、貴重なアイテムが手にはいる場合がある。だがそれを逆手にとって、モンスターが宝箱に擬態して冒険者を待ち受ける……そんなトラップのようなモンスターも、このダンジョンには生息しているらしい。
　しかし、カズマの表情が変わった。
「……いや待て。敵感知スキルに反応しないぞ。罠感知スキルにも反応なしだ」
　アクアはすっくと立ち上がった。
「お、おい待て！　危ないかもしれないだろ!?　こんな何度も探索されたダンジョンに宝があるわけないだろ！」
「大丈夫よ！〝ダンジョンもどき〟でもなければ、宝箱に擬態するモンスターなんてそうそういやしないわ！」
　俺は念のためその辺に落ちていた石を投げてみていた。
　コツン、と宝箱に当たった。だが、それ以上の反応は示さない。
　ゆんゆんも頷く。どうやら本当にあれは宝箱らしい。ほらみなさい、という風にカズマにどや顔を投げつけたアクアは、意気揚々と縁に手をかけた。
「一体どんなお宝が入っているのかしら……それっ！」
　思い切って宝箱を開いてみせる。
　何か起きる――そう思って、おもわず目を瞑った。しかし、なにもおこらなかった。
「……」
「……〝はずれ〟、だとよ」
「なによこれーーっ!!」
　うがーっ、と、女神は天井に怒鳴り散らした。
　三人で宝箱を覗いてみる……そこには〝はずれ〟と記された一枚の紙が入っていた。箱はこんなに豪華なのに……おや、これは。

「……この宝箱についてる金色の装飾、ペンキを塗っただけだ」
「ルビーかと思ったけど、全部ガラス玉だなこれ」
「て、手が込んでますね……こんなの、わざわざ作った人がいるんですね……」
「うがーーーっ!!　悪魔よ、これは悪魔の仕業だわ!!　女神たるこの私を騙すなんて、絶対許さないんだからー!!!!」
　何者かに騙されたであろうアクアが叫んで、木箱を乱暴にバンッと閉じた。その衝撃で紅色のガラスが部屋の隅に吹っ飛び、そんな俗っぽいことばかり言う女神の姿に、カズマの尊敬の眼差しはゴミを見る目に変わった。

第三話

二人はさておき、俺は宝箱の他に何か隠されているものがないか、ほとんど空っぽの部屋を続けて探し始めた。
目をつけたのは本棚だったが、ほとんど薄汚れていて読むことができない……そもそも字が読めなかったっけ。
「これ何の本かわかるか？」
「……ううん、何かの魔法に関係する本みたい。えっとね、死霊術に関する本かな」
「死霊術って？」
「アンデッドのことかな。ここのダンジョンの人、アンデッドの研究をしてたんだと思う」
パラパラとページを捲って目を通しながら、そう教えてくれた。
カズマとアクアもどれどれと顔を覗かせたが、難しい専門書らしく、内容はさっぱりわからなかったらしい。「へー、そんなこともわかっちゃうの。さすが紅魔族ね」とアクアが褒めると、照れてゆんゆんの表情が緩んだ。
「ほっ他の本も、アンデッドに関係する本ですねっ。紅魔の里じゃ習わなかったことが書いてあります……」
「ゆんゆん、もういいわ。アクシズ教の信徒たるもの、アンデッド系等のバッチイ本なんて触っちゃだめよ。それは禁書よ、禁書。さっさと燃やしちゃいましょ」
「アンデッドの本か。なあゆんゆん、ってことは、ここはダンジョンの主の部屋か何かじゃないのか？」
「あっ……！　う、うん。この本を読めるくらいの人だから、きっとすごい人だったんだと思う」
多少興味深そうに中身を見つめていたが、首を横に振って本を閉じて棚に戻した。
「なあ。そんなに難しい専門書なら、高く売れるんじゃないか？」
「はぁ?!　ちょっとカズマさん、アンデッドに関する本なんて今すぐ燃やすべきよ！　持って帰るなんて絶対ダメ！」

「お前の借金も減らせるぞ？」
「ぐ……わ、私がいつもお金でたぶらかされると思ったら大間違いよ！」
「なあ冷静に考えてみろアクア。お前の抱えてる借金、いまいくらだ？」
「え……ええっと、ひ、百万エリスくらい……だったっけ？」
「……お前、一晩でどんだけ飲んだんだよ」
どうやらその額はカズマにとっても予想外だったらしい。たった二、三夜でそんな額を使い果たしたのかと感心していると、アクアが精一杯抵抗した。
「だ、だからって、これは売らないわよ！　私にだって女神としての責任があるんだから！　いやー!!」
「よこせ！　借金をしたお前にははなから選択の権利はねえっ！」
「たすけて！　カズマさんが邪教に魂を売り渡しちゃう!!」
アクアがカズマから覆い隠すように本を数冊、まとめて棚から引っこ抜き、それに掴みかかったそのとき、カチリと奇妙な音が聞こえた。
何かのスイッチを押したらしき音だ。全員が思わず固まる中……本棚がゆっくりと横にずれて、埃を散らしながら奥に続く道が現れた。
「隠し扉……ですよね？」
「ああ……」
「おいアクアお手柄だぞ。この奥にさらに売れそうなものがあるかもしれん」
「……」
「おいアクア、拾い食いして腹でも壊したか？」
「ちっがうわよ!!　……なーんか、この奥。すごい臭いの。みんな気をつけて、何かほんとにやばいものがあるわ」
奥は暗闇に包まれているが、どうやら部屋のような構造になっているらしい。
俺たちは顔を見合わせて、そして、カズマと俺を先頭に先に進んだ。そしてカンテラを持ち上げて、部屋中を照らす。

「うわっ!?」
「きゃぁっ!!」
カンテラを掲げた以上の圧倒的な光量が、俺たちを襲った。
すっかり暗闇に慣れた目を思わず覆い隠すと、瞼の向こう側に、うっすらと人影が見える。影はくっきりと見えるのに、完全にシルエットと化したその人影は優雅に手を振って一礼した。
「ほう。これはこれは、なかなか面白い侵入者ではないか。歓迎するぞ、冒険者の卵よ」
男の声が聞こえると、光は徐々に弱まり姿が見えるようになる。さっきと同じような古びたその部屋に立っていたのは、魔導師のようなローブを被った男だ。
手足は衣服に隠され、顔は奇妙な意匠の仮面を装備しているおかげで見えなかった。だが、大きく開いた口元の肌がくすんだ緑色。アンデッドだ。しかし、今までに出会った呻くだけの怪物とは明らかに違う。
「な、何だお前は!」
「ふうむ……名を名乗る時は自分から……と思ったが、貴様らは、我輩がダンジョンに訪れ、この身体を借りてから初めての客である。故に特別大サービスで、先に我が名乗りをあげるとしよう。我輩、ダンジョンの主であるキールの代理人、名をバニルと言う。以後、お見知りおきを」
男は紳士と言うにふさわしい礼儀正しい態度で、腕を払うように一礼した。その優雅な一挙一動は、まるで宮廷魔導師のよう。
バニル、どこかで聞いたことがある名前だ。一体どこで見かけたのか……しかし思い出す前に、男は言葉を続けた。こちらのパーティーを見定めるように口元を歪めながら、顎をさする。
「〝セイクリッドエクソシズム〟っっ!!」
「ほう……なるほど。貴様らは、うぉっ!?」
「なっ、アクア!?」
何かを言おうとしたバニルだが、それよりも先に、アクアが聖魔法をぶっ放したおかげで中断した。

「……おいそこの水色の小娘！　貴様、少々常識が欠けているようだな。人が喋っている時に邪魔するなと親に教わらなかったのか？」
「うるさいわね!!　三人とも、気をつけて。こいつ悪魔よ！　しかもそこらの悪魔じゃない、大悪魔よ！」
「そうとも、よくぞ見破ったな。我こそは魔王軍幹部にして、地獄の公爵バニル様である！　ハハハ、よくぞここまで辿りついたな冒険者ども!!」
「待て、魔王軍だって!?」
　カズマが「また幹部かよ!?」と、叫んだ。同時に、くいと袖を引かれた。隣を見ると、ゆんゆんの手が震えている。
「しょ、ショウくん。た、大変だよ。あの人からすごい魔力を感じるの……」
「ゆんゆんでもそう感じるのか。俺は全然だ……けど、魔王軍の幹部が、なんだってこんなところに」
「ふむ、その疑問はもっともであるな。無論、目的があって我輩ここにやって来たわけだが……」
　見定めるように四人に順に視線を向けて、顎を手で撫でた。
　一体何のために、こんな辺境の地へ？　そんな疑問の視線が四人から突き刺さるが、本人はいたって気楽なもので「ああ、そうそう」と、今思い出したかのように手をたたき合わせた。
「平たく説明させていただくと、上司である魔王のやつに元幹部にして、復活して幹部候補筆頭となったハンスを滅ぼした冒険者がこの街にいるらしいのだ。でもって、その冒険者に挨拶してこいと言われ、この街を訪れたのである」
「えっ」
「え、ええっ……？」
「あの悪魔さん、それはマジ？　この街にいるのは魔王軍幹部どころか、魔王軍一人にすら歯が立たないレベル２０以下の初心者冒険者ばかりですよ？」
「間違っておらんぞ。ここはアクセルであり、君たちは今話した冒険者に心当たりがあるようだが？」

「あの、ちょっと作戦タイムをもらっても？」
「ああ構わんとも。存分にとりたまえ」
「おいみんなちょっと集合」
思わず顔を見合わせた。だらだらと汗が流れ始め、ヒソヒソと裏会議で確認し合った。
俺たちじゃね？　俺たちだな。私たちね。私たちです……。
意見は当然のように一致。この魔王軍幹部とやらは、あの時アルカンレティアにいた冒険者六人を探しにきたらしい。
よし逃げよう。
カズマと視線を合わせ、言葉を交わすことなく意見を一致させる。だがそれを口にする前に、身体を射抜くような恐ろしい気配を感じ、慌てて視線を地獄の悪魔バニルに戻すと、両手の親指と人差し指で長方形を作り俺たちを見据えていた。
「……ほう！　これは面白いことになっているようだ。まさか、こんなところで女神と相見えることになるとは！」
「なっ!?　なんでそれを！」
「分かるとも。この大悪魔バニルの瞳は全てを見通す！　……とはいえ、そんな能力使わずとも、やたらめったら眩しく見えるそこの女がそうであるということは、悪魔なら誰でも分かるだろうがな」
何かのスキルを発動させていることは明白だった。バニルの仮面の奥に赤い光がギラリと宿り、不気味な予感を感じた。
まるで、この悪魔に心の奥底を見透かされているよう。しかしそれより、悪魔が女神であることがバレていることを知って心臓が鳴った。心が読まれたのか、それともアクアが悪魔を察知できるように、悪魔も女神を察知できるのか。
とにかく両者はお互いの存在を正しく認識したようだ。バニルはアクア個人を見て舌舐めずりした。その仕草にゆんゆんがぞっとしたようで、両腕で体を抱きかかえた。
当人のアクアはというと、ただただ嫌そうに顔を顰め、はぁぁと大きなため息を吐いた。
「悪魔がアンデッドの体を乗っ取るなんて初めて見たけど、便所以下

の臭いね。魔王軍だか何だか知りませんけど、この部屋、悪魔とアンデッドの臭いしまくりで、臭くてたまらないんですけど？　ちゃんと自分の存在を抹消してから換気しといてもらえます？」
「言うではないか、少し鼻が敏感な駆け出しのプリーストよ。駆け出しにしてはなかなかのものであったぞ。それほどに臭いが気になるというのなら、ここまで訪れたその努力を讃えて、我輩特製の鼻栓を差し上げようではないか。ほれ」
「いらないわよ!!　この悪魔、さっさと私の神聖な魔法で浄化されてしまいなさい!!」
「フハハハ!!　地上に墜ちた女神程度の魔法で、我輩が……ん？　何だこれは？」
　さんざ高笑いをあげていたバニルが、新たに放たれたアクアの魔法を回避した途端、足が地面に沈んでいった。ゆんゆんが素早く詠唱を終え、叫んだ。
「〝ボトムレス・スワンプ〟！　い、いまです、アクアさん！」
「お手柄よっ!!　食らいなさい、〝セイクリッド・エクソシズム〟!!」
「うぉぉぅっ!?」
　女神の魔法が真っ直ぐバニルに向かい、慌てて腕で聖なる光を防御するも、抑えきれずに顔面に直撃……したと思ったが、曲芸のように身体を捻ってかわし、魔法はフードを僅かに擦るだけだった。
　通常なら当たっても何の効果もない魔法。しかし悪魔に対してはひどく強力な一撃であったらしく、かすった仮面がかすかに煙をあげている。沼化していない地面に膝をつき、悪態を吐いた。
「ぬぅぅぅ、こんな初心者の街に頭のおかしい紅魔の一族までいるとは、さすがはハンスを倒したパーティーというところか。駆け出しとは思えん面子ばかりのようだ」
「あっ、頭のおかしい!?　……うぅっ」
「おい悪魔、ゆんゆんを虐めるのはやめてもらおうか！」
「……今のは、そんなつもりはなかったのだがな、おおっ!?」
　ゆっくりと、よろよろ立ち上がったバニルだが、不意打ちで再び飛んできた光を跳躍でかわした。またアクアだ。悪魔浄化魔法を次々

に連発し、バニルはそれをかろうじてかわしていく。
「ええい！　やめんか、話もできん!!　今日は見逃すつもりであったが、どうしても痛い目に遭いたいようだな、地上に堕ちた女神よ！」
「うるさいわね！　みんな、悪魔の言うことなんて聞く必要ないわ。とっとと浄化されて消えてしまいなさい！」
「いいぞアクア、そのままやっちまえー!!」
「うぬぬ、舐めるなよ。この身体は最高峰のアークウィザードのもの。貴様を倒す手段などいくらでもあるのだよ！」
　案外、このまま自称魔王軍幹部の悪魔を倒してしまえるのではないかと少し思ってしまった俺たちだが、そううまくはいかないようだ。
　バニルが両腕をアクアに向けて伸ばし、茶色の紙を千切る。すると幾重もの紅色の魔法陣が展開され、その光に呼応するように壁から土がこぼれ落ち、積み上がって形を為した。
　ただの土塊であったはずのそれらは、人型となり、タキシードを着た小型の仮面人形に変貌する。部屋に、総計数十体。湧き出てきたそれには見覚えがあった。
「これは、さっきの……!!」
「そう。これぞ我が固有スキルのバニル人形さん達だ」
「……なんか気の抜けた名前だな。って、おいまずいぞ！」
「威力は既に知っているだろう、さあ行くのだ。そして女神よ、食らうがよいわッ！」
　ニヤニヤと笑っているように見える人形たちは、主人の命令を受けてひた、ひたと行進を始めた。俺たち……というより、アクア囲むように。
「え、ちょっと。えっ!?　待って、〝セイクリッドエクソシズム〟!　え、き、効かないっ!?　〝セイクリッドターンアンデッド〟!、ちょ、ちょっと!?　か、カズマさん！　カズマさん、助けてーー!!」
「お、おい！　待ってろ！　っ、何だこいつらっ!?」
「フハハハッ！　貴様らを害するつもりは毛頭なかったが、そこのプリーストだけは別よ。これはほんの挨拶代わりだ、んー、受け取りたまえっ！」

気づけばアクアだけでなく、他の三人にも少数だがそれぞれ迫ってくる。じりじりと壁際に追い詰められ……背中が、ぴたり石壁とくっついた。これだけの量、いっぺんに自爆されたら目も当てられないことになる。

アクア以外の三人に迫った人形は、そうやって追い詰めてから動く様子がないが、一歩でも動けば自爆しにくるだろう。大ピンチだ。

「いやぁああーーーっ！　こ、こないでーーー！」

「くそっ、アクア!?」

「やれ！　バニル人形さん達よ!!」

すっかりバニル人形に囲まれたアクア。そしてとうとう、囲んだ全てのバニル人形がアクアに飛びかかろうとした――だがそうはならず、直前で姿がかき消え、空中でぶつかったバニル人形さん同士がぶつかりあい、うつ伏せの人形の山を作る。そして一斉にぽふん、と消えた。

「アクアが消えたっ!?」

「俺だよ！　今だアクア!!」

「よくやったわねショウ！」

「何っ、急に別の場所から現れただとー!?」

大仰に驚いた仕草で、さっきと別の場所から姿を現したアクアに振り返るバニル。

「よくもやってくれたわね、今度こそ食らいなさいッ！　〝セイクリッド・ハイネス・エクソシズム〟ゥゥッ!!」

「なっ……!!　ぬおおおぅっ!!!!」

泥に片足を捕らわれ、突然標的が姿を消したことに困惑するバニル人形に気をとられたバニルに放たれた女神の魔法が、今度こそ直撃した。

蒼い光の弾丸は身体を直撃して、衝撃を受けた壁に蜘蛛巣状のヒビを入れた。

やがて地面に落ちたバニル。しかし喜ぶ間もなく、すぐさま満身創痍といった風に起き上がった。ローブは土に塗れ、悔しげな表情が浮かんでいる。

「やったか!?」
「ぐぬぬぅ……おのれぇ、女神めええええ……なんてな!!」
「何!?」
　腕を抱きかかえて悔しげだった表情から一転、両手を天井にあげ、ハハハッと笑いながらなんでもない風に首を振った。
「か、カズマさん!?　効いてない、わたしの魔法が効いてないんですけど!?」
「どういうことだ!?　お前、地上で調子に乗りすぎてとうとう女神じゃなくなっちまったのか!?」
「ちっがうわよ!!　この神聖なオーラがあんたには見えないわけ?!」
「フハハハ、地上に降りた女神の力など、今の吾輩には効かぬ。これを見るがいい!!　これぞ悪魔に対して害のあるあらゆる神聖魔法を完全無効果するアイテムよ！」
「なんですって!?」
　バニルは首にかかった紫色の宝石を埋め込んだネックレスを見せつけた。
　なんてことだ。そんな便利な魔道具が存在するのか。あれがある限り、アクアの攻撃は通らない。不味いことになったことに気づいたアクアは、一歩あとずさって歯噛みする。
「な、ならもーっと強力なのを何発でも打ち込んであげるわ！　これで終わりと思ったら大間違いなんだから！」
「ふうむ。それも面白そうだ。ならば吾輩も反撃に出たい……ところではあるが、今日はこのあたりにしておくべきか」
「あら逃げるつもり？　ふふん、やっぱりそのアイテムには限界があるみたいね！　それか、わたしの威光に気づいて恐れおののいたってわけね？　けど、逃がさないわよっ！」
「こちらとしても大変不本意で、残念ではあるが、こちらにも少々事情があってな。これで魔王のやつに言われたうち四人に挨拶は済ませたことだし、今は退かせてもらう……ところで女神よ、連れの男が、さっきから貴様の下半身にイヤらしい視線を貴様に向け続けているが、それは気にしなくてよいのかな？」

「はあ!?　ちょっとカズマさん!?」
「おい馬鹿んなわけねえだろ騙されんな!!　あーー!!」
「フハハ、よい悪感情であったぞ。さらばだ新米冒険者の諸君!!　しばしの後、また会おう!」
　振り返ったときには、遅かった。アンデッドの肉体を残して仮面が黒煙になって、天井に吸い込まれていく。
　慌てて駆け寄るも遅く、仮面だけがその場から消滅していた。おそらくあれが本体だったのだろう。溢れていた魔力のせいか、それとも放たれ続けていたプレッシャーのせいか、重圧な雰囲気は幾分か和らいだ気がした。
「あーー!!　逃げた、逃げたわよあのクソ悪魔っ!!」
「お前、どんどん言葉遣いが悪くなっていくな」
「そんなことよりカズマ!　いくらわたしが魅力的だからって、こんな時までジロジロ見るなんて何考えてんのよ!」
「見てねえよ!!　んなもん見るくらいだったら、ゆんゆんの胸をガン見するっつうの!」
「ひぃっ!?」
「あ、いやそのこれは違うんですその」
「ほーら!　やっぱり頭の中はエロいことで一杯じゃない、このヒキニート!　ていうか、うちの信者にそういう目で見ないでくれます？」
「だ、だから見てねーって!　っていうか、ちがーう!!　悪魔の言うことに簡単に騙されんなって!　な、二人は後ろから見てただろ？　見てなかったよな、な？」
「……」
「……」
「おい!　目を逸らさないでなんとか言ってくれよ!?」
「……はぁ。けど考えてみれば、このわたしの何よりも美しい姿を見るなというほうが無理ってものよね。それに、カズマが女の子のパンツをスティールする変態だっていうのは周知の事実ですもの。パーティーメンバーですし、まあ、端から見るくらいなら少しくらい我慢

してあげないこともないわよ。けど、ちゃんと時と場合を考えなさい。いいわね？」
「お前の威光なんざ、ギルドの酒場でゲロ吐いてるのを見てとっくに全部丸ごと吹っ飛んだわ！　寝言は寝てから言え、この駄女神！」
「あーー!!!　それはみんなには言わないでって言ったじゃない！　ゆんゆんの前なのよ!?　それ以上言うと許さないわよ、このクソニート!!」
「あの……二人とも、その辺で。あんなヤバい悪魔野放しにしたら、地上がめちゃくちゃになっちゃうんじゃ……」
喧嘩している二人も、俺が止めるとはっと顔を上げた。ようやく状況を思い出してくれたのだろう。よかった。
ちなみにゆんゆんはというと、後ろで途中から耳を塞いでしまっていたので聞いていなかった。終わりましたよ、と肩をつつくとほっとした顔で戻ってきた。そしてさっきよりも、カズマから５０センチほど離れている気がした。その申し訳なさそうに目を逸らす表情に、カズマは少し傷ついたように涙を流した。
「……そこにいるのは、誰、だ？」
地上に戻ろうとしているムードだった俺たちに、その声は冷水を注した。
恐る恐る振り向く。バニル……とは違う声の、緑色の肌をしたアンデッドが目を開けていた。

第四話

仮面がないので、今は表情がよくわかる。バニルは逃げたはずじゃないのか？　……そう考えていたために、油断しきった俺たちは、何が起きたのかわからなかった。

悪魔がいなくなっても、アンデッドは動き続けてる。いったいどうして？

真っ先にそれに気づいたアクアが杖を構える。しかし、雰囲気の違いを感じ取ったのだろう。カズマがアクアを留め、前に出た。

「さっきと声も雰囲気も違う。あんたこそ、何者だ？」

「おお、これはすまなかった。先に名乗るのが礼儀というもの。私は、キールと言う」

「キール？　あんたさっきのバニルってやつじゃないのか？」

「ちょっと待ってください。キールって、もしかして……」

「いかにも、お嬢さん。わたしがこのダンジョンの主だよ」

「え、どういうことだ？」

「えっとね、多分さっきの悪魔は取り憑いていただけで、今話しているのは別な人……アンデッドだと思うの」

ややこしい。しかしアクアもゆんゆんも理解しているようで、カズマと俺はやはり首をひねっていた。

「なるほど、確かに漂ってくる臭いも変わってるわ。さっきのバニルとかいう悪魔に身体を乗っ取られていたみたいね。さて浄化ね、〝セイクリッドターンアンデ〟……」

「ちょ、ちょ、ちょっと待て!!　早まるなアクア！　敵感知スキルに反応がない！」

「ええ？　むう、どういうことよ……？」

今回はさっきよりも幾分か冷静なようで、不満げながらもアクアは放とうとしていた魔法を停止させた。

「キールさん。あんたもさっきのやつと同じ魔王軍なのか？」

「いいや違う、フリーの元魔法使いさ。信じてもらえるかな？」

「……まあ、敵意もないみたいだし。話しあいで解決したいし、カズマ

いいよな？」
「はい」
「そりゃもちろん。聞いたかアクア？」
「うむむ……仕方ないわね。ちょっとだけよ」
　仕方なしという風に矛を収めた。大悪魔のときはもっと問答無用だったが、相手の理知的な言葉に冷静になったようだ。とはいえ、じろりと睨みつけてはいるが。
　ここは俺が話をする、とカズマが前に歩み出た。
「俺はカズマ。後ろのあの青い髪のアークプリーストがうちのパーティーメンバーのアクアで、あとの二人のアークウィザードと臨時パーティーを組んでる。見たらわかるかもしれないけど、俺たちは冒険者だ。あんたがここのボスなのか？」
「そうさ。とある事情で、長い間眠りについていたのだがね……さて、冒険者のカズマ殿。浄化されるのは望むところではあるのだが、少しだけ話をしても構わないかな？」
「アンデッドなのに浄化されたいのか？」
「あんまり時間はないわよ。あの悪魔を野放しにしておけないし……」
「それも含めて、まず君たちに謝らなければならないことがあるのだ。聞いてもらえないかな」
「……あの、やっぱりさっきの悪魔さんと関わりが？」
「ああ。実は、今日君たちがここに来ることを、わたしは知っていたのだよ」
　カズマの眉が顰められた。
「どういうことだよ。俺らがここに来るのを決めたのは、今日たまたまショウたちのパーティーに会ったからだぞ」
「君たちは、あの悪魔の正体を知らないようだね。彼は万物を見通す悪魔と呼ばれている、七大悪魔の第一席とまで呼ばれる男だ」
「なんだそりゃ、知ってるか？」
「わたしが知るわけないじゃない」
「だよな。けど万物を見通すって、そんな馬鹿なことが」

「いえ、悪魔は契約者の願いを叶えるその特性上……万物とまではいかなくても、心の中を見破る能力を持っている方も多いそうです」
「……魔王軍ってのは、ほんと関わり合いになりたくない奴らの集まりだな。なんでもありかよこの世界は」
　カズマはうへえ、という顔をした。俺も同意見だ。この世界に来てからはまともに過ごしているが、向こうの世界の記憶まで覗かれては厄介極まりない。消したハードディスクや、パスワードのかかったアカウントの中身まで丸見えになるのだろうか。勘弁してほしい。
　ってことは、魔王軍に異世界転生者であるということを知られてしまったかもしれない訳か……大丈夫だろうか。
「わたしたちが来るのがわかってて待ってたということは、何かしてほしいことがあるんですか？」
「……わたしを浄化してほしいのだ」
「つまり、ちゃんと天に召されたいってことですか」
「浄化されようとするくらいなら、アンデッドにならなければよかったじゃない」
「その通りだ。しかし、この話は少し長くなってしまうが……」
「いいわ、話しなさい。悪魔も気になるけど、何か事情がありそうだし。それにリッチーを放って戻るっていうのはちょっとね」
「リッチー……？　おい、リッチーだって!?　それってウィ……魔王軍の幹部にもいるくらい強い種族のアンデッドじゃないか!?」
　一段と驚いた声をあげた。魔王軍の幹部にもリッチーがいるのか、よく知ってたな。
　正体が明かされたからといって特に動揺した様子もなく、それから話し始めたリッチーの話を聞くことにした。最初は陰鬱な話が続くのかと思ったが、予想を裏切りなかなかスリルに満ちた人生の話であった。
「……つまり、そこのベッドで寝ている彼女がそうってわけ？」
「ああ。彼女はどうかね？」
「安心して、このお嬢様は安らかに成仏してるわ」
「それはよかった。とはいえ、彼女のことはそこまで心配していな

かったがね」
「お嬢様をさらって逃げ、そのお嬢様を守るためにリッチーになった、か。凄いのか凄くないのかよく分からない話だな……」
「す、素晴らしい話だと思います!! 魔法使いとしても、一人の女性としても、憧れます!」
「ははは、そう言ってもらえると嬉しいよ、紅魔族のお嬢さん」
「それで。さっきの悪魔とは結局どういう関係なんだ?」
「……ここで眠っているときに突然彼がやってきてね。それが初めての面識だったが、彼はわたしにこう言ったんだ」
『吾輩、魔王軍幹部のバニルと申します。ダンジョンの主リッチー殿とお見受けする、どうぞよろしく。さて、いきなりですまないが、目覚めてはくれぬだろうか?』
「それで長い眠りから覚めたってわけか。あんたはそいつと何を話したんだ?」
「このままでは、わたしは浄化されることなく長い時をここで待ち続けることになると。そしてその長い時の果てに、彼女の元に辿り着くことができなくなると、そう彼は言ったのだ」
　話が壮大すぎて、いまいちぴんと来なかった。しかし女神たるアクアだけは今の話を正確に理解したようだ。
「それは……まあ確かに問題ね。アンデッドは、そうある時間が長ければ長いほど罪深くなっていきやすいし、ここに引きこもっている間に何が起こるかもわからないしね」
「あの悪魔が嘘をついている可能性は?」
「ええと、悪魔は嘘はつけないはずだから……そこまではっきり言うということは、間違いないと思う」
「それで、あんたは何を話したんだ?」
「私を浄化できる人物がここを訪れる。だから、しばらくわたしの体を貸せと。そうすれば貴様の願いは叶うだろうと、彼は続けて言った」
「悪魔の契約ってやつね。契約してしまったなら、場合によっては女神でも助けられないわよ?」

「無論、契約は交わしていない。ただ、今日この時のために身体を貸せと、結局取り憑かれてしまってね。ああ、その間君たちに迷惑をかけてしまったようで、申し訳ない」
「それだけなら、別に俺らに謝る必要はないんじゃないか？　無理矢理乗っ取られてたんだろ？」
「それも理由だが、それだけじゃない。私が返事をする前に乗っ取られたとはいえ、その言葉に心揺さぶられてしまってね。その隙に付け入られてしまったのだ」
「……」
「それに、無理矢理乗っ取られていなければ、甘言に乗っていたかもしれない。そんなモヤモヤした気持ちのまま君たちに会ってしまって、本当にこれでいいのかと思ってしまってね」
　先ほど、自分の過去を陽気に話していたときとは一転して、表情が陰っていた。自分が同じ立場ならと思うと、彼の気持ちは理解できた。
　そのつもりはなくても、浄化されなければ、妻と同じ女神エリスの前に行くことができなくなってしまう。永遠にこの狭い空間に閉じ込められてしまうというのも、想像するだけで耐え難いというのに、そんなことを言われたら一体どうなってしまうのだろう。
　そんな気まずい空気漂う中。アクアだけがあっけらかんとした態度で、少し考えてから得意満面に言い放った。
「なんだ、てっきり契約したのかと思っちゃったじゃない。そんなことならなんの問題もないわ！　わたしに任せなさい！」
「……一度は悪魔に唆されかけてしまったわたしを、浄化してくれるのかい？」
「任せなさい！　この女神アクアの名において、とっておきの魔法であなたを浄化してあげるわ！」
「え……？」
　アクアは、キールの独白を聞いていなかったのか不安になるほど自信満々に、どんと拳で胸を叩いて太鼓判を押した。
　あっけにとられたキールに、逆にきょとんと目を丸くする。

「何よ。女神の言葉でも信じられないの？」
「め、女神……？　いやまさか。しかし、神聖なエネルギーを放っているとは思っていましたが……あなたは、まさか本物の……？」
「そう言ってるじゃないの」
「ああ……まさか、そんなことが」
　キールは初めてその正体に気づいたようだ。取り憑かれている間は意識がなく、バニルからは何も聞かされていなかったのだろう。
　カタカタと顎を震わせ始めたキールに寄り添って、微笑んだ。
「大丈夫。少しばかり道は逸れてしまったようですが、あなたが言うように誰かを想って、ちゃんと善行を積んできたなら、きっと正しい道に進めます」
「し、しかし。わたしはアンデッドで、しかもリッチーで……」
「安心して。あなたが何者であろうと、女神アクアの名においてそれを保証しますから」
「……あぁぁ……なんと言えばいいのだろう。悪魔が女神と引き合わせてくれるなんて、不思議なこともあるものだ……」
「んー……それは認めかねるけどね」
　フードを深めにかぶったキールは、声を震わせてそう言った。ほんの少しだけ陽気な笑みを浮かべていたのが印象的であった。
　カズマは顔を引きつらせてアクアを見つめており、ゆんゆんは二人を前に涙を浮かべていた。そして俺はといえば、ただただその二人のやりとりに聞き入っていた。
「なあショウ、あいつは誰に見える？」
「アクア」
「ギルドの酒場でどんちゃん騒ぎして宴会芸を披露してる宴会芸の神様といつの間にすり替わったんだ？」
「いいから、今は静かにしとけって」
　そして狐につままれたようなカズマをさておき、アクアは浄化のために準備が必要だと言って少しの間待つことになった。
　キールは涙をアンデッドの身体になりながらも、自らの妻であった骨の手をとり、浄化までの間は涙を浮かべながら髑髏と見つめ合って

いた。心なしか既に天に召されたはずの彼女は笑ったようにも見え、すぐそばに彼女の霊体が、キールの最後を見守るために浮かんでいる姿が見えた気がした。

一体このキールという魔法使いは、この薄暗い部屋でどれほどの時を過ごしたのだろう。愛した女性を守るためにダンジョンを築いて、この場所を守り続けるというその行動そのものが、とても眩しかった。

そして異世界にやってきて、魔法がうまく使えないからと言って昼から飲んだくれようとしていた自分が、とてつもなく恥ずかしくなった。……帰ったら魔法の練習をしよう。今は弱くても、練習を続ければきっと、ゆんゆんと同じくらいの魔法が使えるときが来るかもしれない。

涙腺が崩壊してしまったらしいパーティーメンバーをチラ見しながら、もう少し頑張ってみようと、密かに心に決めた。

やがて「さ、できたわよ。準備ができたらそこの魔法陣に入って」と地面に魔法陣を書いていたアクアが言い、浄化が始まった。神聖な青光に照らされたその浄化の様子を、他の三人は遠巻きに見守った。

アクアは優しく、そして静かにダンジョンの主であるキールに語りかける。神の理を捨ててアンデッドになったはずのキールは、最後の瞬間まで女神に祈りを捧げていた。

「……〝セイクリッド・ターン・アンデッド〟」

最後に、彼が何を思ったのかは分からない。

妻よ、今行く。

そんな言葉を最後に、安らかに微笑みながら光に包まれていく様子を見る限り、キールという一人の魔法使いの人生は、彼にとって満足のいくものであったことを物語っていた。

地上に戻ってきた俺たちは、すっかり夕日に染まった空に目をやられ、たまらず目を擦りながらキールのダンジョンをあとにした。
「まさか、初心者ダンジョン攻略に行ってあんな目に遭うなんて……どうなってんだよ」
「まあまあ、いいじゃない！　ねえカズマ、これ一体いくらになるかしら！　十万？　百万？　もしかして一千万エリスになっちゃったりして！」
「……ああ、よかったいつものアクアに戻ってる」
カズマは来るときには持っていなかった荷物を背負っている。
白布の中に包み込まれるのはキールのダンジョンで見つけた、宝石や黄金の数々。アクアが煌びやかな宝物に目を輝かせ、頭の上で何かを思い浮かべているようだ。
「いいか、わかってるとは思うが、こいつは俺たちのショウのパーティで折半だ。そしてお前への小遣いは全て借金返済に充てる」
「ええっ!?　ちょっと待ちなさいよ！　キールを浄化したのはわたしなのよ!!　少しくらい大目に見てくれたっていいじゃないの!!」
「……じゃあ聞くが、お前の借金は具体的にいくらだ」
「ええと、あの日の会計がいくらで、この日が……あ、あはははー……いくらだったかしらー」
「小遣いはなしだ」
「うううぅ……カズマさんの鬼！　この人でなし！」
俺は二人からそっと目を逸らした。
報酬はきっちり四等分という話だが、これほどの大きさの黄金、いったいどれほどの価値になるのだろう。いますぐそばに黄金の数々があって、それが全部俺たちのものだなんて、元日本人としてはなかなか実感が湧かない。
「ねえアクアさん、さっきの悪魔は大丈夫かな。どこにいるか分からない？」
「全然感じないわ。まったく、見つけたらただじゃおかないんだから！」
「さっきの口ぶりだとわざわざ俺たちに会いに来たっぽかったけど

……結局、何だったのやら。魔王軍の幹部ってのはほんと人騒がせなやつだよ」
「まあ、そう気にしても仕方ないさ。宝も手に入ったんだし喜ぼうぜ」
「そりゃそうだけど。はあ、ただお試しで初心者用ダンジョンに潜っただけのはずが、魔王軍幹部の悪魔と出会ったり、リッチーを浄化したり、とんだ大冒険だよ。もしかして俺は呪われてるのか？」
「そ、そんなことないと思うの！　わたしたちちゃんと生きていますしっ！」
　呪われているとまで言わなくても、かなり運が悪いことには違いない。
　ゆんゆんの言う通り、生き残っているのだから運がいいとも言えるだろうか。
「なんか嬉しそうだな、ゆんゆん」
「へ？　そ、そんなことないよ。こんな冒険者らしい冒険ができて、わ、わたし、今日はすごく嬉しかったです！　えへへ……」
「……まっ、確かに冒険者らしい一日だったのは確かだな」
　夕日に照らされた茜雲を見上げ、カズマは柄になくいい笑顔を浮かべていた。
　そんな風に笑い、愚痴りあいながら疲労困憊のまま四人で歩いて、やがてアクセルの街の門が見えると、誰かがほっと息を吐いた音が聞こえた。
　また無事に帰ってくることができた。
　そう思ったのだが。
「あーーーーーっ!!!!　やっと戻ってきましたね、この裏切り者!!」
「ん？　この声は……急に嫌な予感がしてきたぞ」
　声は門の方から。突然腹痛に襲われたときのような表情に変わったカズマは、唇を噛みながら恐る恐る自分たちに近づいてくる人影を目を凝らして見つめた。
「あら、めぐみんとダクネスじゃないの」
「お、おうお前ら。どうしたんだそんなに急いで？」
　目を逸らしながら、平静さを保とうとしているのが丸わかりな棒読

み声で問いかけるも、一人先に走り抜けてきた、冒険者装備のめぐみんは冷静さを取り戻さない。
「聞きましたよ!! わたしたちが一日中馬小屋で寝ている間、四人だけでダンジョンに行ったそうじゃないですか！ ゆんゆんを誘ってわたしを誘わないなんてどういう了見ですか!? あと、なんでそんな面白そうなことに誘ってくれなかったのですか！」
「いや！ だってお前はぶっ倒れて、寝てただろうが!!」
「カズマ、その背中に背負っているものはなんだ？」
ここ数日アクセルで見かけなかったダクネスだが、いつも通りの純白の鎧を着込んで首を傾げた。
ちなみに背後でゆんゆんがきょとんとして、それから誇らしげに胸を張ってみせた。それを見ためぐみんは何も言わなかったが、ぐぬぬぅと、悔しそうに歯噛みした。
「聞いてよダクネス！ なんとね、わたしたちダンジョンに潜ってお宝を見つけちゃったの！ だから今日はみんなでパーティーしましょう！」
「馬鹿！ さっき借金返済に充てるって言っただろうが!!」
「宝!? 宝ですって!? 聞き捨てならない言葉が聞こえてきましたよ！ それほどまでに心躍る大冒険をしてきたというのですか!?」
「ふふん、本当にすっごい大冒険だったんだから！」
「うぬぬぬぬっ……」
「落ち着け、そんなはずじゃなかったんだ！ 考えてみろ。初心者用ダンジョンに潜っただけで、魔王軍の幹部やリッチーに会うなんて誰が想像できるっていうんだ？」
「魔王軍幹部にリッチーですって!!? カズマっ、紅魔族随一のアークウィザードたるこの私を、そんな心躍る冒険に誘わなかった罪は重いですよ！」
「め、めぐみん、近い、近い!!」
「これは許し難いです。償いとして、今日からわたしの日課の一日一爆裂にとことん付き合ってもらいますからね！」
「だーかーらー不可抗力だっての!! そんなに会いたきゃ、お前一人

で挨拶にでもなんでも行け！」
「……ところでアクア、ショウ。魔王軍幹部と聞こえたが、それは大丈夫だったのか？」

ゆんゆんは嬉しそうに自分の世界に入り込み、めぐみんとカズマは取っ組み合いの喧嘩をはじめてしまった。ダクネスはそんな様子に呆れながらも、心配そうにそう聞いてきた。
「とりあえず生きて戻ってきたけどな。けどあいつは、アルカンレティアで幹部を倒した俺たちを探しているみたいだったぞ」
「でもでも、相手は悪魔で、このアクア様がついてるんですもの。大船に乗った気で任せなさい！」
「それは頼もしい限りだ。何かあった時は頼りにしている。……さて、何事もなかったようで安心したぞ。わたしも先ほど戻ってきたばかりでな。日が暮れないうちに、ギルドに戻らないか？」
「そうだな。おーい、みんな帰るぞ！」
もう日は見えないところまで落ちて、空は半分藍色に染まり始めていた。
いまだに騒がしいメンバーと、そして未だ夢見心地なパーティーメンバーと一緒になって、俺たちはアクセルの街に帰還した。

お知らせ

連載開始から一年半が過ぎてしまい、生存報告・更新が遅れてしまい、大変申し訳ありません。

作者のひびのん（現ユーザー名：クロ）と申します。

お知らせというタイトルから察した方もおられるかもしれませんが、連載中断と新連載投稿のお知らせです。

・更新できなくなった理由、作中で予定していた展開について

・今後の執筆について

以上の内容を後半に記しました。

僕自身、このすばが大好きで、続きを書きたいというモチベーションはあったのですが、色々な原因で続きが書けなくなってしまいました。

決断が遅くなってしまいましたが、取り急ぎご報告いたします。

今後の展開について。

まず作品が嫌いになったわけではない、という点だけはお伝えさせてください。

このすばという作品は今でも好きですし、そのためにＶｉｔａを買ったり、映画も当日に見に行きました。Ｗｅｂ版が映像になっていることに、大変感動しながら視聴しておりました。

自分の執筆した本作品についても、文章力等で未熟だと思う部分はありますが、「ゆんゆんかわいいい！」と思ってスタートさせた気持ちは忘れておりません。

もともとアルカンレティア編が終わったあとの展開としては、紅魔の里編（映画のお話）や、魔王軍の幹部であるセレナ編（Ｗｅｂ版で出てきたお話）を予定していました。

ですが、続きを書いている途中で、頭の中にキャラクターの台詞が

浮かばなくなってしまい、作品の形をなすことができなくなって、執筆を断念してしまいました。
特に紅魔の里編は、ゆんゆんを活躍させることのできる絶好のチャンスであったと思います。
全編を書ききることはできませんが、いずれ落ち着いた時に、できる範囲でストーリーを立てて、短編で筆を取りたいという気持ちもあります。
ですので、本作品はひとまず据え置きとさせてください。

今後の活動ですが、先日から　咲―Ｓａｋｉ―　という作品の二次創作の執筆を始めました。
後書きの方にリンクを貼らせていただきます。
まだまだ未熟な物書きですが、完結できるように続けていきたいと思っております。

最後となりましたが、感想で待っていてくださっている方がおられることは承知しておりました。
結論を出すまでお待たせしてしまい、大変申し訳ありません。
ブクマ・評価、感想等でのご支援、本当にありがとうございました。
物書きとして活動は続けていくつもりですので、よろしければ新作のほうも、応援していただけると嬉しいです。

これからもよろしくお願いいたします。
２０２０年０４月２１日　ひびのん